

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

感情を表すオノマトペに関する日中対照研究
— 「笑い」「泣き」に関するオノマトペを中心に —

SUN YI

2022年度

目次

序章	1
1 本研究の背景	1
2 問題提起	5
3 本研究の目的と意義	7
4 本論文の構成	9
第1章 先行研究の概観と本研究の位置づけ	12
1 日本語におけるオノマトペに関する先行研究	12
1.1 日本語オノマトペの定義と分類について	13
1.1.1 オノマトペの定義について	13
1.1.2 「擬音語」「擬態語」「擬声語」について	14
1.2 日本語オノマトペの音韻的・形態的特徴	17
1.3 擬似オノマトペについて	20
2 中国語におけるオノマトペに関する先行研究	21
2.1 中国語におけるオノマトペについて	21
2.2 象声詞と擬声詞	22
2.3 中国語オノマトペの音韻的・形態的特徴	26
2.4 象声詞と形容詞の境界について	29
2.5 ABB型形容詞について	30
3 日中オノマトペの対照研究に関する先行研究	32
3.1 日中オノマトペの翻訳研究	32
3.2 感情を表すオノマトペの日中研究	35
4 先行研究の問題点と本研究の位置づけ	38

第2章 研究対象と研究方法 41

1 「笑い」「泣き」に関するオノマトペ	41
2 利用するコーパスと辞書	42
3 研究対象の抽出基準	43
3.1 日本語オノマトペの抽出基準	43
3.2 中国語オノマトペの抽出基準	44
4 研究対象の抽出	44
4.1 日本語における「笑い」に関するオノマトペの抽出	44
4.2 日本語における「泣き」に関するオノマトペの抽出	48
4.3 中国語における「笑い」に関するオノマトペの抽出	50
4.4 中国語における「泣き」に関するオノマトペの抽出	53
5 本論文の研究方法	55

第3章 「笑い」に関するオノマトペ 57

1 日本語の「笑い」に関するオノマトペの使用	57
1.1 擬音語・擬態語の分布	57
1.2 オノマトペの用法	60
2 中国語の「笑い」に関するオノマトペの使用	66
2.1 擬音語・擬態語の分布	66
2.2 オノマトペの用法	68
3 まとめ	72

第4章 「泣き」に関するオノマトペ 74

1 日本語の「泣き」に関するオノマトペの使用	74
1.1 擬音語・擬態語の分布	74
1.2 オノマトペの用法	77

2 中国語の「泣き」に関するオノマトペの使用	81
2.1 擬音語・擬態語の分布	81
2.2 オノマトペの用法	83
3 「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの日中使用実態の相違点	86

第5章 日中オノマトペのシステムについて **89**

1 日中オノマトペの子音・母音の対立について	89
1.1 日中オノマトペにおける子音の対立と意味的区別	90
1.2 日中オノマトペにおける母音の対立と意味的区別	98
1.3 日中「笑い」「泣き」に関するオノマトペの母音分布特徴	103
2 語形上の特徴について	105
2.1 日中オノマトペにおける反復形	105
2.2 反復形の生産性について	108
3 文法的用法について	111
4 日本語における擬音語と擬態語の再定義	115
5 中国語の象声詞の再分類	123
5.1 中国語における「擬音語」と「擬態語」	124
5.2 中国語オノマトペの判断基準	126
6 まとめ	129

第6章 オノマトペに関する日中翻訳 **132**

1 日中・中日辞書の意味解釈から見た「笑い」に関するオノマトペの翻訳	132
2 オノマトペの日中対応関係	137
3 日中・中日辞書の意味解釈から見た「泣き」に関するオノマトペの翻訳	141
4 日中オノマトペの意味的拡張な用法	148
4.1 日本語側	149
4.2 中国語側	152

5 まとめ	154
-------	-----

終章	155
-----------	------------

1 各章の内容	155
---------	-----

2 本論文の結論	157
----------	-----

3 本論文の課題	160
----------	-----

参考文献	161
-------------	------------

各章と既発表論文との関係	168
---------------------	------------

凡例

- 用例番号は章ごとに振る。
- 図表番号は「章番号-章における通し番号」とする。
- 注は通し番号を付し、各ページに脚注として示す。
- 用例に付す記号として「*」は非文であることを表すものである。
- 用例を引用する場合に、中国語は“ ”で示し、日本語は「 」で示す。
- 句読点は「、 」と「。 」とを用いるが、引用に際しては原文に拠る。

序章

序章となる本章では、日中オノマトペの研究背景を概観した上で、先行研究にはどのような点に課題が残されているのか、また、如何なる目的を持つか、そのような課題を解決するかという点について述べる。さらに、本論文はどのような研究方法で研究を行うか、本論文の意義は何かという点について言及する。最後に、本論文の構成について述べる。これまで、日本語オノマトペと中国語オノマトペについての研究は進められているが、中国語オノマトペの定義はあまり定着していないため、その定義及び用法などについては、日本語ほど研究が進められているとは言えない。さらに、オノマトペは日中両言語に存在しているが、お互いにどのように翻訳されているのか、その翻訳には問題があるのか否かについて、未解明の問題が多く残されている。本論文では、「笑い」と「泣き」に関する日中オノマトペを研究対象にし、日本語オノマトペと中国語オノマトペの使用実態を調査した上で、日中オノマトペのシステムを再検討し、日中オノマトペの翻訳における問題点を明らかにすることを目的としている。

1 本研究の背景

オノマトペは、豊かな表現力を持っており、生き生きとした臨場感を与えられる語彙であると言える。オノマトペは言語音と意味の間に有縁的な関係があるとされる語群であり、その言語音と意味内容の関わりは模写の関係にあると言われる。オノマトペについて、小野（2015）は以下のように述べている。

オノマトペは、いわゆる擬音語と擬態語の総称である。「オノマトペ」という語自体は、フランス語の *onomatopée* を起源とし、近年、よく聞かれるようになった言葉である。

擬音語とは、「ニャー」（ネコの鳴き声）、「バタン」（ドアを閉める音）のように、動物の鳴き声や、ものがたてる音を言い表した言葉で、日本語以外にも、bowwow（犬の鳴き声、英語）、ronron（猫が喉を鳴らす音、フランス語）のように、見つけることができるものである。

擬態語とは、「どきどき」（興奮）、「ピカピカ」（光沢）のような、ある感情や状態について、そのもの自体には音がないのだけれども、その様子を、音の感覚を利用して表現したものである。

小野（2015:9）

以上の記述から、オノマトペは音や声をまねた擬音語と状態を真似た擬態語に大別されると言える。日本語と中国語にはどちらにもオノマトペが存在しているが、詳しく見ると、その定義、語数や使用率、および使用方法にはかなり相違がある。

そもそも、日本語と中国語とではオノマトペの定義が異なっている。日本語におけるオノマトペは「どかん」「ぎゃあぎゃあ」「わんわん」などといった事物の音や人・動物の声などを表す「擬音語」と「ふらふら」「でこぼこ」などといった物事の状態や様子などを感覚的に音声化して表現する「擬態語」の2つを指している。それに対し、中国語には“象声词”という用語があり、「象声詞」は実際の音、声や様子を言語音で象徴的に表す語を指していると考えている学者もいれば（劉 2001）、「象声詞」は音や声を真似した語だけに相当すると考えている学者もいる（耿 1986、野口 1995、楊 2015）。

次に、日本語のオノマトペの語数と中国語のオノマトペの語数は大きく異なっている。日本語は、オノマトペに富む言語の一つであると言われている（大野 1978、大坪 1989）。オノマトペは、言語活動においてモノの状態や音、動作の様態、ヒトの心理状態・感情などを生き生きと表現するという機能を果している。特に、日本語の漫画、アニメ、物語においてオノマトペが多く使われて

いる。このように日本語においてオノマトペが多用されているのに対し、中国語のオノマトペの語数は日本語よりも少ない。この点について山口（2003）は、日本語におけるオノマトペの語数は欧米語や中国語におけるそれに比べて3倍～5倍ほど多いことを指摘している。秋田（2017）には各言語におけるオノマトペの数について次のような記述がある。

実際、私たちが外国語として習う英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語といったヨーロッパの「都会言語」や中国語などでは、それほどオノマトペが発達していないとされている。

（秋田 2017:67）

秋田（2017）は各言語におけるオノマトペ数について具体的な数を記述している。日本語ではオノマトペの概数は2000語以上であるのに対し、中国語におけるオノマトペ数については、次のように述べている。

この言語には、レベル1のオノマトペについては数百語が存在し、主として（5a）のように副詞として振る舞う。

（5）声（レベル1）

- a. 小鸡唧唧地叫着（ヒヨコがピヨピヨと泣いている）
- b. ×小鸡唧唧的（ヒヨコがピヨピヨだ）

それより上位のオノマトペの存在については議論があるが、いくつかの「オノマトペ的」な語類の存在が指摘されている。最も代表的なのは「ABB型」と呼ばれるもので、八〇〇語近く存在する。多言語のオノマトペと比較した際にはとりわけ目を引くのは、レベル3（味・匂い・色）の意味を持つ例である。これらは、（6a）のような副詞用法よりも、（6b）のような形容詞の用法が多い。

（6）色（レベル3）

a. 太阳金灿灿地闪着光（太陽が黄金色に光っている）

b. 太阳金灿灿的（太陽が黄金色だ）

（秋田 2017:79-80）

秋田（2017）の記述から、中国語オノマトペの数はその定義によって異なっていることがわかる。「ABB 型」語を、形容詞として認定する人もいれば、オノマトペに相当する語として考えている人もいるため、その語数も認定範囲によって異なっていると読み取れる。

また、日本語と中国語におけるオノマトペは用法の面でも異なっていると言える。例えば日本語のオノマトペは副詞として使用されるだけでなく、名詞、動詞、形容詞の働きをする場合がある（田守育啓・スコウラップ(1999)、角岡(2007)）。それに対し、中国語のオノマトペの定義とその範囲は明確な学界の共通認識がなく、中国語におけるオノマトペの用法も研究者によって異なっている。それについて詳しくは第1章の先行研究の部分で述べていく。

以上に述べたように、オノマトペは言語の恣意性に対して例外的なものとしてされる特別な語群であり、日本語にも中国語にも見られるものであるが、両言語におけるオノマトペは、かなり相違が見られる。

日中両言語におけるオノマトペは相違があるため、日中オノマトペについての研究も異なる進捗で行われている。日本語のオノマトペについては言語学、心理学、認知科学などの領域から多様な観点で研究が進んでおり、複数の辞書も出版されているが、中国語のオノマトペについては定義とその範囲が明確になっていないことに起因して研究が十分に進展していないという状況が見られる。日中オノマトペについて、その語数、実際の使用率、用法、両言語を対訳する時にどのような問題が生じるかという点について、未だ問題が残されていると思われる。

2 問題提起

日本語におけるオノマトペは、同じような場面で使われるオノマトペ同士が語形の上では似ているように見えるが、それぞれの語が異なるニュアンスを有している場合が少なくない。例えば、「笑い」を表現するときに、日本語では以下のような用例が見られる。

- (1) 彼はにこにこしながら若い女性に声をかけた。
- (2) 彼はにたにたしながら若い女性に声をかけた。
- (3) 彼はにやにやしながら若い女性に声をかけた。

(『現代擬音語擬態語用法辞典』 p349)

日本語話者にとっては以上のようなオノマトペの使い分けが問題にならないが、外国人学習者がそれらのニュアンスを理解して正確に使用することは容易ではない。例文(1)～(3)で用いられた3つのオノマトペを日本語と中国語との対訳によく使用される翻訳アプリで検索したところ、以下のような結果が得られた。

表1 例文(1)～(3)の翻訳例

	グーグル (Google) 翻訳	百度 (BAIDU) 翻 訳	有道 (YOUDAO) 翻 訳
にこにこ	快乐的, 面带微笑	笑嘻嘻, 笑眯眯	嘻嘻
にたにた	咧着嘴笑	笑嘻嘻	嘻嘻
にやにや	×	×	×

表1から、日本語の「笑い」に関するオノマトペが中国語に訳されるときには、3つの問題が見られる。まず、日本語のオノマトペを翻訳する時、翻訳がある場合と翻訳が全くない場合がある。次に、翻訳がある場合を見ると、“快乐的、

面帶微笑”のようにオノマトペ以外の形式で翻訳する場合と、“嘻嘻”のように対応する中国語のオノマトペを用いて翻訳する場合とがある。すなわち、翻訳は直接中国語のオノマトペで対応する場合もあれば、オノマトペではなく、説明的な文で翻訳する場合もある。さらに、中国語オノマトペで翻訳された場合を見ると、“笑嘻嘻”や“嘻嘻”に訳される場合が多いため、区別が明確でないことも1つの問題である。

言語学習者にとって、辞書の語釈を見るのは外国語を理解する時一番使われている手段と思われるが、表1から、日本語オノマトペの中国語訳は辞書レベルには問題がある可能性が高いと考えられる。日本語学習者にとって、「にこにこ」「にたにた」「にやにや」の3つのオノマトペは語形の上では似ているものの、意味がどのように異なっているのかという点や同じ文型でオノマトペだけを入れ替えた場合にどのようなニュアンスの差異が生まれるかという点については理解が困難であると言える。すなわち、オノマトペの習得と使用は、日本語学習者にとって難しい課題の1つとなっている。

また、「笑う」と「泣く」行為は基本的な感情表現であり、日常的によく使われる表現のうちのひとつであると考えられる。『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』（2007:43～44）には、「笑い」に関するオノマトペと「泣き」に関するオノマトペがそれぞれ、74語と46語挙げられている。それに対し、「喜び」や「怒る」などのような人間の感情・感覚と扱われるオノマトペの数は20語以下となっている。「笑い」「泣き」に関するオノマトペは、多くの数存在していることがわかる。

さらに、これまで指摘したように、オノマトペの日中翻訳は辞書レベルには問題がある可能性が高いと考えているが、それだけではなく、実際に使用する際に如何なる相違が生じるかについても、明らかにする必要がある。そのため、例文(1)～(3)のような日本語のオノマトペを学習者がよりスムーズに理解できるようになるためには、まず、日常会話で出現頻度が高いオノマトペを対象とした研究が必要である。特に日本語のオノマトペのみを対象とするのでは

なく、日中対照研究を行うことで、学習者にも役に立つ現象の記述を一層進めることができる。

なお、日本語オノマトペは語数が豊富であり、生産性が高いという特徴があると言われており、それを研究する際に、1つの範疇を設け、語群としてオノマトペの特徴を見ていくことは、オノマトペ全体の状況を知るための大きな手がかりになると言える。そこで、本研究では、日中両言語において、感情を表す時に最も代表的なオノマトペ——「笑い」と「泣き」を表すオノマトペ、を研究対象にし、その使用実態、およびそれらの使い方の相違について考察する。

3 本研究の目的と意義

オノマトペは音声や動作・様子などを直感的に表し、感情を表現できる言葉の一種と考えられる。日本語は世界の言語の中でも、オノマトペ、いわゆる擬音語・擬態語を豊富に持っている言語の1つである。それらは文芸作品に限らず、日常生活の中で、特に話し言葉において頻繁に使用され、話し手の細かな心情を表わしたり、様々な事物の様態を生き生きと描写したりする際に欠かせない語群である。オノマトペを上手に使用できるかどうかは、日本語らしい日本語を話しているかの判断基準の1つである。母語話者のように、日本語を自然に認識して習得していくこととは違い、第二言語学習者にとって、日本語のオノマトペの習得は難点の一つである。

1 節の研究背景で述べたように、日中オノマトペの対照研究には、具体的には以下の4つの点においては、まだ検討すべき余地がある。

- ①その定義と範囲に関わる問題
- ②語数・実際の使用率に関わる問題
- ③用法に関わる問題
- ④両言語を対訳する時にどのような問題が生じているか

以上のような現状を踏まえ、本研究の目的は、日中両言語における「笑い」や「泣き」を表すオノマトペを例にとって、上にあげた問題について明らかにするものである。本研究は、具体的に以下のような観点から上記の問題について検討する。

A. 日中の辞書におけるオノマトペに関する調査、辞書レベルでは示されないズレがあることを示す。

B. 日中オノマトペの相違を踏まえた上で、具体的な場面で、日中コーパスを用いたオノマトペの使用実態について調査する。

C. 日中オノマトペのシステムを再検討する。

D. 日中オノマトペの相違を明らかにした上、日中翻訳においての問題点を検討する。

本研究は、「笑い」や「泣き」を表現するオノマトペおよび類似表現を中心に扱うものである。日中両言語における「笑い」や「泣き」を表すオノマトペを例にとって、それぞれの使用実態を調査し、それぞれの特徴を明らかにする。また、対照研究を通して、日中両言語における感情を表すオノマトペの使用にはどのような相違点があるかについて、検討する。感情を表す日中オノマトペを研究対象にすることで、その研究結果から、日中両言語における感情オノマトペの使用特徴を提示し、日中オノマトペ全体の使用において相違が現れやすいところを予測することが可能となる。

本研究の考察結果は、日本語の感情を表現するオノマトペの性質を捉え、文法的機能を明らかにすることだけではなく、日本語教育、日中オノマトペの翻訳においてオノマトペの習得に活用することも期待できる。

4 本論文の構成

本論文は、以下のような構成となっている。

序章

第1章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

第2章 研究対象と研究方法

第3章 「笑い」に関するオノマトペ

第4章 「泣き」に関するオノマトペ

第5章 日中オノマトペのシステムについて

第6章 オノマトペに関する日中翻訳

終章

序章（本章）では、研究背景を概観し、本研究の目的、研究の意義、及び研究の構成について言及する。

第1章では、これまでのオノマトペに関する研究を概観し、特に日中両言語における感情オノマトペに関する先行研究を取り上げ、問題の所在について述べる。また、先行研究の問題点を踏まえ、本研究で、「笑い」や「泣き」に関するオノマトペおよび類似表現を中心に扱うことの妥当性を示す。

第2章では、研究対象と研究方法について述べる。日本語オノマトペの研究対象は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を利用して抽出し、中国語オノマトペの研究対象は、『現代汉语語料庫』（CCL）を利用して抽出する。中国語については、比較のために、日本語の擬態語相当の語を広めに取り、調査する。研究方法は、日中コーパスを利用し、両言語における「笑い」「泣き」を軸として感情を表すオノマトペの使用実態を調査する。また、日中辞書と中日辞書を利用し、辞書レベルで示されないズレがあることを示す。さらに、日中辞書と中日辞書を参照し、日中翻訳に生じた問題点を明らかにし、日中翻訳の問題が生じた原因についての分析を試みる。

第3章では、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの使用実態について考察する。「BCCWJ」と「CCL」を利用して用例調査を行い、日中オノマトペの使用実態について明らかにする。日本語の「笑い」に関するオノマトペにおいて、擬音語の語数が多いが、擬態語の使用率の方が高いのに対し、中国語の「笑い」に関するオノマトペにおいては、擬音語と擬態語の語数は差異が大きくないが、擬音語の使用率の方が高いことを示す。

第4章では、「笑い」に関するオノマトペを考察した上に、「泣き」に関するオノマトペの使用実態についても検討する。「BCCWJ」と「CCL」の用例調査を行い、「泣き」に関する日中オノマトペの使用実態について明らかにする。コーパスの用例調査によると、「泣き」に関するオノマトペの使用実態も、「笑い」に関するオノマトペと同様に、日本語側は擬音語の語数が多いことを明らかにする。また、中国語側は擬音語が多用されることを示す。

第5章では、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペを取り上げ、音韻、形態、文法的側面から分析を行い、日中オノマトペのシステムの相違を示す。音韻的側面では、日本語オノマトペは音韻変化によって意味的対立が見えるのに対し、中国語オノマトペは不明確であることを指摘する。形態的側面では、「反復形」が日中両言語に見えるが、日本語はそれ以外の語形変化があるため、バリエーションが多いことを指摘する。また、反復形は日中オノマトペにも多く見られる語形であるが、日本語オノマトペの反復形はその非反復形とペアになりやすくて、「生産的な反復形」と言えるのに対し、中国語オノマトペの反復形はその非反復形とペアになりにくく、生産性が低い「語彙的な反復形」と言える。

第6章では、日中辞書を利用し、日中対訳に生じている問題点を明らかにする。辞書の記述から、日中オノマトペの対訳は、オノマトペで対応できることもあれば、対応できない場合もある。さらに、オノマトペ同士が対応する場合にも、必ずしも他の語と明確に意味内容を区別できるような訳になっていないことがあると指摘する。日中対訳する時、安易に置き換えることが多いが、イメージ喚起などの要素を考えると、ずれがある場合が数多く見られることを指摘する。

そのため、従来のような、単に語と語を意味的に近いもので結びつけるという対照研究は、「笑い」に関するオノマトペのような感情を表現する語には適切ではないと主張する。

終章では、第 3 章から第 6 章までの議論を総括し、本研究の結論やその意義と今後の課題を述べる。

第1章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

第1章では、先行研究を、日本語オノマトペに関する研究、中国語オノマトペに関する研究、日中対照研究という3つの部分に分けて概観し、残されている課題を言及し、本研究の位置づけを述べる。日中オノマトペの先行研究から、主に3つの課題点にまとめられる。まず、日中オノマトペに対しての定義と範囲が異なっている。次に、これまでの日中オノマトペ対照研究は、翻訳に中心したものが多いが、翻訳内容の置き換えに注目し、日中オノマトペにおけるシステム上の相違については、まだ十分に検討されていない。さらに、日中対照研究の研究方法は、日本語視点から中国語を見るという方法が多く見られ、両言語各自の言語体系から研究を行う必要があると考えられる。本論文は、日本語と中国語の定義と範囲が異なっているのを踏まえて、より広い範囲で日中オノマトペを検討していく。また、検討する際に、日中オノマトペを各自の言語体系において検討を行い、両言語におけるオノマトペのシステムの再検討を試みる。さらに、日中オノマトペの翻訳について、認識されていない辞書レベルのズレがあることを主張し、その相違点及び相違点が生じた原因について検討していく。

1 日本語におけるオノマトペに関する先行研究

日本語はオノマトペを用いた表現が豊かな言語であると言われている。近年では、日本語オノマトペに対する関心が高まっており、言語学だけではなく、認知科学、心理学など多様な分野から、日本語オノマトペが研究されている。本節は、日本語オノマトペの定義、範囲と分類、特徴という面から、先行研究を概観する。

1.1 日本語オノマトペの定義と分類について

1.1.1 オノマトペの定義について

小野（2007）は、オノマトペは、いわゆる擬音語と擬態語の総称であると述べている。日本語オノマトペの定義について、まず辞書を利用してその意味を確認する。

オノマトペ (onomatopoeia) — 擬音語と同じ。オノマトペア。

擬音語 — 実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざあざあ」「わん わん」など。擬声語。広義には擬態語も含む。オノマトペア。オノマトペ。

擬態語 — 視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言語音で表現した語。「にや にや」「ふらふら」「ゆったり」の類。

『広辞苑』（第七版）

オノマトペ — 【onomatopée（フランス）】擬音語・擬声語・擬態語を包括的にいう語。

擬音語 — 擬声語。

擬声語 — 物の音や人・動物の声などを表す語。「ざわざわ」「がやがや」「わんわん」「いくしく」の類。擬音語。写生語。

擬態語 — 物事の状態や様子などを感覚的に音声化して表現する語。「にやにや」「うろうろ」「じわじわ」「ぴかり」「ころり」「てきぱき」などの類。

『大辞林』（第四版）

さらに、『大辞林』には擬声語と擬態語自体の違いと用法の違いとについては以下のような記述も見られる。

擬態語は擬声語の一種ともされるが、狭義の擬声語が、自然の音響や人間・動物などの音声を直接的に言語音に模倣して写すのに対して、擬態語は、音響的には直接関係のない事象の状態などを間接的に模倣し、象徴的に言語音に写したものである。

擬声語は、そのままの形で、または「と」を伴って連用修飾語となる。ただし、擬態語のように、「——だ」の形で用いられることはない。擬態語は、そのままの形で、または「——と」「——だ」「——する」などの語によっていろいろな形で用いられる。

『大辞林』（第四版）

以上のように、「オノマトペ」という語は辞書によって内容が違うことが見られる。『広辞苑』において、「オノマトペ」は「擬音語」と相当する語となっているのに対し、『大辞林』において、「オノマトペ」は「擬音語・擬声語・擬態語を包括的にいう語」となっている。『広辞苑』の「擬音語」の意味をさらに見ると、「擬音語」は広義と狭義との両方の意味を持つ語であるが、「オノマトペ」と相当する「擬音語」とは、どの意味に当たるのかについては、曖昧である。そのため、『広辞苑』と『大辞林』の語釈から、「オノマトペ」の範囲は一致であるか否かについては、判断しにくいところがあると言える。

1.1.2 「擬音語」「擬態語」「擬声語」について

「オノマトペ」という用語以外に、「擬音語」「擬態語」「擬声語」などの用語もあるが、その定義と使い方は各研究者によって異なっている。

まず、「擬声語」について、辞書で「擬声語」には「広義の擬声語」と「狭義の擬声語」という二つの概念がある。具体的に見ると、「擬態語は擬声語の一種ともされる」という解釈から、「広義の擬声語」は擬音語と擬態語の総称として用いられていることが確認できる。一方、「狭義の擬声語」は、擬音語の下位分類であるという定義方法もある。

金田一（1978）は語彙的な意味の観点からオノマトペを五種類に分類した。具体的には、音を表すもの（「擬音語」）のうち、人間や動物の声を表すものを「擬声語」とし、自然界の音や物音を表すものを「擬音語」とした。また、音ではなく何かの動きや様子を表すもの（「擬態語」）のうち、無生物の状態を表すものを「擬態語」、生物の状態を表すものを「擬容語」、人の心理状態や痛みなどの感覚を表すものを「擬情語」とした。

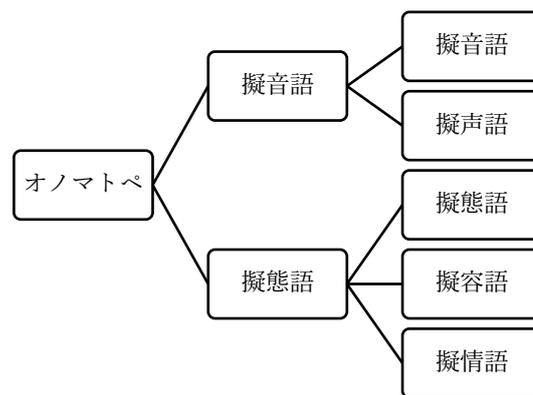


図 1-1 金田一（1978）のオノマトペに関する分類

金田一（1978）の分類から、オノマトペは主に「擬音語」と「擬態語」に分類され、「擬声語」は「擬音語」の下位分類であることを確認できた。金田一（1978）以外に、天沼（1974）、浅野（1978）、飛田・浅田（2022）、浅野（2003）でも、「擬音語」と「擬態語」について、以下のような定義が挙げられている。

擬音語 — 人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、物を飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、音声で表した言語である。

擬態語 — われわれ人間を含む生物、無生物、自然界の事物の有様・現象・変化・動き・成長などの状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現した物である。

(天沼 1974 : 7)

擬音語 — 外界の音を写した言語。

擬態語 — 音をたてないものを、音によって象徴的に表す言語。

(浅野 1978 : 5-9)

擬音語 — 活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音・声を表現したもので、一定グループの人々（多く同国語人）の間で抽象的・普遍的に通用する。

擬態語 — 活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用する。

(飛田・浅田 2022. xi)

擬音語 — 現実の世界の物音や声を私たちの発音で写し取った言葉。

擬態語 — 現実の世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉。

(山口 2003 : 001)

各研究者の定義から、日本語において、オノマトペは主に擬音語と擬態語に分けられていると考えている研究者は少なくないと言える。擬音語と擬態語の区別は、「音」を表現したのか、「様子」を表現したのか、というところである。

しかし、実際に日本語の擬音語・擬態語を見ると、その区別が難しいところが見られる。例えば、

「暑いので、ざあざあ水を浴びている」

小野 (2007 : 13)

のような例が挙げられている。「ざあざあ」は、大量の水が流れ、身に降りかかってたてている音だとも、水が際限なく大量に降り注ぐさまを表しているとも取れる。このような、擬音語と擬態語の境界が曖昧で、判断しにくい言葉は日本語には少なくないと考えられる。すなわち、擬音語と擬態語両方の特徴を持っている語が数多く存在しているため、具体的にどの類に分類すべきか、判断しかねる場合がある。それを原因として、「オノマトペ」という概括的な呼び方が近年使われるようになってきた。

「オノマトペ」という言葉を用いる理由について、小野（2007）は、一つ目は「擬音語・擬態語をまとめた言葉だから」と述べており、二つ目は、従来の擬声語は広義と狭義の意味範囲を持っており、使い方が人によって違いが出てくる場合もあるため、「用語上の無用の混乱を回避するためだ」と述べている。

本論文では、小野（2007）の記述に従い、「オノマトペ」という言葉を用いることとする。また、さらに区別が必要となる場合には、「擬音語」と「擬態語」という言葉も使用することとする。

1.2 日本語オノマトペの音韻的・形態的特徴

日本語オノマトペの音韻・形態上の特徴について、玉村（1979）では、『分類語彙表』を利用して日本語オノマトペの形式的特徴をまとめ、日本語オノマトペの形式の種類の高さを指摘し、表 1-1 のようにそれぞれの形式が占める比率を明らかにした。玉村（1979）によると、日本語オノマトペの中で「ABAB」型は 45.26%（XYXY 型は 42.86%、XVXV 型は 2.40%¹）を占めており、圧倒的に多い。また、「り」型は約 26.93%（XっYり型は 12.77%、XYり型は 12.01%、XんYりは 2.15%）を占めている。

¹ この表では、オノマトペの語素である各音節を X,Y,Z で示し、引き音節を V で示す。

表 1-1 玉村（1979）におけるオノマトペの形態的分布

形式	比率（％）
X	0.38
XY	2.02
XX	0.26
XYXY	42.86
XYY	0.51
XっYり	12.77
XYり	12.01
XYん	4.43
Xっ	3.41
XYZY	2.53
XVXV	2.40
XんYり	2.15
Xん	1.77
その他	12.52

玉村（1979）は、日本語のオノマトペの形式には種類が多いことと、XYXY型が際だって多いことと主張している。また、日本語では、語基2音節型で、疊語指向がきわめて強いと述べている。玉村（1979）は日本語オノマトペの形式特徴を概観した研究であり、各形式の形成原因、なぜXYXY型が極めて多いかなどについては詳しく説明していない。また、日本語オノマトペにはXYXY型の数が多いが、実際の使用状況でも多いのかについても検討する必要があると考えられる。

Waida(1984)は、日本語オノマトペの語形における特徴を分析し、オノマトペは必ず語尾、長音、促音、撥音、反復辞などの標識を伴って現れることを示唆した。さらに、Waida(1984)は語基に付加する接尾辞「ri」や促音「Q」、撥音「N」、長音、反復などの要素を「オノマトペ標識」と呼ぶことと提案した。

田守・スコウラップ (1999) では、伝統的なオノマトペ語彙の独自性に関して 12 の要因をあげている。そのうち、音韻的特徴に関する要因が 5 つ、形態に関する要因が 6 つ、統語に関する要因が 1 つあげられている。オノマトペはその形態の面から他の語彙と区別され得るという考え方をとるとき、以下の 6 つの要素がオノマトペを特徴づける上で特に重要であると指摘されている。

- (a) 2 モーラ反復形の様態副詞的なオノマトペの多くが Q(引用者注:促音)の語末付加を受けるが、この種の接辞付加あるいは拡張は反復形の一般語彙や漢語にはけっして見られない。
- (b) 2 モーラ反復形の結果副詞的なオノマトペは語中に Q が挿入されるが、この種の接辞挿入あるいは拡張は反復形の一般語彙や漢語にはけっして見られない。
- (c) 「り」の語末付加はオノマトペに限られる。
- (d) Q の語末付加はオノマトペに限られる。
- (e) N(引用者注:撥音)の語末付加はオノマトペに限られる。
- (f) 反復形のオノマトペは語幹を更に反復してその形態を拡張することができるが、このようなことは漢語にはけっして起こらない。

(田守育啓・スコウラップ (1999) pp. 20-25)

田守・スコウラップ(1999)が指摘したことを踏まえると、オノマトペの形態的・音韻的特徴としては、「り語尾」、促音の挿入と語末の付加、発音の語末の付加、語幹からの反復形などの点が挙げられる。そのうち、「反復形」という特徴は中国語オノマトペにも数多く見られるが、形態的に、両言語にはどのような相違があるかについては、さらに検討する必要があると考えられる。

1.3 擬似オノマトペについて

形から見れば、反復形は一つの特徴として、日本語オノマトペにも中国語オノマトペにも見られる。角岡（1993）は、「語彙のうち、擬音語はほとんどが日本語本来の語彙である。それに対して、擬態語は日本語本来のものばかりではない。多くは、日本語本来のものと、中国語から借入したものとに分類することができるであろう」と述べている。「日本語が中国語から借入した擬態語」を「擬似オノマトペ」と最初に定義したのは、笥（1981）である。

角岡（1993）は、「擬似オノマトペ」は日本語の母語話者にとって、中国語からの借入語であるという意識がかなり薄れてしまっていると指摘している。また、角岡（2007）は「擬似オノマトペ」と「真正オノマトペ」との関係についても明らかに区分している²。角岡（1993、2007）は、「擬似オノマトペ」は一般語彙の下位分類として区分されており、真正オノマトペとして認められていないことを示唆している。

「擬似オノマトペ」は真正オノマトペに属しているかどうかは、研究者によって認識が異なっているが、「擬似オノマトペ」は日本語と中国語の接点と考えられ、その受容過程や意味変化などについて、通時的な研究が行われている（劉 2004、蔡 2022）。これらの「擬似オノマトペ」を見ると、「茫々」のような「擬似オノマトペ」は様子を表す擬態語に相当している働きをしていることが多く見られる。その語源と考えられる中国語を検討してみると、それが中国語においては一般語彙に入れるか、オノマトペの擬態語に入れるか、ということも問題となっている。中国語の擬音語と擬態語の定義と範囲については、次の節で詳しく述べる。本論文は、より広い範囲で日中オノマトペを考察していくと主張しているため、日本語における「擬似オノマトペ」も、中国語における「擬態語」も、オノマトペの範囲に入れることにし、考察を行っていく。

² 角岡（2007）は、「境界オノマトペ」とは、名詞や形容詞・動詞・形容動詞などの「実詞」から派生したものと定義している。

2 中国語におけるオノマトペに関する先行研究

2.1 中国語におけるオノマトペについて

日本語の「オノマトペ」は onomatopoeia からの言葉であるが、中国語において onomatopoeia の意味はどのようになっているかについて、英漢辞典を調べると、以下のような解釈が見られる。

onomatopoeia——①【语】形声，拟声，象声 ②象声词

《简明英汉词典》

onomatopoeia——①【语】拟声（法）构词；②象声词；③（修辞中的）拟声法

《新英汉词典》

英漢辞典の語釈によって、中国語におけるオノマトペは“象声詞”に相当することが見られる。さらに調査したところ、“象声詞”という項目には以下のような語釈が見られる。

象声词 — 拟声词。

拟声词 — 模拟某种声音的词。如“哗啦”模拟水声，“嘻嘻”模拟笑声。也说象声词。

（音声を模倣する語。例えば：“哗啦”は水の音を真似する語、“嘻嘻”

は笑い声を真似する語。象声詞。——筆者訳）

拟态词 — ×（見出しなし）

《现代汉语规范词典》（第三版）

象声詞 — 即拟声词。

拟声词 — 也叫“象声词”，模仿自然声音构成的词。如模仿流水声音的“潺潺”，布谷鸟声的“布谷”。

（“象声詞”とも言える、自然の音を模倣して構成された語。例えば、

水の流れる音を模倣する“潺潺”（chan chan）、ホトトギスの声を模倣する“布谷”（bu gu）など。——筆者訳）

拟态词 — ×（見出しなし）

《辞海》（1999年版）

辞書の解釈を参照すると、中国語においては、“象声词”が音を真似する「擬音語」に相当し、擬態語という項目はないことが確認できる。“象声詞”や“擬音語”の語釈から、中国語における“象声詞”は日本語の「擬音語」の部分だけに対応することになり、日本語の「オノマトペ」全体に対応しているとは言えない。

また、onomatopoeia の辞書の語釈から見てもわかるように、日本語におけるオノマトペは擬音語と擬態語の総称に相当する語であるのに対し、中国語における onomatopoeia の中国語訳は“拟声”“象声词”となっていることが確認できる。これにより、日本語と中国語における「オノマトペ」の範囲が異なっていることが言える。

2.2 象声詞と擬声詞

中国語辞書の語釈から、両言語におけるオノマトペの範囲が異なっていることが確認できた。中国語の“象声词”（象声詞）について、最初に論述したのは『馬氏文通』（1898）であった。その後の数十年にわたり、“象声词”（象声詞）に対して、明確な定義を提示した研究者はいなかった。その後、呂・朱（1951）では、はじめて“象声词”（象声詞）が術語として用いられた。これにより、“象声词”（象声詞）が1つの品詞として立てられ、文法界で注目されるようになった。

一方、2.1で挙げたように、onomatopoeia は中国語の品詞の1つとして“象声词”（象声詞）に訳されることもあれば、修辞法として“擬声法”と翻訳され

ることもある。さらに、修辞法の視点から“擬声詞”という用語が挙げられた（王力 1943）。つまり、中国語におけるオノマトペについての用語には、“象声詞”（象声詞）と“擬声詞”（擬声詞）が同時に存在している。現代漢語詞典の記述を参照すると、“擬声詞”ははじめは項目として立てられていなかったが、2005年版の現代漢語詞典から辞書に立項された。従って、中国語には“象声詞”（象声詞）と“擬声詞”（擬声詞）両方存在しているものの、最初に提示された“象声詞”が主に使用されてきた。そして、近年は“擬声詞”も一般的に使用されるような傾向が見られる。

中国語学においては、研究者によって、オノマトペに相当する言葉が“象声詞”（象声詞）や“拟声词”（擬声語），“拟音词”（擬音語）と異なっており、その定義と範囲についても異なっている。代表的には耿（1986）、野口（1995）、楊（2015）、劉（2001）などが挙げられる。

耿(1986: 3)は、オノマトペに相当する語を“拟声词”と呼び、その定義については、“拟声词（又叫象声词）是模拟自然声音的词。它们是拟声造词法的一个产物，以其专门摹拟现实物质的各种声音而自成体系”「（“擬声詞”（また“象声詞”）が、自然界の音声を模倣する言葉である。それらは、造語法によって生じたものであり、自然界の音を模倣することで独自に系統となっている。—筆者訳）」と述べている。耿(1986)は、中国語の“擬声詞”（また“象声詞”）は「擬音語」だけに相当すると指摘している。

野口（1995 : ix）は、中国語の擬音語の定義については以下のように述べている。

中国語で擬音語にあたる語は“象声词”（象声詞）または“拟声词”（擬声詞）である。中国語の象声詞は一般的に次のようなものをいう。

- ①動物の声——哞（牛の声），汪汪（犬の声），啾啾（小鳥や虫の声）
- ②人間の発する言語以外の声や音——哈哈（笑い声），阿嚏（くしゃみの音），唧咕（小声で話す）
- ③物音——咚（太鼓の音など），呼呼（風の音など），噼啪（爆竹の音など）

耿(1986)と野口(1995)の定義から、中国語におけるオノマトペに相当する言葉は“象声詞”や“擬声詞”と呼び、その範囲は日本語の「擬音語」に当たる。「擬態語」という語がなく、中国語のオノマトペにも含まれていないことがわかる。

しかし、実際の用例を見ると、中国語の中にも様子や状態を表す働きをしている語もある。

(1) 这突如其来的关照，使那个学生的脸唰地一下红了。

(CCL/1994 年報刊精選)

例文(1)の“唰”もともと音を表現する語であるが、「変化のスピードが早い様子、一瞬で変わる様子」という意味も表しており、(1)の“唰”は顔が一瞬で赤くなったという様子の変化を表現する語であると言える。

中国語における擬態語の有無について、野口(1995)は以下のように指摘をしている。

擬態語にあたる言葉は中国語の文法用語には特にないようだ。しかし、用語がないからといって擬態語自体がないわけではなく、“热乎乎”(ほかほかしている)“滑溜溜”(つるつるしている)などの後置成分をおく形容詞、いわゆる ABB 型形容詞は一種の擬態語と考えられる。そのほか、文語の疊語・疊韻・双声の単語や口語における重ね形の中には擬態語的なものも含まれる。ただ、日本語の擬態語が音的象徴性が著しいのに対し、中国語の場合は他の語と結びついたり、概念化・実詞化が進んだものが多く、純粹に擬態語と見なせるか問題ある。

楊(2015)は、“虽然汉语中没有拟态词这一词类，汉语也具有日语拟态词一样的功能的词，一部分象征性地采用声音化的手法来描述；一部分虽然没有用声音化的手法表现，却也是在描述状态。”「(中国語では「擬態語」という文法用語

はないが、日本語の擬態語と同じような機能を持っている語がある。それらの表現方法について、一部は音声を模倣して表現するが、一部は音声化という方法を使わず物事の様子・状態を表現する。一筆者訳)」と述べている。

以上のように、耿（1986）、野口（1995）、杨（2015）は、中国語のオノマトペが“象声詞”や“擬声詞”だけに相当すると定義されているが、野口（1995）、杨（2015）は、中国語では擬態語という品詞グループがなくても、それと同じような働きをしている語が存在していると主張している。

それに対し、劉月华（2001）は、

象声词也称拟声词，是指用语音来描摹事物或自然界的聲音以及描写事物情态的词，如“砰”（枪声）、“轰隆”（炮声）、“叮咚”（滴水声）、“哗哗”（流水声）、“滴滴答答”（号声）、“哗啦哗啦”（雨声）等等。象声词可以增添声音的实感和语言的生动性，（省略）但是，象声词并不都是描摹事物或自然界的聲音，有时是用声音对事物的情态进行描绘。

（象声詞も擬声語と呼び、実際の音、声や様子を言語音で象徴的に描写する語である。例えば、砰”（銃の音）、“轰隆”（大砲の音）、“叮咚”（水滴音）、“哗哗”（流水音）、“滴滴答答”（トランペットの音）、“哗啦哗啦”（雨の音）など。象声詞の使用は音を実感させ、表現を生き生きとさせる働きをしている。しかし、“象声詞”は全て実際の音や声を模写しているわけではなく、具体的な音で物事の様子を表すときもある。一筆者訳）

と述べている。劉（2001）から、中国語の象声詞は、言語音で音声を真似する用法だけを持つことではなく、言語音を利用して物事の様子を表す用法も持っているという指摘が確認できた。すなわち、劉（2001）の主張によると、中国語には「擬態語」という用語がないが、象声詞の中には、一部の語の用法が擬態語の用法に相当する。しかし、具体的にどのような語が擬態語に相当する働

きをしているか、またはそれらはどのような特徴を持っているかについては、言及していなかった。

以上のことから、「オノマトペ」に関して、中国語と日本語では定義と範囲が違えることが見られる。中国語におけるオノマトペ、すなわち“象声詞”の定義と範囲はまだ明確になっていないところがあり、特に中国語に日本語における「擬態語」に相当する語があるかどうかという点についてはまだ議論の余地がある。それから、中国語で「擬態語」のような働きをする語が存在したとしても、それを“象声詞”の働きの一部と見なすか、“象声詞”とは区別し、独立の概念として位置づけるかという点³についても、中国語オノマトペを研究する際に検討すべき点である。

2.3 中国語オノマトペの音韻的・形態的特徴

耿（1986）は、形態的観点から、中国語のオノマトペを以下のように大別している。

- ①A 式（単音）：刷，嘯，哇，唼，哗……
- ②AA 式（疊音）：咯咯，吱吱，啾啾，唏唏……
- ③AB 式（双音）：咯嘞，银铛，忽隆，跨喳
- ④AAB 式：叮叮当，叮叮咚，咚咚呛，噼噼啪，提提塔……
- ⑤ABB 式：哗啦啦，呱哒哒，扑通通，滴溜溜，扑簌簌……
- ⑥ABBB 式：哗啦啦啦，轰隆隆隆，咕噜噜噜，扑棱棱棱……
- ⑦AABB 式（重叠音）：叽叽喳喳，吱吱嘎嘎，窸窸窣窣，叮叮当当……
- ⑧ABCB 式：噼塔啪塔，嘟噜咕噜，噼通扑通……
- ⑨A 里 BC 式：稀里轰隆，叽里呱啦，稀里哗啦，噼里啪啦……

³ この点について、“象態詞”という呼び方を提案している説もある。

⑩A 里 AC 式：呼哩呼噜，哇哩哇啦……

⑪ABCD 式：丁零当啷，乒零乓啷，叮铃咚隆……

耿（1986）は、中国語のオノマトペを形態的に 11 種類に分類し、各語形に音韻上どのような特徴があるかについて、例を挙げながら説明している。ただし、同じ語形をもっている一般語彙とオノマトペの区別は何かについては、言及していない。例えば、一般語彙においても、AAB 式と AABB 式が数多く存在しているが、それらとオノマトペの区別は何なのか、どのような判断基準が存在するのかなどの点については、詳しく説明されていない。

野口（1995）も、中国語オノマトペの形態的な分類を行っている。耿（1986）と異なり、野口（1995）は語の構成要素の音節数によって、中国語オノマトペを三組、計 10 種類に分類している。

（一）語の構成要素が一音節のもの

①A 型：当，咚，呼，哗，啪

②AA 型：唧唧，沙沙，汪汪，嗡嗡，呜呜

（二）語の構成要素が二音節のもの

③AB 型：叭哒，叮当，轰隆，哗啦，噼啪

④ABB 型：当啷啷，咕噜噜，哗啦啦，扑通通，吱扭扭

⑤AAB 型：咚咚锵，滴滴哒，咕咕哒

⑥AABB 型：滴滴答答，叮叮当当，乒乒乓乓，劈劈啪啪，吱吱嘎嘎

⑦ABAB 型：叮当叮当，咯吱咯吱，哗啦哗啦，呼噜呼噜，吭哧吭哧

（三）子音や母音の交替するもの

⑧ABCD 型：丁零当啷，嘀里嘟噜，叽里呱啦，噼里啪啦，稀里哗啦

⑨ABAC 型：哇哩哇啦

⑩ABCB 型：劈塔啪啦

野口（1995）の分類においては、「子音や母音の交替するもの」以外の二つのグループの語は、完全反復や部分反復という形式を持ち、「子音や母音の交替するもの」グループも子音や母音の交替で、ある程度の反復を実現していることが見られる。つまり、中国語オノマトペの語構成には、「反復」という要素が著しいことを示している。

玉村（1979）は日本語と対照するために、日本で出版された中国語のオノマトペを扱った資料を利用し、それらの形態的特徴に基づいて分類を行い、各類型の比率を計算し、以下の表 1-2 のようにまとめた。

表 1-2 玉村（1979）における中国語オノマトペの形態的分布⁴ 例数（%）

形式	資料 1	資料 2	資料 3
X	31 (28.18)	63 (30.88)	37 (14.02)
XY	17 (15.54)	48 (23.53)	64 (24.24)
XX	28 (25.45)	39 (19.12)	60 (22.73)
XXY	21 (19.09)	24 (11.77)	32 (12.12)
XXYY	6 (5.45)	9 (4.41)	24 (9.09)
XXY' Y'		4 (1.96)	6 (2.27)
XXY' Y	4 (3.63)	6 (2.94)	3 (1.14)
XX' YY'	3 (2.73)		1 (0.38)
XYY		7 (3.43)	28 (10.61)
XXY			5 (1.89)
XYZ			1 (0.38)
XXX			1 (0.38)

⁴ 資料 1 伊藤宏明（1949）「中国語における擬音語について」（大阪外専中国語部『鵬翼復刊第 3 号』所収）

資料 2 倉石武四郎（1963）『岩波中国語辞典』末尾「意味による索引Ⅻ擬音語擬態語」

資料 3 相原茂編「現代中国語擬音語小辞典」（大修館『中国語』No. 202 1976-11 所収）

その他		4 (1.96)	2 (0.76)
合計	110 語	204 語	264 語

玉村 (1979) は、この分類によって、「中国語では、X 型・XX 型が最優勢となっている。したがって、中国語では語基単音節型で、疊語指向が必ずしも強くない」という結論を導き出した。しかし、玉村 (1979) で利用された中国語辞書は、「擬音語」を中心にして編集されたものであるため、「擬態語」に関してもこの調査結果を適応して考えてよいかについては、検討の余地があると考ええる。

2.4 象声詞と形容詞の境界について

中国語の象声詞と形容詞との境界は何であるかについては、多くの議論がある。その境界が曖昧である理由は、主に二つ考えられる。

一つ目は、語形から見れば、両者は同じ語形を持つ語が多いところである。二つ目は、象声詞は「言語音を利用して物事の様子を表す」(劉 2001) 語であり、品詞の働きから見れば、象声詞と形容詞とは共通しているところである。

朱 (1956, 1982) は現代中国語を全体的に捉える研究であり、中国語の形容詞が、形式の違いによって性質形容詞と状態形容詞に分けられると述べている。さらに、状態形容詞は、具体的な状況を描写する形容詞であると定義している。朱 (1956, 1982) は、状態形容詞を具体的に、AA 型、AABB・ABAB 型、ABB 型、A 里 BC 型、A 不 BC 型、f (程度副詞) + 形容詞 + 的型、というような 5 種類に分類した。状態形容詞の分類と象声詞の分類 (耿 1986、野口 1995) を対照したところ、かなり重なっていることが多い。そのため、象声詞と形容詞との関係は何かということは、象声詞の範囲の認定に影響を与える重要な問題点である。

2.5 ABB 型形容詞について

前述の通り、従来の中国語象声詞研究は、擬音語しか象声詞として認定されておらず、擬態語はその範囲に入らなかった。しかし、ABB 型形容詞の中には、様子を表す語が数多く存在しており、擬態語に相当する ABB 型語は、オノマトペとして見なすか、それとも ABB 型形容詞として見なすかという問題は、未だ議論されている。ABB 型形容詞の構成について、呂(1980:638)は、「大部分 ABB 式是由 A 加 BB 构成的, 但有些可以认为是由重叠 B 构成的。」「(ABB 型形容詞の大部分は、A に BB を付随して構成されている。一部は AB に B を付随して構成されている。) 一筆者訳」と述べている。すなわち、ABB 型形容詞の語構成は、A に BB が付随している「A+BB 型」と、AB の B が重畳している「AB+B 型」に大別される。

そしてこの二類は、BB や AB の語が漢字の原義を維持しているか否かによって、さらに以下のように細分される。

A+BB 型:

①BB に原義が認められるもの・・・・・・ 冷冰冰、直盯盯、血淋淋、眼睁睁

②BB に原義が認められないもの・・・・ 羞答答、娇滴滴、硬梆梆、慢腾腾

AB+B 型:

③AB に原義が認められるもの・・・・・・ 孤单单、光溜溜、颤抖抖、红润润

④AB に原義が認められないもの・・・・ 骨碌碌、哗啦啦、滴溜溜、轰隆隆

呂(1980)は語構成の視点から ABB 型形容詞を分類した。この分類では A と B の原義と反復の発生過程に注目して ABB 型形容詞を分類するという方法を提示した。しかし、実際に区別する時には判断が難しく、簡単に分類できない場合もある。例えば、④に分類されている“哗啦啦”や“轰隆隆”は、“哗”+“啦啦”、

“轰”＋“隆隆”という構成で理解しても良い語である。すなわち、“哗啦啦”や“轰隆隆”のような ABB 型の語は、「AB+B 型」の④の部分と、「A+BB 型」の②の部分と、両方に分類されることが可能となり、どちらに分類するか決定することは難しい。②と④に属している語を見ると、BB 部分は擬音語である語が多く見られるため、擬音語から構成される語にこのような事例が多いと考えられる。

武田(2001)は、④を一般的擬音語、②を擬態語に相当する語（擬態語化した ABB 型形容詞）として扱い、それぞれの用法を検討した。まず④に属している一般的擬音語の用法、聴覚から視覚または触感への感覚転用が多く見られと述べている。「音」を表す擬音語を用いて聴覚以外の感覚をも表現する比喻は、おおよそ換喩によるものが多く観察される。すなわち、擬音語の使用は、「音」を表すことだけではなく、擬態語に相当する働きをしていることも少なくないと主張している。このことは、中国語の擬音語と擬態語の区別は明確にできない原因の一つと考える。

一方、武田(2001)は、②に属している擬態語に相当する語（擬態語化した ABB 型形容詞）を中心に、考察を行った。“刷刷”（shua shua）は本来「急に勢いよく摩擦する音」などを表す擬音語であるが、この音を伴った結果発生する「整然とそろっている状態」と、白さがそろっている状態の類似性に基づく隠喩が作用することになる。そのため、“白刷刷”（bai shua shua）における“刷刷”（shua shua）は白さの状態を表現するものであると述べている。“白刷刷”（bai shua shua）以外に、“红嘟嘟”（hong du du）“酸溜溜”（suan liu liu）“香扑扑”（xiang pu pu）“臭哄哄”（chou hong hong）なども例としてあげられ、BB 部分が本来擬音語であるが、ABB 型になると、語の意味は聴覚から視覚、味覚または嗅覚への感覚転用が発生したと言及している。

以上のように、武田（2001）から、本来は擬音語である BB の部分が ABB 型になると、共感覚の転用が発生し、ABB 型形容詞の一部が擬態語化し、擬態語に相当している働きをしていることがわかった。しかし、ABB 型形容詞と擬態語の関係や、その区別基準などについては、詳しく言及していない。

そのほか、中国語における ABB 型形容詞の研究は、辛・周 (1989)、邵 (1990)、祝・劉 (2001)、郝 (2006a、2006b、2007) などがあげられるが、それらの研究は、BB を意味の有無によって二種類に分け、語根 A と組み合わせて A との関係や A への影響をまとめたものである。また、鮑 (1985)、李 (1987)、楊 (1999)、戴 (1999)、薛 (2005)、申 (2006) も ABB 型形容詞について検討を行ったが、ABB 型形容詞における語根 A は多くが形容詞、名詞、動詞であり、接尾語 BB は A を補充し、限定する機能を持っていると主張している。さらに、ABB 型形容詞は普通の形容詞より物事を生き生きと描写することができることも述べている。以上の研究は、呂 (1980) の研究と同様の視点で、ほぼ接尾語 BB を中心に、BB の意味の有無、ABB 型形容詞の構成の特徴などについての考察を行ったが、いずれも語構成に注目している研究であり、ABB 型形容詞と擬態語との関係についての検討までは至っていない。

以上、先行研究をまとめると、日中両言語における擬音語・擬態語の研究は、主に音韻、形態、および共感覚の視点からのものが多いことが分かった。しかし、日本語オノマトペについて、擬音語と擬態語の関係の研究が少ないことや、中国語 ABB 型形容詞について、本来擬音語として使用される接尾語 BB と状態しか表せない ABB 型形容詞全体との関係に関する考察が少ないことなども明らかになった。

3 日中オノマトペの対照研究に関する先行研究

3.1 日中オノマトペの翻訳研究

前述の通り、日本語オノマトペを中国語に翻訳する際に、日本語オノマトペに対応する中国語オノマトペが無い場合が少なくない。従って、オノマトペに関する日中対照研究は、日本語オノマトペを中国語に訳そうとした時に、中国語に対応するオノマトペが無い場合には中国語でどのような表現を用いるのか、という点について論じているものが多数見られる。一方、中国語における擬態

語については、その用語・概念が定着していないところもあるため、日中オノマトペの対照を「擬音語」に絞って行う研究も多い。以下、日中オノマトペに関する対照研究として代表的なものを取り上げる。

王（2004）は、宮沢賢治の作品で用いられた擬音語・擬態語に基づき、これらの中国語訳表現の特徴と問題点を検討した。中国語訳の表現の特徴について、

①中国語には、擬態語というものがいないため、日本語の擬態語はそのまま中国語に移行することができず、形容詞をはじめ、動詞、副詞、成語などで表されている。擬音語は、ほとんど中国語の擬音語に訳すことができるが、日本語の場合は細分化的な傾向にあるのに対し、中国語の擬音語の場合は包括的な傾向にある。

②擬態語の中国語訳は文法的機能の面でも、形態的面でもなるべく日本語の擬態語に近い表現が使われている。

③中国語訳で形容詞、動詞の強調形（つまり ABB 型、AABB 型、ABAB 型）は全体の 23%を占めている。

と指摘している。王（2004）は、これらの特徴をあげた上で、宮沢賢治作品で用いられているオノマトペを中国語に訳す際に現れた問題点についても、

①辞書では擬態語が中国語に訳されているとしても、実際に童話作品を翻訳する際に、具体的な文の前後環境によって訳されていないのは 30 語もあり、全体の約 15%を占めている。そのため、その翻訳は作者が擬態語を通して伝えようとする意味が伝えられなかったことが推測できる。

②宮沢賢治の独特な擬態語は、一応中国語に訳されているが、その独特なところが伝えられていないものもある。

③情緒的、直感的な擬態語に対して、中国語訳ではほとんど客観的、具体的な描写機能を持っている形容詞、動詞、副詞などで表されている。この二者は異

なっているため、擬態語の持っている生き生きとした具体性と力強い表現力を形容詞、動詞、副詞などでは十分に伝えることができないだろう。

という3つの部分にまとめている。王(2004)の記述からは、中国語と日本語との相違があるため、日本語オノマトペを中国語に訳す時には伝えられない部分が多いということが明らかになった。特に、宮沢賢治の作品で用いられている独特な、臨時的なオノマトペに対しての翻訳は、さらに困難であることも言及している。しかし、それらの問題点が生じる根本的な原因、または翻訳する際に生じた問題点に対しての解決法などについては、言及していない。

呉(2005)は、日本語の文学作品『雪国』に出現したオノマトペ224例とそれに対応する3種の中国語訳の妥当性を、翻訳の視点から検討した。まず、呉(2005)は擬音語を翻訳しやすいものと翻訳しにくいものとの2つに分けている。その上で翻訳しやすいものについては、中国語にもそれに相当する象声詞があることが翻訳しやすいことの原因であるとしている。(例:ごくごく→咕嘟咕嘟(gu du gu du))。一方で、翻訳しにくいものについては、中国語ではそれに相当する象声詞がないことが翻訳しにくいことの原因であるとして、これらを翻訳する際には、無理に象声詞に訳すより、原文の意味をよく理解した上で、ほかの語彙に訳す方が理想的であると述べ、より良い翻訳方策も提示している。

次に呉(2005)が提示した翻訳方法を踏まえ、さらに具体的に翻訳方法を示したのが徐一平(2010)である。徐(2010)は擬音語、擬態語の翻訳について以下のような方法を提案した。

- ① 固有の象声詞に訳す
- ② 原文に従って象声詞を作る
- ③ 適当にほかの言葉に訳す
- ④ 疊語に訳す
- ⑤ 「一然」の形に訳す
- ⑥ 「形況詞」に訳す

- ⑦ 象声詞の隠喩的用法に訳す
- ⑧ 一般形容詞に訳す
- ⑨ 副詞に訳す
- ⑩ 動詞に訳す
- ⑪ 「一下子」の形に訳す
- ⑫ フレーズ単位で意識する
- ⑬ 省略してもいい

徐（2010）では、多様な翻訳法を提示し、日中オノマトペが翻訳される際に直面する問題に対する解決方法を複数提案している。しかし、実際に翻訳する時、どの方法を選択することがより適切であるかという点について、その判断基準はまだ明らかになっていない。さらに、日中両言語におけるオノマトペの間にはどのような相違点が生じたのかという点やその相違点が生じた原因の解明については、議論の余地があると考えられる。

3.2 感情を表すオノマトペの日中研究

前述の通り、日中オノマトペの定義や範囲などには違いがあるため、その日中対照研究はあまり実施されていない。近年、「笑い」に関する日本語オノマトペの歴史的研究、「笑い」に関する日本語オノマトペの中国語翻訳などに注目した先行研究がいくつ挙げられるが、その日中対照研究も豊富に実施されているとは言えない現状である。従って、感情を表すオノマトペを中心にした研究は、管見の限り、十分とは言えない。

具体的にいうと、感情を表すオノマトペについての先行研究は主に以下のようになる。

金田一（2004:119）は日本語の音節が単純で、「ニコッと笑う」、「ニタッと笑う」という笑い方の違いを表すために「ニコッ」「ニタッ」のようなオノマ

トペが必要であると主張している。その原因について、中国語には“微笑”（「ニコニコ笑う」）“大笑”（「ゲラゲラ笑う」）“讪笑”（「ニヤニヤ笑う」）などのようにさまざまな「笑い方」を表す動詞があるのに対して、日本語は中国語のように動詞が豊富ではないことから、それを補うためにオノマトペを用いるしかないと分析している。

「笑い」に関するオノマトペの音象徴性について、角岡（2006）は「ハ行」の5音を例として「ハ」は豪快な笑い、「ヒ」は隠微な笑い、「フ」は含み笑いのように独善的、「ヘ・ホ」は「下品さ・上品さ」といったイメージがあると指摘している。

中里（2007）は、笑いを描写するオノマトペの変遷について考察した研究である。「笑い」の表現には①笑い声、②笑う時の表情・笑い方、笑う時の姿態、の描写があると述べている。また、笑い声を表す〈模写に近いオノマトペ〉は近代以後現代に至るまでに新たに作られたものが多いが、笑い声を表す〈象徴度の高いオノマトペ〉と、笑いの表情・笑い方に関しては、近代になって新たに作られたオノマトペはほとんど見られないと述べている。

夏（2019a）は、マンガで出現した日本語の「笑い」に関するオノマトペとその中国語の翻訳版で訳されたオノマトペを研究の対象とし、「笑い」に関する日中オノマトペの音韻的な特徴に注目して考察を行った。日中両語における「笑い」に関するオノマトペの音節要素を分析することで、両言語は発音の似ているオノマトペが多くて音韻的な特徴も似ているが、具体的な感情表現のニュアンスは母音によって違いが生じると主張している。さらに、夏（2019b）は、日本語の母音の/a//i//u//e//o/に基づいて「笑い」に関するオノマトペの音韻的な特徴を比較した。日本語も中国語も母音/o/と似ている擬音語が女性的な笑い方として多く使用されているが、日本語の母音/u/と中国語の母音/i/の使用頻度が高く、女性の可愛い笑い方に注目して描写することが見られると示唆している。夏（2019a, b）は、音韻的側面から、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの特徴を対照したが、研究方法は日本語オノマトペから出発して中国語オノマトペの特徴を見るという方法であり、中国語本来の音韻体系

が日本語のものと大きな違いがあることを十分に考慮していないため、各言語体系における母音の変化がオノマトペの意味の変化への影響については、まだ検討する余地があると思われる。

侯(2019)はマンガ『クレヨンしんちゃん』を調査対象にし、その中に現れた日本語オノマトペの中国語訳の適切性について考察を行なった。侯(2019)の調査結果によると、日本語オノマトペの中国語訳のうち、適訳が全体の6割近くを占め、不適訳・誤訳・翻訳されなかったものの合計が4割を占めた。後者の4割のうち、不適訳が2割弱、誤訳が1割強、翻訳されなかったものが1割程を占めているという結果であった。このような結果から、日本語オノマトペを中国語に訳す場合に誤訳も少なからず存在し、これは日中オノマトペの間に相違があることを示唆していると言える。

また、侯(2019)は、適訳の例を分析し、その特徴を5つ⁵にまとめた。その特徴のひとつとして、笑い声や泣き声などの感情を表すオノマトペについては適訳と判断できるものが多かったということを挙げている。侯(2019)は、「笑い声」を表現するオノマトペは日本語にも中国語にも存在し、お互いに対応する訳が存在する可能性が高いと述べている。侯(2019)は、具体的な調査によって日本語オノマトペの中国語訳の適切性について検討した。しかし、笑う声より「笑う様子」を表現するオノマトペは日中両言語において多く存在し、多用されていると思われるが、マンガでは擬音語より出現頻度が低い可能性が高い。そのため、侯(2019)の研究は擬音語に中心して検討を行ったが、擬態語について日中両言語の対応関係の考察には、いまだ至っていないとしている。

⁵ 侯(2019)は、適訳から見られる特徴を、以下のように大きく5つのことに分けている。①犬の鳴き声や鳥のさえずりなど、動物の鳴き声のオノマトペは敵訳されている。②笑い声や泣き声などの感情を表すオノマトペが適訳と判断できるものが多かった。③いびきや咳などの生理現象に対するオノマトペも適訳となっている。④風の音など自然に関わる音のオノマトペとみなすことができるものが多かった。⑤「もみもみ」や「ふきふき」、「ぱっ」といった、擬音語ではなく、擬態語は多くの場合適訳となっている。

4 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

日本語オノマトペと中国語オノマトペに関する先行研究の整理を踏まえ、解明されていない問題点や、その中でも特に日中対照研究に対して残されている問題点については、以下のようにまとめられる。

① 日中オノマトペの範囲やシステム上の相違について

中国語オノマトペの定義と範囲が明確になっていない。日本語オノマトペの定義が定着しているのに対し、中国語オノマトペの定義は未だ定着していない。中国語オノマトペの定義が明確になっていないことに起因してその範囲の規定も困難となり、文法的研究の停滞を招いてきた。一方、日本語オノマトペの定義と分類はある程度、明確になっていると見えるが、実際に使用する場合には、擬音語・擬態語両方の特徴を持っている語が多数あるため、その区別にはまだゆれがある。

また、日中両言語におけるオノマトペは、音韻的側面、形態的側面、用法的側面から、各自の言語システムを持っている。それを意識しながら、日中オノマトペのシステム上の相違点を考察する必要がある。

② 日中オノマトペ対照研究の方法について

日中オノマトペの対照研究は翻訳を中心したものが多く、それらは置き換えに注目し、日中オノマトペの翻訳においての問題は十分に意識されていない。そもそも日本語オノマトペと中国語オノマトペとの間にどのような相違があるか、という点に関する分析は充分には実施されてこなかったと言える。

また、日本語オノマトペは数が多く、日本語の代表的な語群と思われるため、それを中国語と対照する日中オノマトペ対照研究は少なくないが、その中の多くは、日本語に基づき中国語を考察する研究方法を取っている。日中オノマトペは、それぞれの言語体系において、違う役割をしているこ

とを無視して研究行うのは、あくまでも日本語視点から見る中国語である。そのため、日中オノマトペを対照する時には、それぞれの言語体系から出発して研究する必要があると考えられる。

③ 日中オノマトペの翻訳について

日中オノマトペの対照研究を整理してみると、それらは主に翻訳の視点からの研究であり、翻訳法に中心したものが多い。ただし、日本語オノマトペを中国語に翻訳する方法を提示するものが多いが、それはただの翻訳方法の羅列であり、具体的な場面に合わせてどのような翻訳法をすれば良いかについては、言及していないため、学習者にとっては参考にしにくいと考えられる。

また、日中オノマトペの翻訳研究は、小説や漫画から取材したものを研究対象にするものが多いが、その翻訳は訳者の影響を受ける可能性も考えに入れなければならない。そもそも、言語学習者に最も使われている辞書での翻訳はどのようになっているか、相違があるか否かということについて、再検討する必要があると考える。

先行研究の問題点に対して、本論文は以下のような検討をする。

①日本語オノマトペと中国語オノマトペの定義と範囲には、相違があるため、対照研究がより一層困難になってくる。本論文では、その相違を認定しながら、より広い範囲で日中オノマトペを検討する。日中コーパスを利用し、日中オノマトペの使用実態を調査する。それぞれの調査結果を対照し、日中オノマトペの相違点を明らかにする。

②日中オノマトペの相違点を踏まえた上で、例をあげながら、日中オノマトペのシステムの再検討を行う。従来のオノマトペの日中対照研究は、日本語を中心にした中国語の考察が多いため、日本語と中国語の体系において、オノマトペはそれぞれそのような特徴を持つかについての対照研究は多くない。本研

究は日本語と中国語それぞれの言語体系の下で、オノマトペの特徴を考察し、日中オノマトペのシステムにおける相違点を示す。

③日中オノマトペの対照研究は主に翻訳視点からの研究が多いが、日中オノマトペには認識されていない相違点がある。本論文では、辞書を利用し、日中オノマトペには、辞書レベルで示されないズレがあることを示す。さらに、日中オノマトペの対照研究を行い、その相違点をより明らかにした上で、日本語教育、日中翻訳においての問題点を検討する。

第2章 研究対象と研究方法

本章では、本論文が対象とする日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの抽出方法について詳しく述べる。また、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペを中心にした対照研究の研究方法について言及する。

1 「笑い」「泣き」に関するオノマトペ

日本語オノマトペに数は豊富であり、感情・感覚を組み込むオノマトペも多く見られるのに対し、中国語は感覚・感情に関するオノマトペの使用に日本語と差異があると推測できる。そのため、感情オノマトペを中心に研究を行うこととする。さらに、日本語には、「笑い系」オノマトペが数多く存在している。『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』は、修飾内容によってオノマトペを分類している。「感情・感覚に関するオノマトペ」という分類には、「笑い」と「泣き」に関するオノマトペが含まれている。語数を見ると、「笑い」に関するオノマトペの数がその分類の中で最も多く、「泣き」に関するオノマトペが二番目に多くなっている。さらに見ると、「笑い」や「泣き」を表すオノマトペの中には、「あはは」「ぎゃーぎゃー」のような擬音語もあれば、「にこにこ」「しくしく」のような擬態語もある。日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペは、擬音語と擬態語がそれぞれ多く存在しているため、他のオノマトペと比べて擬音語と擬態語がより多く観察できるものと考えられる。一方、中国語にも、「笑い」と「泣き」に関するオノマトペが多く存在している。さらに、中国語にも“哈哈”“嘿嘿”“呜呜”のような

擬音語が見られ、“笑眯眯”“笑嘻嘻”“哭哭啼啼”のような擬態語および擬態語相当の語も存在している。

以上から、「笑い」と「泣き」を表すオノマトペは、日本語も中国語も擬音語と擬態語がそれぞれ存在することが確認できる。対照研究を行う時に、研究対象をより全面的に取るため、「擬音語」と「擬態語」が両方観察できる日中感情オノマトペを研究対象にする。

2 利用するコーパスと辞書

本論文では、主に以下の日中コーパスと辞書を利用して考察を行う。

・ コーパス

日本語： 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ)

中国語： 《現代汉语语料库》 (CCL)

・ 辞書

日本語： 『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』 (小学館)

中国語： 《現代汉语词典》 (商务印书馆)

《現代汉语规范词典》 (外语教学与出版社)

日中辞典： 『日中辞典』 (上海訳文出版社・講談社)

『日漢大辞典』 (上海訳文出版社・講談社)

中日辞典： 『中日辞典』 (小学館)

『中日大辞典』 (大修館)

研究対象を抽出する際に、日中コーパスと日本語辞典、中国語辞典をそれぞれ利用して研究対象を確定する。

また、日中辞典、中日辞典を参照し、研究対象である「笑い」と「泣き」に関する日中オノマトペが、対訳されるときに如何なる相違点が生じるのかという点を明らかにする。

3 研究対象の抽出基準

ここでは、本論文で取り扱う日中オノマトペの抽出基準をそれぞれ述べる。先行研究の概観で述べたように、オノマトペの定義と範囲について、日本語と中国語は異なっている。特に中国語オノマトペの方は、研究者によって異なっている。本論文では、先行研究を踏まえて、主に「意味」と「語形」という2つの側面から研究対象を決める。

3.1 日本語オノマトペの抽出基準

日本語オノマトペは以下のような基準で抽出する。

意味：「笑い声」・「泣き声」を表す語、「笑う様子」・「泣く様子」を表す語

語形：「オノマトペ標識」⁶を持つ語

日本語において、オノマトペは擬音語と擬態語の総称であると定義されている。それに従い、「笑い声・泣き声を表す語（擬音語）と笑う様子・泣く様子を表す語（擬態語）」を抽出する。さらに、「境界オノマトペ」などを除外す

⁶リ語尾、撥音、促音、長音、反復辞などの標識を「オノマトペ標識」と呼ぶ。具体的には Waida(1984)に参照。

るために、語形的には「オノマトペ標識」を持っていることも、研究対象の抽出基準にする。

3.2 中国語オノマトペの抽出基準

中国語オノマトペは以下のような基準で抽出する。

意味：「笑い声」・「泣き声」を表す語、「笑う様子」・「泣く様子」を表す語

語形：一音節、二音節以上に反復（完全反復・部分反復）をしている語、または母音子音の交替が見られる語

中国語において、オノマトペ（象声詞）の定義は研究者によって異なっているが、本論文は、より広い範囲で中国語オノマトペを取り扱い、日本語との対象研究を行うため、従来の定義と異なり、様子を表す「擬態語」も中国語オノマトペに含めることにする。また、語形的特徴は野口（1995）の分類を参照し、「一音節、二音節以上は反復（完全反復・部分反復）、母音子音の交替」という基準にした。

以上のように、日中両言語における研究対象を選定する際、基本的には「意味」「語形」という2つの基準に従い、研究対象を抽出した。

4 研究対象の抽出

4.1 日本語における「笑い」に関するオノマトペの抽出

本論文では、コーパスと辞書を利用して「笑い」「泣き」に関する日本語オノマトペを抽出する。まず、「BCCWJ」で「笑い」に関するオノマトペを抽出するため、以下のような手順で検索を行った。

①短単位検索→「キー」→「語彙素」に「笑う」を入力して検索

②-a 前方共起条件の追加→「キーから 1 語」→「品詞」の「大分類が副詞」を入れて検索

②-b 前方共起条件の追加→「キーから 2 語」→「品詞」の「大分類が副詞」を入れて検索

「笑い」に関するオノマトペは動詞の「笑う」と共起する場合が多いと想定するため、「笑う」と共起するオノマトペを以上の手順で検索した。さらにオノマトペが動詞と共起する際、「に」や「と」などを入れて共起する場合もあると考えられ、〔②-a〕と〔②-b〕を分けて検索を行った。〔①→②-a〕で得られた「笑い」に関するオノマトペを直接共起オノマトペと呼び、〔①→②-b〕で得られた「笑い」に関するオノマトペを間接共起オノマトペと呼ぶことにする。それぞれの検索結果を、表 2-1 と表 2-2 で表示する。

表 2-1 動詞「笑う」と直接共起する日本語「笑い」に関するオノマトペ

にこにこ、にっこり、くすくす、くつつ、にやにや、げらげら、にんまり、にやり、どっ、けらけら、へらへら、にたにた、くすり、ぐふぐふ、からから、きゅっきゅっ、ぐつぐつ、けたけた、ころころ、かぶかぶ、にかにか、えへらえへら、きっきっ

表 2-2 動詞「笑う」と間接共起する日本語「笑い」に関するオノマトペ

あはあは（と）、えへらえへら（と）、かーっ（と）、からから（と）、からり（と）、きゃっきゃっ（と）、くすっ（と）、くすくす（と）、くすり（と）、くすん（と）、くっく（と）、くふくふ（と）、けけけ（と）、けたけた（と）、けらけら（と）、げらげら（と）、けろり（と）、ころころ（と）、にーっ（と）、にこっ（と）、にこにこ（と）、にこり（と）、にたり（と）、にっ（と）、にっこり（と）、にやっ（と）、にやにや（と）、にやり（と）、にんまり（と）、ひっひっ（と）、ふっ（と）、ぷっ（と）、にかっ（と）、へらっ（と）、へらへら（と）、わーっ（と）

表 2-1 と表 2-2 の二つの表の中には、重複しているオノマトペが存在するため、両表の内容をまとめると、表 2-3 のようになる。すなわち、コーパス「BCCWJ」から抽出した「笑い」に関する日本語オノマトペは、表 2-3 のように、合計 45 語にまとめることができる。

表 2-3 「BCCWJ」から抽出した「笑い」に関するオノマトペ

あはあは（と）、えへらえへら（と）、かーっ（と）、からから（と）、かぷかぷ、からり（と）、きつきつ、きやつきやつ（と）、きゅつきゅつ、くすつ（と）、くすくす（と）、くすり（と）、くすん（と）、くっく（と）、ぐつぐつ、くふくふ（と）、ぐふぐふ、けけけ（と）、けたけた（と）、けらけら（と）、げらげら（と）、けろり（と）、ころころ（と）、どっ、にーっ（と）、にかにか、にこっ（と）、にこにこ（と）、にこり（と）、にたにた、にたり（と）、にっ（と）、にっこり（と）、にやっ（と）、にやにや（と）、にやり（と）、にんまり（と）、ひっひっ（と）、ふっ（と）、ぷっ（と）、にかっ（と）、へらっ（と）、へらへら（と）、わーっ（と）

「笑い」に関するオノマトペは基本的に動詞「笑う」と共起する用法があると想定して検索したが、漏れがある可能性も考えられる。また、オノマトペは臨時的な用法や個人的な用法があると考えられる。以上の原因で、より全面的に研究対象を選定するため、コーパスで抽出した「笑い」に関するオノマトペだけでなく、辞書で項目として立てられた、より安定的な使い方を持っている「笑い」に関するオノマトペも合わせて研究対象にする。

次に、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』における「感情・感覚に関するオノマトペ」－【笑う】の部分で取り上げられているオノマトペ合計 74 語も、研究対象に入れる。辞書で抽出したオノマトペを具体的に以下の表 2-4 に示す。

表 2-4 『日本語オノマトペ辞典』における「笑い」に関するオノマトペ

あっはっは、あはは、わはは、あはあは、いひひ、うっしっし、うはうは、うひひ、うひよひよ、うふっ、うふふ、えへへ、えへらえへら、おほほ、かかか、がはは、からから、かんらかんら、きゃー、きゃっきゃっ、ぎやはは、きゅっきゅっ、くーっ、くっ、くくっ、くすくす、くすっ、くすり、くすりくすり、くすん、くっく、くっくっ、けけけ、けたけた、げたげた、げたっ、けっけっ、けらけら、けろけろ、げらげら、ころころ、どっ、にーっ、にかっ、にこっ、にこり、にっこり、にこにこ、にたっ、にたにた、にたりにたり、にっ、にっこにこ、にやっ、にやにや、にやり、にんまり、はっはっ、ははは、ひっひっ、ひひひ、ぷー、ふっ、ぷっ、ふっふっ、ふふ、ふふん、へっへっ、へへへ、へらへら、ほくほく、ほっほっ、ほほほ、わーっ

表 2-3 (コーパスから抽出したオノマトペ) と表 2-4 (辞書から抽出したオノマトペ) を合わせると、以下の表 2-5 のようにまとめられる。すなわち、本論文で研究対象として取り扱う日本語における「笑い」に関するオノマトペは、表 2-5 で表示している合計 85 語となる。

表 2-5 日本語における「笑い」に関するオノマトペ⁷

あっはっは、あはは、わはは、あはあは、いひひ、うっしっし、うはうは、うひひ、うひよひよ、うふっ、うふふ、えへへ、えへらえへら、おほほ、かかか、がはは、かーっ、かぶかぶ、からから、からり、かんらかんら、きっきっ、きゃー、きゃっきゃっ、ぎやはは、きゅっきゅっ、くーっ、くっ、くくっ、くすくす、くすっ、くすり、くすりくすり、くすん、くっく、くっくっ、ぐっぐっ、くふくふ、ぐふぐふ、けけ、けたけた、げたげた、げたっ、けっけっ、けらけら、けろけろ、げらげら、けろり、ころころ、どっ、にーっ、にかっ、にかにか、にこっ、にこり、にっこり、にこにこ、にたっ、にたにた、にたり、にたりにたり、にっ、にっこにこ、にやっ、にやにや、にやり、にんまり、はっはっ、ははは、ひっひっ、ひひひ、ぷー、ふっ、ぷっ、ふっふっ、ふふ、ふふん、へっへっ、へへへ、へらっ、へらへら、ほくほく、ほっほっ、ほほほ、わーっ

⁷ 下線を引いた語は、表 2-3 において表 2-4 と重複していない 11 語である。

4.2 日本語における「泣き」に関するオノマトペの抽出

「泣き」に関するオノマトペの抽出も、「笑い」の場合と同様に、コーパスと辞書を利用して抽出することとなる。まず、「BCCWJ」で「泣き」に関するオノマトペを抽出するため、以下のような手順で検索を行った。

①短単位検索→「キー」→「語彙素」に「泣く」を入力して検索

②-a 前方共起条件の追加→「キーから 1 語」→「品詞」の「大分類が副詞」を入れて検索

②-b 前方共起条件の追加→「キーから 2 語」→「品詞」の「大分類が副詞」を入れて検索

以上の手順で検索を行い、〔①→②-a〕で得られた「笑い」に関するオノマトペを直接共起オノマトペと呼び、〔①→②-b〕で得られた「笑い」に関するオノマトペを間接共起オノマトペと呼ぶことにする。それぞれの検索結果は、表 2-6 と表 2-7 で表示する。

表 2-6 動詞「泣く」と直接共起する日本語「泣き」に関するオノマトペ

わあわあ、わんわん、おろおろ、しくしく、ぴーぴー、めそめそ、おいおい、びーびー、ぐちぐち、きゃあきゃあ、ぎゃあぎゃあ、ぼろぼろ、ぼろぼろ、ひーひー、きーきー、はらはら、がんがん
--

表 2-7 動詞「泣く」と間接共起する日本語「泣き」に関するオノマトペ

じーん、さめざめ、しくしく、ぐすぐす、わっ、ぼろぼろ、うわーん、おいおい、わっ、さめざめ、めそめそ、ほろほろ、わあわあ、おんおん、わらわら、ぽろっ、こんこん、びーびー、ひくひく、おうおう、しみじみ、ふぼろぼろ
--

表 2-6 と表 2-7 の内容をまとめ、動詞「泣く」と共起する「泣き」に関するオノマトペが表 2-8 のようになる。すなわち、コーパス「BCCWJ」から抽出した

「泣き」に関する日本語オノマトペは、表 2-8 のように、合計 29 語にまとめられる。

表 2-8 「BCCWJ」から抽出した「泣き」に関するオノマトペ

うわーん、おいおい、おうおう、おろおろ、おんおん、がんがん、きやあきやあ、ぎやあぎやあ、きーきー、ぐちぐち、ぐすぐす、こんこん、さめざめ、しくしく、じーん、しみじみ、めそめそ、はらはら、ひーひー、ぴーぴー、びーびー、ぽろっ、ほろほろ、ぼろぼろ、ぽろぽろ、わあわあ、わっ、わらわら、わんわん

次に、「笑い」に関するオノマトペの選定方法と同様に、「泣き」に関するオノマトペについても、より全面的に研究対象を選定することを目的として、コーパスで抽出した「泣き」に関するオノマトペだけではなく、辞書で項目が立てられたより安定的な使い方をしている「泣き」に関するオノマトペも合わせて研究対象にする。

『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』における「感情・感覚に関するオノマトペ」-【泣く】の部分で取り上げられているオノマトペは 46 語であり、具体的には以下の表 2-9 で表示したものである。

表 2-9 『日本語オノマトペ辞典』における「泣き」に関するオノマトペ

しくしく、ぼろぼろ、めそめそ、ぼろぼろ、おぎゃーおぎゃー、うるうる、おいおい、わっ、わんわん、ぎゃー、さめざめ、わーわー、あーん、ぼろり、ほろり、おろおろ、ぐすぐす、ぐすん、ひーひー、わーん、うわーん、おんおん、あんあん、えんえん、ぐしょぐしょ、しおしお、よよ、べそべそ、ぐっすん、うえんうえん、うるるん、うるっ、えーん、おうおう、ぎやあぎやあ、ぐすっ、ぐすり、ぐすりぐすり、くすん、しぼしぼ、ひーこら、ひっく、ひっひっ、ほろっ、ほろりほろり、ぼろりぼろり

表 2-8 (コーパスから抽出したオノマトペ) と表 2-9 (辞書から抽出したオノマトペ) を合わせた結果は、以下の表 2-10 のようにまとめられる。すなわち、

本論文で取り扱う日本語における「泣き」に関するオノマトペは、表 2-10 で表示している合計 59 語となる。

表 2-10 日本語における「泣き」に関するオノマトペ⁸

あーん、あんあん、うえんうえん、うるるん、うるっ、うるうる、うわーん、えーん、えんえん、おーおー、おいおい、おうおう、おぎゃーおぎゃー、おろおろ、おんおん、きーきー、きやあきやあ、ぎゃー、ぎゃーぎゃー、がんがん、ぐすぐす、ぐすん、ぐしょぐしょ、ぐっすん、ぐすっ、ぐすり、ぐすりぐすり、くすん、ぐちぐち、しおしお、しくしく、さめざめ、しみじみ、しばしば、じーん、めそめそ、はらはら、ひーこら、ひっく、ひっひっ、ひーひー、びーびー、びーびー、べそべそ、ほろっ、ぽろっ、ほろほろ、ほろりほろり、ぽろりぽろり、ぽろぽろ、ぽろぽろ、ぽろり、ほろり、よよ、わーわー、わっ、わらわら、わんわん、わーん、

以上のような手順で、日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペをそれぞれ 85 語と 59 語選定し、本論文の研究対象にする。

4.3 中国語における「笑い」に関するオノマトペの抽出

本論文では、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの研究対象の抽出も、日本語側と同様に、コーパスと辞書の両方を利用して行なっていく。まず、「CCL」で動詞の“笑”(xiao)と共起する「笑い」に関するオノマトペを抽出する。具体的には、以下のような条件で検索を行った。

検索モード：普通查询

検索範囲： 现代汉语

検索条件： ① “笑”

⁸ 下線を引いた語は、表 2-8 において表 2-9 と重複していない 13 語である。

② “地笑” “笑得”

中国語におけるオノマトペについては、動詞の“笑”(xiao)と共起する場合は、直接共起と間接共起という二つの状況を分けて検索を行った。検索条件①で得られたオノマトペは直接共起オノマトペと考えられ、検索②で得られたオノマトペは間接共起と考えられる。①と②で得られた中国語における「笑い」に関するオノマトペはそれぞれ表 2-11 と表 2-12 で表示する。

表 2-11 “笑”と直接共起する「笑い」に関するオノマトペ⁹

笑嘻嘻，笑哈哈，笑咪咪（笑咪咪），笑盈盈，笑吟吟，笑呵呵，笑微微，笑漾漾，哈哈，咯咯，哧哧，呵呵，嘿嘿，嘻嘻，嘎嘎

表 2-12 “笑”と間接共起する「笑い」に関するオノマトペ

咯咯（格格），吃吃（哧哧、痴痴），呵呵（嗒嗒），嘿嘿，哈哈，朗朗，嘻嘻，咕咕，哧，嘻嘻哈哈，嘎嘎，咿咿，噗，哼哼

コーパスで“笑”と直接共起する「笑い」に関するオノマトペを検索した時に、“オノマトペ+笑”（例：哈哈笑）と“笑+オノマトペ”（例：笑哈哈）という2つの組合類型が見られた。“オノマトペ+笑”（例：哈哈笑）の場合に、オノマトペは動詞の“笑”を修飾する働きをしているため、オノマトペと動詞の“笑”はそれぞれ独立な意味を持つ語と考えられ、オノマトペをそのまま（表 2-11 で示した“哈哈，咯咯，哧哧，呵呵，嘿嘿，嘻嘻，嘎嘎”の部分）取り上げた。一方、“笑+オノマトペ”の場合に、“笑”を加えることによって、オノマトペの意味も変わってくると考えられる。例えば、“哈哈”は“笑声（訳：笑い声）”という意味を持っているが、“笑”をその前に加えることにより、“笑哈哈”は“形容笑的样子（訳：笑う様子）”という意味を持つよう

⁹ 本論文では、中国語において同じ読み方で違う漢字で表記をしているオノマトペを同じ語として取り扱うことにしている（例：笑咪咪=笑咪咪，哧哧=吃吃）。

になる。“笑+オノマトペ”の場合、“笑”自体もその語の一部となり、“笑+オノマトペ”を1語として扱った方が適切と考えられる。そのため、“笑”と直接共起するオノマトペを抽出する際に、同じオノマトペが出現しても、その出現位置によって、“オノマトペ+笑”（例：“哈哈，呵呵，嘎嘎”など）と“笑+オノマトペ”（例：“笑哈哈，笑呵呵”など）は2つのオノマトペとして抽出した。抽出したオノマトペは表 2-11 で表示している。

また、“オノマトペ+地+笑” “笑+得+オノマトペ”のような“地”や“得”を入れて動詞の“笑”と間接的に共起する場合も多く存在するため、“地笑” “笑得”を検索条件とし“笑”と間接共起する「笑い」に関するオノマトペも検索した。その結果は表 2-12 で表示している。

次に、コーパスだけではなく、辞書も参考にして「笑い」に関するオノマトペを調べた。《現代汉语词典》（2012 版）、《现代汉语规范词典》（2012 版）を参照し、「笑う声」「笑う様子」「笑う表情」のような意味を持っている語、すなわち「笑う」を表現するオノマトペ 19 語を取り出し、表 2-13 で表している。

表 2-13 辞書から抽出した「笑い」に関するオノマトペ

哧哧（吃吃） 嘎嘎 咯咯（格格） 哈哈 呵呵（嗒嗒） 嘿嘿（嗨嗨） 扑哧（噗嗤） 嘻嘻 嚯嚯（霍霍） 笑哈哈 笑呵呵 笑嘿嘿 笑咧咧 笑眯眯（笑咪咪 笑迷迷） 笑微微 笑嘻嘻 笑吟吟 笑盈盈 笑悠悠

コーパス「CCL」で抽出した語（表 2-11 と表 2-12）、辞書で抽出した語（表 2-13）をまとめ、中国語における「笑い」に関するオノマトペは表 2-14 で表したように、合計 27 語となる。

表 2-14 中国語における「笑い」に関するオノマトペ¹⁰

哧哧（吃吃） 嘎嘎 咯咯（格格） 哈哈 呵呵（哧哧） 嘿嘿（嗨嗨） 扑哧（噗嗤） 嘻嘻 嚯嚯（霍霍） 笑哈哈 笑呵呵 笑嘿嘿 笑咧咧 笑眯眯（笑咪咪 笑迷迷） 笑微微 笑嘻嘻 笑吟吟 笑盈盈 笑悠悠 <u>笑漾漾</u> <u>朗朗</u> <u>咕咕</u> <u>啾</u> <u>嘻嘻哈哈</u> <u>咿咿</u> <u>噗</u> <u>哼哼</u>
--

4.4 中国語における「泣き」に関するオノマトペの抽出

中国語における「泣き」に関するオノマトペの抽出も、「笑い」の場合と同様に、コーパスと辞書を利用して抽出することとする。まず、「CCL」を利用し、動詞の“哭”（ku）と共起する「泣き」に関するオノマトペを抽出する。検索条件は以下のようなになる。

検索モード：普通查询

検索範囲： 现代汉语

検索条件： ① “哭”

② “地哭” “哭得”

検索条件を①と②に分けて検索することで、動詞の“哭”（ku）と直接共起するオノマトペと、動詞の“哭”と間接共起するオノマトペを抽出した。それぞれの結果は、表 2-15 と表 2-16 の通りである。

表 2-15 “哭”と直接共起する「泣き」に関するオノマトペ

哭哭啼啼 呜呜 嚶嚶 哇哇

¹⁰ 下線を引いた語は、表 2-11 と表 2-12 の中で、表 2-13 と重複していない 8 語である。

表 2-16 “哭”と間接共起する「泣き」に関するオノマトペ

哇 哇哇 哇啦 哇啦哇啦 哇呀哇呀 嚶嚶 呜呜 (唔唔) 呜呜咽咽 呜呜哇哇
 抽抽嗒嗒 (抽抽答答, 抽抽搭搭) 抽抽噎噎 稀里哗啦 嗷嗷 噢噢 嗒嗒
 泪涟涟 呱呱 唏唏噓噓 哞哞 哼哼唧唧 呼哧呼哧 (呼嗤呼嗤) 喃喃 哗哗

表 2-15 で表示している“哭”と直接共起するオノマトペは、“嚶嚶+哭”のような形で“哭”と共起しているオノマトペもあれば、“哭哭啼啼”のように語自体に“哭”が含まれているオノマトペもある。どちらも“哭”という語の前後に直接共起しており、泣く様子を表すオノマトペであるため、ここでは両方とも“哭”と直接共起する「泣き」に関するオノマトペ語として取り扱うことにする。

また、「笑い」に関するオノマトペの抽出方法と同様に、「泣き」に関するオノマトペを抽出する場合にも、コーパスだけではなく、辞書も参考した。《現代汉语词典》(2012 版)、《现代汉语规范词典》(2012 版)を参照し、「泣く声」「泣く様子」「泣く表情」のような意味を持っている語、すなわち「泣く」を表現する 20 語を取り出し、表 2-17 に示した。

表 2-17 辞書から抽出した「泣き」に関するオノマトペ

呜呜, 哇哇, 呱呱, 嗷嗷, 嚶嚶, 啊啊, 呜哇, 哇啦哇啦
 泪汪汪, 哭哭啼啼, 扑簌簌, 呜呜咽咽, 潜潜, 泪盈盈, 哭咧咧, 滴滴答答,
 哭咽咽, 哭兮兮, 哭哭咧咧, 哭唧唧

コーパス「CCL」で抽出したオノマトペ (表 2-15 と表 2-16) と、辞書で抽出したオノマトペ (表 2-17) をまとめ、中国語における「泣き」に関するオノマトペは表 2-18 で表したように、合計 35 語となる。

表 2-18 中国語における「泣き」に関するオノマトペ¹¹

呜呜，哇，哇哇，哇啦，呱呱，嗷嗷，嚶嚶，啊啊，呜哇，哇啦哇啦 泪汪汪，哭哭啼啼，扑簌簌，呜呜咽咽，呜呜哇哇，潸潸，泪盈盈，哭咧咧，滴滴答答，哭咽咽，哭兮兮，哭哭咧咧，哭唧唧，哇呀哇呀，稀里哗啦，抽抽嗒嗒（抽抽答答，抽抽搭搭），抽抽噎噎，嗒嗒，泪涟涟，唏唏嘘嘘，啾啾，哼哼唧唧，呼哧呼哧（呼嗤呼嗤），喃喃，哗哗

以上のような手順で、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペをそれぞれ 27 語、35 語を選定し、本論文の研究対象にする。

5 本論文の研究方法

本論文では、日本語コーパスと中国語コーパスをそれぞれ利用して用例調査を実施するという研究方法を採る。日本語のオノマトペは、国立国語研究所で制作された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）（以下は「BCCWJ」と略する）を用いて用例を収集し、中国語のオノマトペは、『現代汉语语料庫』（CCL）（以下は「CCL」と略する）を用いて用例を収集した。日中両言語のコーパスをそれぞれ利用し、第 4 節で選定した研究対象のオノマトペを調査することで、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用実態を把握する（第 3 章と第 4 章）。さらに、コーパスの用例を参照しながら、「笑い」と「泣き」を表現するときを使用される日中オノマトペは、それぞれ如何なる特徴を持っているのかについて、詳しく検討する。

また、日中・中日辞書を参照し、「笑い」と「泣き」に関する日中オノマトペが対訳されるときに、どのような相違点が生じるのかという点を明らかにす

¹¹ 下線を引いた語は、表 2-15 と表 2-16 の中で、表 2-17 と重複していない 15 語である。

る（第6章）。さらに、その相違が生じた理由の分析も実施し、日中オノマトペが翻訳される際に現れやすい相違点の予測を目指す。

第3章 「笑い」に関するオノマトペ

本章では、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの使用実態について考察する。「BCCWJ」と「CCL」をそれぞれ利用し、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの用例調査を行い、日中オノマトペの使用実態について明らかにする。また、「笑い」に関するオノマトペの使用率について、日中両言語の相違点を明らかにする。

1 日本語の「笑い」に関するオノマトペの使用

1.1 擬音語・擬態語の分布

本節は「笑い」を表現する日本語オノマトペ自体の使用実態を考察する。第2章で選定した85語の日本語「笑い」に関するオノマトペを「BCCWJ」で調査した結果、各語の用例数は以下、表3-1に示した通りである。

表3-1 「BCCWJ」で調査した日本語における「笑い」に関するオノマトペの用例数

語	用例数	語	用例数	語	用例数	語	用例数
にこにこ	972	はっはっは	95	くすん	23	かかか	3
にっこり	914	きゃー	71	けたけた	23	きゅっきゅっ	2
ははは	860	くすり	69	おほほ	21	くーっ	2
あはは	748	けらけら	67	けけ	18	けるける	2
にやり	639	へらへら	67	へっへっ	13	ぷー	2
にやにや	445	くっくっ	66	にかっ	13	にたりにたり	2
ふふ	395	がはは	54	うふっ	10	にーっ	2

うふふ	357	わはは	52	くくっ	10	へらっ	2
くすくす	289	どっ	52	うひひ	9	かんらかんら	1
ぷっ	285	ひひひ	50	にたっ	9	げたげた	1
くっ	272	ふっ	50	いひひ	7	きっきっ	1
にやっ	210	ふふん	46	ぐふぐふ	7	ぐつぐつ	1
にこっ	196	にたにた	43	にかにか	6	くふくふ	1
ほほほ	193	きゃっきゃっ	40	うっしっし	6	かーっ	1
えへへ	181	うはうは	39	ひっひっ	6	けろり	1
へへへ	165	あっはっは	36	あはあは	5	からり	1
にこり	161	からから	33	にっこにこ	5	ぎやはは	0
にっ	148	ふっふっ	33	えへらえへら	5	くすりくすり	0
にんまり	145	ころころ	32	うひょうひよ	4	げたっ	0
げらげら	127	にたり	29	くっく	4		
わーっ	109	ほくほく	28	かぶかぶ	4		
くすっ	107	ほっほっ	26	けっけっ	4		

『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』の内容を参照したところ、以下のような解釈が見られた。

- (1) a. おほほ：【声・さま】口をすぼめて軽く笑う声。上品に、または気どって笑うさま。
- b. からから：【声・さま】高く笑う声。屈託無く笑うさま。
- c. ははは：【声・さま】屈託無く快活に笑う声。また、そのさま。
- d. にこにこ：【さま】嬉しそうに笑みを浮かべ続けるさま。
- e. にっこり：①【さま】明るい表情で笑うさま。
②【さま】和やかなさま。心地よいさま。

(1)のような語釈から、日本語における「笑い」に関するオノマトペは、【声・さま】と【さま】という二種類に分けられる。いわゆる、前者は「擬音語」「擬態語」の性質を両方持っている語であり、後者は「擬態語」の性質だ

けを持っている語である。検索対象の 85 語の「笑い」に関するオノマトペの解釈を見ると、「擬声語」「擬態語」の分布は以下の表 3-2 になる。

表 3-2 日本語における「笑い」を表現する「擬音語」と「擬態語」の用例分布

分類	語数/ 比率	語例	コーパスでの用例数 / 比率
【さま】—— 擬態語	25 / 29.4%	に一つ、にかっ、にこっ、にこり、にっこり、にこにこ、にたっ、にたにた、にっ、にっこにこ、にやっ、にやにや、にやり、にんまり	4077/ 44.6%
【声・さま】—— 擬音語・擬態語	60 / 70.6%	げらげら、くすくす、がはは、からから、くっくっ、ふふん、ははは、ひひひ	5055/ 55.4%

日本語の「笑い」を表現するオノマトペの中で、擬態語の性質のみを持っている語は 25 語であり、他の語は全て擬音語と擬態語の性質を両方持っている。そこから、日本語の「笑い」に関するオノマトペは、①単なる「擬態語」である語が少ない；②単なる「擬音語」である語がない；③「擬音語」の性質を持っている語は、必ず「擬態語」の性質を持っている語という 3 つの特徴を持っていることが読み取れる。すなわち、日本語には「音」を模倣しながら「様子」を表現する語がかなりあるということである。

また、「擬態語」であるかどうかという面から見れば、「笑い」に関するオノマトペ全体が「擬態語」の性質を持っていると言える。すなわち、日本語で「笑い」を表現する時、「笑う声」を表現できるかどうかという点は語によっ

て異なるが、「笑う様子」を表現する「擬態語」の機能は全ての語が必ず持っていると言える。

表 3-2 から、日本語における「笑い」に関するオノマトペのうち、「擬態語」の数は 25 語であり、比率は全体の 29.4%しか占めていないが、実際のコーパスでの用例数を見ると、その用例数は全体の用例の 44.6%に上ることが確認できた。その用例数の比率はほぼ 5 割になっており、「擬音語」のコーパスでの用例の比率と比べると、差が大きくなかった。すなわち、語数から見ると、日本語における「笑い」に関するオノマトペのうち、「擬音語」の数が圧倒的に多いが、実際の使用状況を確認したところ、数が少ない擬態語の方が使用率が比較的高いと言える。

1.2 オノマトペの用法

1.1 では、日本語における「笑い」に関するオノマトペ自体の使用頻度を調査し、「笑い」に関するオノマトペ全体の使用状況を把握したが、ここではそれらとほかの動詞などとの組み合わせがどのようになっているのかという点について検討する。本節では、「笑い」に関するオノマトペの使用上のバリエーションを明らかにするため、それぞれの用法を分けて調査を行う。

「BCCWJ」で検索した結果、「笑い」に関するオノマトペの用法は、主に以下の 5 種類に分けられる。

a. 名詞が後接する

- (2) 腹が立つことがあってもにっこり笑顔でうまくかわしましょう。
- (3) 不真面目な顔無表情の顔、逆にニヤニヤ顔などすべて減点になる
- (4) 区役所別館幼児室で「ニコニココーナー」を開設しています。
- (5) にこにこ子育て相談予約不要です。
- (6) 毎月 25 日はにこにこ料理の日

- (7) ニヤニヤ笑いを浮かべながら、あたしの足を押さえつける。
- (8) 「元気そうに見えますが」と問うと、彼はにこっと照れ笑いを浮かべながら、少し戸惑った様子であった。
- (9) ハニィフの方も花が咲いたように顔をほころばせて、にっと白い歯を見せた。

b. 動詞が後接する

- (10) 妙子がにっこり微笑むと、いきなり抱きついてきた。
- (11) 以上で、なぜゲルマン国の外務大臣がニヤリとほくそえんだか、おわかりいただけたと思う。
- (12) 仕事をほったらかして話に熱中している様子を見て、何だろうと出て来た文子にも、男はにこにこ語りかけた。
- (13) 砂沢はニヤニヤしながら、体を起こしてお茶を飲んだ。
- (14) 怒るのは当然至極。今まで、にこにこ付き合ってきた方が不思議だよ。
- (15) 台所で、浴衣の肌脱ぎになって汗を拭いていた父が、にこにこ出迎えてくれた。

c. 形容詞・形容動詞を後接する

- (16) 安定期に入り、悪阻もおさまると嘘のようにそれがおさまり、ニコニコ楽しく過ごせるようになりました。
- (17) いつもにこにこ元気な子、が好ましい像であり、怒りっぽくて不機嫌な子は、その対局にある。

d. 引用

- (18) 「奥さん！」とバイクに乗った若い出前持ちさんに、声かけられ「うふふ、きょうのファッションもイケてるかしら？」なんて思って振り返ったら「背中！」だって。
- (19) 春生の一言で、隆一は急に「えへへ」と機嫌のよさそうな笑顔になる。

(20) 「どう、ちがうんですか」 「多幸焼きにはな、たこが入っとらんのね。 わはは。」

e. その他

(21) 男の ニコニコ は信用しませんが (笑) 、女の ニコニコ はとてもすばらしい。

(22) どことなく嬉しそうで、 ニヤニヤ は止まらない。

(23) お絵かきしてる人達を見て ニヤニヤ なんかにしてないんだから。

(24) 乗っている矢部さんは ニコニコ。

(25) とにかく琢哉は、この事態を深刻に心配しているのに、私と二人の五年生は ニヤニヤ です。

(26) 場所代も何もとりませんが、売り上げのほんの一部だけマックローに寄付してもらい ニコニコ です。

(2)～(26)の例に示したように、「笑い」に関するオノマトペは、その後接語の種類でおよそ5つの類別に分けられる。

各種類の用法を詳しく見ると、【a. 名詞が後接する】場合、「笑顔」「笑い」などのような笑う表情を直接に連想できる名詞がある一方で、「子育て」「コーナー」「料理の日」などのような笑う表情や様子を直接連想できない名詞もある。さらに、(7)(8)(9)の用例では、「にやにや」「にこっ」の後ろに「笑い」「照れ笑い」のような名詞が後接しているが、そのオノマトペの働きは、(2)～(6)のような後接する名詞を修飾する働きと異なり、曖昧なところがある。(7)で用いられるオノマトペはその後接する名詞「笑い」を修飾していると思ふこともできれば、「笑いを浮かべる」を修飾していると思ふこともできる。さらに、(8)と(9)は一見すると名詞の「照れ笑い」と「白い歯」と後接しているが、実際に「にこっと照れ笑い」「にっと白い歯」のような用法はほかに見られないため、(8)と(9)はむしろ副詞的用法として考えた方が妥当である。以上から、「笑い」に関するオノマトペが名詞を後接する場合の働きは、

直接その後接する名詞を修飾していることと、後接する名詞を含む文全体を修飾することとの2点が読み取れる。

【b. 動詞が後接する】の用例の中には、「微笑む」「ほくそ笑む」のように動詞自体が「笑う」という動作を表す意味を持つ語とオノマトペと共起する場合と、(12) (13) のように「笑う」という意味を持たず、顔や頭の動作を表す語と共起する場合とがある。さらに、(14) (15) の「付き合う」「出迎える」のような、身体範囲の動作を表す語と共起する用例も見られる。

【c. 形容詞が後接する】の用法は少なく、**「楽しい」「元気」という2つの語と共起する用例しか見られなかった。**また、形容詞が後接できる「笑い」に関するオノマトペは「にこにこ」だけであった。

【d. 引用】の用法の判断基準は、「」の中に直接引用できるかどうかということである。直接「」を使って音声をそのまま真似して表現することがその働きと考えられているため、この用法はほぼ「擬音語」に集中していると予測できる。しかし、日本語においては、「擬音語」と「擬態語」との境界が曖昧な語が多い。そのため、日本語の「笑い」に関するオノマトペの「引用用法」については、詳しく考察する必要がある。

【e. その他】の用法には、(21)～(24)のように、「笑い」に関するオノマトペ自体が名詞化して用いられる用法が見られる。さらに、(25) (26) のように、「笑い」に関するオノマトペが形容詞のような働きをする用例も見られた。

以上のように、「笑い」に関するオノマトペはどのような用法があるかについて、用例を調べながら5つの用法に分けてまとめた。その5つの用法は、「笑い」に関するオノマトペごとに用例数も異なっている。本論文は、表3-1で調査した用例数が100例以上の「笑い」に関するオノマトペを調査した。各オノマトペの用法の具体的な差異は以下の表3-3で示す通りである。

表 3-3 日本語における「笑い」に関するオノマトペの各用法の用例数

	名詞の 後接	動詞の後接			形容詞 の後接	引用	その他
		全用例	「笑う」	「する」			
にこにこ	117	833	114	402	4	0	18
にっこり	16	892	350	264	0	0	6
にやり	12	613	272	191	6	0	8
にやにや	11	417	132	189	1	0	16
にやっ	7	203	127	61	0	0	0
にこっ	8	188	98	42	0	0	0
にんまり	5	136	41	63	1	0	3
にこり	8	69	26	25	0	0	84
にっ	0	80	42	13	0	0	14
ほくほく	17	4	0	3	0	0	7
くすくす	27	250	223	0	0	6	6
げらげら	6	104	92	0	0	5	12
ははは	0	23	23	0	1	837	0
あはは	0	22	20	0	0	726	0
ふふ	0	22	18	0	0	363	10
うふふ	1	7	5	0	0	347	3
ぷっ	0	15	24	0	0	169	35
くっ	0	112	12	0	0	148	12
ほほほ	0	28	8	0	0	165	0
えへへ	1	14	3	0	0	156	10
へへへ	0	8	4	0	0	148	9
わーっ	0	26	0	0	0	78	5
くすっ	0	82	75	0	0	22	3

表 3-3 は、語自体の用例数が 100 例以上となっている 23 語を中心に、それらが各用法で使われる用例数を調査した結果である。各用法で使用された語を見ると、日本語の「笑い」に関するオノマトペの用法は、主に三つの特徴が見える。

一つ目は、日本語の「笑い」に関するオノマトペの用法が、「動詞と後接する用法」、「引用用法」に集中していることである。表 3-3 で示したように、日本語における「笑い」に関するオノマトペの各用法で、使用率が一番高いのは、

「動詞と後接する用法」と「引用用法」のいずれになっている。具体的に言うと、「動詞と後接する用法」が多用されている語は、「にこにこ」「にっこり」のような、「擬態語」のみの性質を持っている語である。一方、「引用用法」が多用されている語は、「ははは」「ほほほ」「うふふ」のような、「擬音語」の性質を持っている語に集中している。

二つ目は、「笑い」に関するオノマトペの「すると共起する用法」が、「引用用法」と相補分布となっている。表 3-3 を見ると、「すると共起する用法」ができる語であれば、「引用用法」の使用例は 0 となっており、逆に、「引用用法」が可能であれば、「すると共起する用法」は不可能となっている。すなわち、日本語における「笑い」に関するオノマトペの使用には、「すると共起する用法」と「引用用法」は相補分布となっていることが言える。

三つ目は、「名詞が後接する」語の中では、「にこにこ」の用例数が圧倒的が多い。そして、他の「名詞が後接する」オノマトペは、基本的に「擬態語」のみの性質を持っている「にや」系と「にこ」系のオノマトペに集中していることも観察できる。さらに、「げらげら」や「くすくす」などのような「擬音語・擬態語」両方の性質を持っているオノマトペも「名詞が後接する」用法が観察できる。「名詞が後接する」用法を持っているオノマトペが動詞と共起する用例を見ると、それらが動詞と共起する用法も多く見られる。それに対し、「引用用法」に多用されるオノマトペは、名詞と後接しにくいと観察される。従って、動詞と共起しやすいオノマトペには、名詞が後接する用法も見られやすいと言える。

(27) 【声・さま】

【名詞を後接させる場合】

ははは	* ははは笑い	* ははは顔
ほほほ	* ほほほ笑い	* ほほほ顔
げらげら	げらげら笑い	げらげら顔
くすくす	くすくす笑い	くすくす顔

2 中国語の「笑い」に関するオノマトペの使用

2.1 擬音語・擬態語の分布

第2章で記述したように、中国語の「笑い」に関するオノマトペを抽出する際に、コーパス「CCL」、《現代汉语词典》（2012版）《現代汉语规范词典》（2012版）を利用し、「笑う声」「笑う様子」「笑う表情」のような意味を持っている語、すなわち笑いを表現する語を合計27語選定した。その結果、中国語における笑いを表現する主な語の一覧は以下の通りである。研究対象の27語を「CCL」で検索した結果、各語の用例数は以下、表3-4に示した通りである。

表3-4 中国語における「笑い」を表すオノマトペの用例

語	用例数	語	用例数	語	用例数
哈哈	6277	笑盈盈	238	哼哼	17
呵呵	1504	笑呵呵	235	咕咕	17
嘿嘿	1311	哧哧	167	噗	13
笑嘻嘻	1222	嘎嘎	145	笑咧咧	8
嘻嘻	1033	朗朗	116	嚯嚯	3
咯咯	837	噗嗤	93	笑悠悠	2
笑眯眯	722	笑哈哈	81	笑嘿嘿	1
嘻嘻哈哈	450	笑微微	29	笑漾漾	1
笑吟吟	411	哞	19	咿咿	1

《現代汉语规范词典》（2012）の解釈を参照したところ、中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味は、以下のようになる。

- (28) a. 哈哈：〔拟声〕模拟大声的声音。（笔者訳：〔擬声〕大笑いの声を真似する語）
- b. 呵呵：〔拟声〕模拟笑的声音。（笔者訳：〔擬声〕笑い声を真似する語）
- c. 嘿嘿：〔拟声〕模拟笑声（多叠用）。（笔者訳：〔擬声〕笑い声を真似する語（疊語が多用される））
- d. 噗嗤：〔拟声〕模拟忍不住突然发出的笑声。（笔者訳：〔擬声〕突然の笑い声を真似する語）

- (29) a. 笑哈哈：形容张口大笑的〔样子〕。（笔者訳：口を開けて笑う〔様子〕）
- b. 笑呵呵：形容由于内心喜悦而发笑的〔样子〕。（笔者訳：心からの喜びで笑う〔様子〕）
- c. 笑眯眯：形容微笑时眯起眼睛的〔样子〕。（笔者訳：目を細めて微笑する〔様子〕）
- d. 笑咧咧：形容笑时嘴角向两边伸展的〔样子〕。（笔者訳：口が両側に伸びながら笑う〔様子〕）

(28) (29) の解釈を見れば分かるように、《现代汉语规范词典》（2012）には、オノマトペの意味解釈に“拟声（訳：擬声）”や“样子（訳：様子）”のようになっている。このような辞書の語彙から、音か様子かの区別が付けられているため、それをもとに、「笑い」に関するオノマトペが「擬音語」と「擬態語」に分けられる。

表 3-5 中国語における「笑い」を表現する「擬音語」と「擬態語」の用例分布

分類	語数/比率	語例	コーパスでの用例数/比率
擬音語	16/59.3%	哈哈 嘿嘿 呵呵	11887/79.2%
擬態語	11/40.7%	笑眯眯 笑呵呵 笑哈哈 哈	3116/20.8%

中国語の「笑い」に関するオノマトペにおいて、擬音語と擬態語の使用状況を比較するために、表 3-5 のようにまとめた。表 3-5 を見れば、中国語では、「笑い」を表現する擬音語と擬態語はそれぞれ 16 語 (59.3%) と 11 語 (40.7%) であり、語数から見ると擬音語と擬態語の差は大きくなかったが、実際のコーパスでの用例数をまとめてみると、擬音語の用例数は 11887 例であり、比率は 79.2% に上った。それに対し、擬態語の実際の使用率は、20.8% に過ぎない。表 3-5 から、中国語における「笑い」に関するオノマトペの使用においては、擬音語の方が多くことが明らかになった。

日本語では、85 語中の 29.4% に過ぎない擬態語が、使用例中の 44.6% を占めるのに対し、中国語では、27 語中の 40.7% を占める擬態語は、使用例中の 20.8% に過ぎない。笑いを表す日本語オノマトペにおいて、擬態語の役割が大きいことがわかった。

以上、日中オノマトペにおける「笑い」に関するオノマトペの使用実態をそれぞれコーパスで調査した。調査結果から、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの語数と使用率には、大幅に差があることが確認できた。

2.2 オノマトペの用法

2.1 では、中国語における「笑い」に関するオノマトペ自体の用例数を調査し、「笑い」に関するオノマトペ全体の使用状況を把握したが、ここではそれらの

用法について詳しく検討する。本節も、日本語側の用法についての考察を参照し、中国語における「笑い」に関するオノマトペの使用上のバリエーションを明らかにするため、それぞれの用法に分けて調査を行う。

野口(1995)は、中国語のオノマトペの用法について、5つの用法に分け、以下のように述べている。

(30) a. 【状語(状況語)となる】

①直接に、あるいは“地(的)”を伴って状語となる

- 她噗嗤笑了(彼女はクスッと笑った)
- 她噗嗤地笑了(“ ”)

②A型とAB型の場合、後に“(地[的])一声”を置くことが多い。

この「一声」は擬音語に状語機能を発揮させる文法手段であり、「……と一声」と訳す必要はない。

- 门砰的一声关了(戸がバタンと閉まった)
- 扑通一声跳到河里去了(ザブンと川の中に飛び込んだ)

b. 【定語(限定語)となる】

①一般にA型・AB型を除く象声詞は、“的”を伴って定語となることができる。

- 火烧得更旺了，发出“噼里啪啦”的响声(火はさらに盛んに燃えて、パチパチという音をたてた)

②“声”“响”と結びつく時は“的”を加えなくてもよい。

- 窗外传来秋风初落树叶沙沙声(窓の外から秋風が木の葉を吹き落すざわざわという声が聞こえてきた)

c. 【補語となる】

①象声詞は“的”を伴って補語となる。

- 风刮得呼呼的(風がビュービュー吹いている)

②三音節以上の象声詞の場合、“的”を伴わない場合もある。韻文に多い。

- 一听这话我愣了神，心里跳得噗通通（その言葉に私はぼうっとし、胸がドキドキした）
- d. 【謂語(述語)またはその中心語となる】
- ①重ね形の象声詞は後に“的”をつけて謂語となる。
- 大伙叽叽喳喳的，像一群小鸟在叫（みんなはぺちやくちゃしゃべって、小鳥の群れがさえずっているみたいだ）
- ②中国語の象声詞は日本語の擬音語と違って、しばしば動詞として用いられる。この場合、AB型では第二音節が軽声となる。
- 嘴里还是咕噜着(口ではまだブツクサ言っている)
- e. 【独立語となる】
- 象声詞は独立性が強く、一語で文を成立させることも多い。
- “砰”枪响了（パーン、鉄砲が鳴った）

野口(1995)があげた中国語オノマトペの5つの用法は、後接する語によって、主に“的(de)”が後接、“地(de)”が後接、何も後接しないという3種類にまとめられる。これを踏まえた上で本論文は、後接語の種類によって、中国語の「笑い」に関するオノマトペの他の用法を、“的(de)”が後接、“地(de)”が後接、引用用法¹²、その他¹³という4つの種類にわけて、それぞれの用例数を調査する。その調査結果は以下の表3-6の通りである。

¹²野口(1995)が挙げている【独立語となる】という用法は、3.2.2で日本語のオノマトペを考察する際に定義した【引用用法】と同じものであると捉えられる。ここでは、日本語の引用用法と比べるため、「引用用法」と呼ぶことにする。

¹³ここで「その他」の用法は、主に“〇〇+一笑”“〇〇+大笑”のような固定用法を指す。“的(de)”が後接する用法、“地(de)”が後接する用法、引用用法以外の用法を全て「その他」の用法に入れるわけではないため、表14で挙げられた4つの用例数を足しても全用例数の合計とは一致しない。

表 3-6 中国語における「笑い」に関するオノマトペの各用法の用例数

語	全用例数	+ 的		+ 地		引用		その他	
		用例数	割合	用例数	割合	用例数	割合	用例数	割合
哈哈	6277	236	3.76%	741	11.81%	2153	34.30%	2118	34.01%
呵呵	1504	173	11.50%	739	49.14%	496	32.98%	126	8.38%
嘿嘿	1311	14	1.07%	217	16.55%	804	61.33%	76	5.80%
嘻嘻	1033	24	2.32%	265	25.65%	206	19.94%	448	43.37%
咯咯	837	97	11.59%	402	48.03%	101	12.07%	58	6.93%
哧哧	167	23	13.77%	89	53.29%	3	1.80%	2	1.20%
嘎嘎	145	5	3.45%	30	20.69%	2	1.38%	5	3.45%
噗嗤	93	2	2.15%	19	20.43%	18	19.35%	61	65.60%
嚯嚯	3	0	0.00%	3	100%	0	0.00%	0	0.00%
噗	13	0	0.00%	6	46.15%	5	38.46%	0	0.00%
咕咕	17	3	17.65%	9	52.94%	2	11.76%	2	11.76%
哧	19	2	10.53%	12	63.16%	3	15.79%	0	0.00%
咿咿	1	0	0.00%	0	0.00%	1	100%	0	0.00%
哼哼	17	3	17.65%	9	52.94%	5	29.41%	1	5.88%
嘻嘻哈哈	450	97	21.56%	101	22.44%	3	0.67%	35	7.78%
朗朗	116	33	28.45%	9	7.76%	0	0.00%	13	11.21%
笑嘻嘻	1222	303	24.80%	786	64.32%	0	0.00%	55	4.50%
笑眯眯	772	163	21.11%	539	69.82%	0	0.00%	36	4.66%
笑吟吟	411	125	30.41%	231	56.20%	0	0.00%	42	10.22%
笑盈盈	238	55	23.11%	159	66.81%	0	0.00%	8	3.36%
笑呵呵	235	33	14.04%	177	75.32%	0	0.00%	10	4.26%
笑哈哈	81	8	9.88%	47	58.02%	0	0.00%	9	11.11%
笑微微	29	5	17.24%	16	55.17%	0	0.00%	5	17.24%
笑咧咧	8	1	12.50%	7	87.50%	0	0.00%	0	0.00%
笑悠悠	2	1	50.00%	1	50.00%	0	0.00%	0	0.00%
笑嘿嘿	1	0	0.00%	1	100%	0	0.00%	0	0.00%
笑漾漾	1	0	0.00%	1	100%	0	0.00%	0	0.00%

表 3-6 は、中国語における「笑い」に関するオノマトペの各用法で使用された用例数を調査した結果を表示しているものである。表 3-6 の調査結果から、中国語における「笑い」に関するオノマトペの用法には、主に二つの特徴が見られる。

一つは、中国語の「笑い」に関するオノマトペの用法が、“+地”用法（「動詞後接用法」）に集中していることである。表 3-6 に各語の使用率が一番高いものを太字で表記している。研究対象の中国語の 27 語のうち、“哈哈，嘿嘿，噗嗤，咿咿，朗朗”という 5 語以外、他の「笑い」に関するオノマトペの用法は、“+地”用法（「動詞後接用法」）に集中しており、比率が一番高いことが認められる。

もう一つは、擬態語の用法には、引用用法がないことである。表 3-6 で「引用用法」がない語の多くは、笑哈哈” “笑眯眯”のような ABB 型のオノマトペとなっている。ABB 型のオノマトペの意味を見ると、基本的に「笑う様子」という意味をしている。日本語側を考察した時に述べたように、「引用用法」は基本的に「擬音語」に使われている用法だと考えられる。その特徴は、中国語にも適応できると見られる。中国語の擬態語については、引用用法は適用することができないと見られる。さらに、擬態語の代表的な ABB 型の語だけではなく、“朗朗”のような擬態語も、「引用用法」に用例がないことが見られる。従って、「引用用法」の適応できるか否かということは、中国語オノマトペの「擬音語」と「擬態語」との区別する基準となっていると言える。

3 まとめ

1 節と 2 節では、日本語と中国語における「笑い」に関するオノマトペを対象にし、それぞれの分布特徴と使用方法を調査した。日中両言語において、「笑い」に関するオノマトペの使用実態の相違点は、以下のように整理できる。

まず、オノマトペの語数について、日本語における「笑い」に関するオノマトペは 85 語であるのに対し、中国語における「笑い」に関するオノマトペは 27 語しかない。日本語における「笑い」に関するオノマトペの方が発達していると言える。

次に、「擬音語」と「擬態語」の分布特徴について、日本語では「擬音語」の語数が多いが、実際の用例を見ると、語数が少ない「擬態語」の方が使用率が比較的高いと言える。一方、中国語では、擬音語と擬態語の語数の差は日本語ほど大きくない（擬音語 59.3%、擬態語 40.7%）のに対し、「擬態語」の実際の使用率は 2 割まで下がっている。そのため、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペは、語数的に言うと、日本語も中国語も「擬音語」の語数が多いが、実際の使用率を見れば、日本語オノマトペにおいて、擬態語の役割が大きいことがわかる。

また、使用用法について、日中両言語とも「動詞後接用法」か「引用用法」に集中していることを明らかにした。しかし、日本語では、「擬音語」の用法は「引用用法」に偏り、「擬態語」の用法は「動詞後接用法」に偏るのに対し、中国語では「擬音語」「擬態語」を問わずに、基本的に「動詞後接用法」に偏っている。さらに、日本語感情オノマトペにおいては、「引用用法」と「動詞後接用法」の下位用法である「すると共起する用法」と、相補分布となっていることを明らかにした。中国語感情オノマトペには、「引用用法」の有無によって「擬音語」と「擬態語」の判断ができる。

第4章 「泣き」に関するオノマトペ

前章では、「笑い」に関するオノマトペを考察した。本章では、「泣き」に関するオノマトペの使用実態について調査を行い、分析を加える。調査方法としては、第3章と同様に、「BCCWJ」と「CCL」をそれぞれ利用し、日中両言語における「泣き」に関するオノマトペの用例調査を行い、日中オノマトペの使用実態について明らかにする方法をとる。また、「泣き」に関するオノマトペの使用率について、日中両言語における相違点を明らかにする。

1 日本語の「泣き」に関するオノマトペの使用

1.1 擬音語・擬態語の分布

本節は「泣き」を表現する日本語オノマトペ自体の使用実態を考察する。第2章で選定した59語の日本語「泣き」に関するオノマトペを「BCCWJ」で調査した結果、各語の用例数は以下の表4-1に示した通りである。

表4-1 「BCCWJ」で調査した日本語における「泣き」に関するオノマトペの用例数

語	用例数	語	用例数	語	用例数
しくしく	97	ぐすぐす	4	えーん	0
ぼろぼろ	73	ぐすん	4	おーおー	0
めそめそ	68	びーびー	4	ぎゃーぎゃー	0
ぼろぼろ	46	わーん	3	ぐすっ	0
おぎゃーおぎゃー	42	うわーん	2	ぐすり	0
うるうる	37	おんおん	2	ぐすりぐすり	0
おいおい	31	あんあん	2	くすん	0
わっ	28	びーびー	2	しばしば	0

はらはら	27	ぐしょぐしょ	2	ひーこら	0
わんわん	25	ぐちぐち		ひっく	0
ぎゃー	25	ぼろっ	2	ひっひっ	0
さめざめ	24	えんえん	1	ほろっ	0
わーわー	18	しみじみ	1	ほろりほろり	0
ほろほろ	7	しおしお	1	ほろりほろり	0
あーん	7	よよ	1	べそべそ	0
ぼろり	5	わらわら	1	ぐっすん	0
ほろり	5	じーん	1	うえんうえん	0
おろおろ	5	きやあきやあ	1	うるるん	0
ひーひー	4	がんがん	1	うるっ	0
おうおう	4	きーきー	1		

本論文は、調査対象の 59 語のオノマトペについて、擬音語と擬態語の分布状況を見るために、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』の内容を参照した。『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』の語釈を見ると、以下のような語釈が見られた。

(1) おぎゃーおぎゃー：【声】赤ん坊の泣き声。

ぐすぐす：【声】かぜを引いたり、また、泣いたりして、涙をすするとききの音。

(2) うるうる：【さま】水気が有り余るさま。つやのあるさま。特に、目が涙でいっぱいになるさま。

めそめそ：【さま】声を立てないで静かに泣くさま。弱気で、何かというとすぐ泣き悲しんだりするさま。

(3) あんあん：【声・さま】人が大きな声を上げてなく声。また、そのさま。

しくしく：【声・さま】勢いなくあわれげに泣く声。また、そのさま。

以上の語釈を見ると、「泣き」に関するオノマトペは、【声】【さま】【声・さま】という 3 種類に分けられていることがわかる。辞書の解説は、【声】は「擬音語のうち、人間や動物など、主として生命体の出す声を【声】として

扱った」と記述しており、【声・さま】は「擬音語・擬態語の両方の用法があるもの」と記述しているが、具体的に各オノマトペを見ると、オノマトペは擬音語の性質のみを持つ語であるか、それとも擬音語・擬態語であるかについての判断には、曖昧なところがある。例えば、「びーびー」の性質は【声・さま】となっているが、「ぴーぴー」の性質は【声】のみとなっている。泣き声を真似する「おぎゃーおぎゃー」は【声】のみを持つ語として扱っているのに対し、「あんあん」や「わーわー」のような語も声を真似する語であるが、【声・さま】両方の性質を持つ語と扱っている。音を真似するオノマトペは、声だけを表現しているか、それとも声を表しながらその様子も表現できるかについての判断は、困難であると考えられ、研究者や辞書によって異なる部分もある。今回参照している『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』においても、性質分類に曖昧なところがある。この点についての再検討は第6章で詳しく行なっていく。

本節では、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』の分類を参照し、第3章で「笑い」に関するオノマトペを考察した時の分類基準と同様に、声の有無で、オノマトペを「擬音語」と「擬態語」に分けることにする。そうすると、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』での【声】【声・さま】という性質を持つ語は1つのかたまりとなり、【さま】の性質を持つ語はもう1つのかたまりとなる。この基準をもとに、抽出された日本語における「泣き」に関するオノマトペの語数とコーパスでの用例数の分布状況を以下の表4-2のようにまとめた。

表 4-2 日本語における「泣き」を表現する「擬音語」と「擬態語」の用例分布

分類	語数/比率	語例	コーパスでの用例数/比率
		うるうる、うるるん、うるっ、おろおろ、ぐしょぐしょ、さめざめ、	

擬態語	26/ 44.1%	しおしお、しぼしぼ、ひーこら、べそべそ、ほろっ、ほろり、ぼろり、ぼろぼろ、ほろりほろり、ぼろりぼろり、めそめそ、よよ	263/ 42.6%
擬音語・擬態語	33/ 55.9%	ぎゃーぎゃー、あーん、うわーん、あんあん、えんえん、うえんうえん、えーん、おーおー、おいおい、おんおん、ぐすっ、ぐすり、ぐすりぐすり、くすん、ぐすん、ぐっすん、しくしく、ひーひー、ひっく、ひっひっ、ぼろぼろ、わーわー、わーん、わんわん、わっ	355/ 57.4%

表 4-2 を見ると、日本語における「泣き」に関するオノマトペのうち、擬態語の性質のみを持っている語は 26 語であり、比率は 44.1%となっている。それに対し、擬音語/擬態語の性質を持っている語は 33 語であり、比率は 55.9%となっている。すなわち、日本語における「泣き」に関するオノマトペは、「擬音語」の語数の方が多いと言える。

また、「泣き」に関するオノマトペのコーパスでの用例数を計算すると、「擬態語」と「擬音語・擬態語」の実際の用例数と比率は、263 例（42.6%）と 355 例（57.4%）である。実際の使用率も語数と同様に、擬態語と擬音語・擬態語との差は大きくないが、57.4%を占めている擬音語の方が多用されていると見られる。

1.2 オノマトペの用法

本節では、「BCCWJ」を利用し、日本語における「泣き」に関するオノマトペの具体的な用法について考察を行う。表 4-1 からわかる通り、日本語における「泣き」に関するオノマトペは、全ての語がコーパスで用例が見られるわけで

はない。そのため、本節では、用例がある「泣き」に関するオノマトペの用法をそれぞれ考察する。「笑い」に関するオノマトペの用法を考察した際に、その用法を【動詞と後接する用法】【名詞と後接する用法】【引用用法】【形容詞と後接する用法】【その他】という5つの用法に分けて検討を行った。これを参照し、「泣き」に関するオノマトペを「BCCWJ」で検索したが、【形容詞と後接する用法】は見られなかった。従って、日本語における「泣き」に関するオノマトペの用法は、主に以下の4種類に分けられ、それぞれの用例数は表4-3のようにまとめることができる。

表4-3 日本語における「泣き」に関するオノマトペの用法

語	全 用 例 数	動詞と共起する用法								名 詞 用 法	引 用 法	そ の 他	
		す る	泣 く	こ ぼ れ る	こ ぼ す	出 る	流 す	流 れ る	落 ち る				落 と す
しくしく	97		51										46
ぼろぼろ	73		4	20	14	2	19	1	5	2			
めそめそ	68	44	18								2		4
ぼろぼろ	46	1	8	10	11	4	6	2					4
おぎゃーおぎゃー	42		3								2	24	13
うるうる	37	24									2		11
おいおい	31		31										
わっ	28		28										
わんわん	25		25										
ぎゃー	25		9									15	1
さめざめ	24	1	22				1						
わーわー	18		18										
あーん	7											7	
ぼろり	5			1	3				1				
ほろり	5			1	1	2			1				
おろおろ	9	2	3								4		
ぐすぐす	3		3										
ぐすん	4		4										
ひーひー	4		4										
わーん	3		1									2	

うわーん	2		1									1	
おんおん	2		2										
あんあん	2											2	
えんえん	1											1	
ぐしょぐしょ	2												2
しおしお	1		1										
よよ	1											1	
おうおう	4		4										
きーきー	1		1										
きやあきやあ	1		1										
がんがん	1		1										
ぐすぐす	3		3										
ぐちぐち	1		1										
しみじみ	1		1										
じーん	1		1										
はらはら	27		1	2	6		9		1	1			7
びーびー	4		4										
びーびー	2		2										
わらわら	1		1										
ぼろっ	2			1	1								
ほろほろ	7		1	1	2		3						

表 4-3 から、日本語における「泣き」に関するオノマトペの用法は、動詞と共に起する用法に集中していることがわかる。さらに、動詞と共に起する用法は、「ぼろぼろ」「ぼろぼろ」「ぼろり」のような涙の流し方を表すオノマトペ以外の、ほとんどの語が「泣く」との共に起する用法に集中している。すなわち、日本語の「泣き」に関するオノマトペは、基本的には動詞の「泣く」と共に起している用法が多いと言える。

動詞の「泣く」と共に起するもの以外では、「こぼれる」「こぼす」「流す」などのような動詞との共に起する用法も見られる。これらの動詞は、例文 (4) ～ (7) で示すように、全て「涙」に関連する動詞である。これらの動詞と共に起できるオノマトペは、全て擬態語であり、涙の流れ方を表現する語であることがわかった。

(4) 大つぶのなみだが、うろこのついたほっぺたをつたって、ぽろぽろとこぼれました。

(アン・フォーサイス『きょうりゅうが図書館にやってきた』1995)

(5) 家庭環境、職場環境、そして自分の性格などを話し、涙をポロポロ流した。

(「ノン・キャリアからの子育て社長術」2004)

(6) 今は別のことで頭がいっぱいだった。ぽろり、とまた涙が落ちる。

(前田珠子『柘榴の影』1991)

(7) 「それ以上自分を責めるな。おまえはもう、十分に苦しんだ」涙でぐしょぐしょになった顔で、俺を見上げる。

(義月粧子『こんな男でよかったら』2003)

第3章で検討した日本語の「笑い」に関するオノマトペの用法は、主に3つの特徴が見られた。

①日本語の「笑い」に関するオノマトペの用法は、「動詞と後接する用法」、「引用用法」に集中している。

②「笑い」に関するオノマトペの「すると共起する用法」が、「引用用法」と相補分布となっている。

③動詞と共起しやすいオノマトペが、「名詞が後接する用法」に適応しやすい。

これを踏まえつつ、「泣き」に関するオノマトペの用法は、以下の3つにまとめられる。

まず、日本語における「泣き」に関するオノマトペの用法も、「動詞と後接する用法」、「引用用法」に集中していることが見られる。動詞と共起する際、「泣く」と共起する場合が多い。さらに、「泣く」や「する」以外には、「こぼれる」「流す」などのような涙に関する動詞と共起する用例も見られ、動詞と共起する用法には、バリエーションが多いと言える。

次に、「泣き」に関するオノマトペにも、「すると共起する用法」と「引用用法」が相補分布となっていることが見られる。表 4-3 で太字で表記している「すると共起する用法」と「引用用法」の用例からわかる通り、オノマトペが「すると共起する」場合、「引用用法」がゼロとなっている。逆に、「引用用法」で用例がある場合、「すると共起する用法」はない。すなわち、「泣き」に関するオノマトペの使用方法にも、「すると共起する用法」と「引用用法」との相補分布関係が観察できる。

最後に、「名詞が後接する用法」については、「泣き」に関する用法にあまり見られないが、「めそめそ声」「おろおろ声」「うるうる涙目」などの用例がコーパスで確認できた。「めそめそ」「おろおろ」「うるうる」の用法を表 4-3 で確認すると、動詞と共起している用例も見られた。従って、日本語における「泣き」に関するオノマトペの用法も、「笑い」に関するオノマトペと同様に、動詞と共起しやすいオノマトペの方が「名詞が後接する用法」に適応しやすい傾向があると言える。

2 中国語の「泣き」に関するオノマトペの使用

2.1 擬音語・擬態語の分布

第 3 章で中国語の「笑い」に関するオノマトペを検討した方法と同様に、本節では、コーパス「CCL」、《現代汉语词典》（2012 版）を利用し、「泣く声」「泣く様子」「泣く表情」のような意味を持っている語、すなわち泣きを表現する語を合計 35 語選定した。その結果、中国語における泣きを表現する主な語の一覧は以下の通りである。研究対象の 35 語を「CCL」で検索した結果、各語の用例数は以下、表 4-4 に示した通りである。

表 4-4 中国語における「泣き」を表すオノマトペの用例

語	用例数	語	用例数	語	用例数	語	用例数
呜呜	832	扑簌簌	102	泪涟涟	10	哼哼唧唧	2
呱呱	545	呜呜咽咽	91	呜哇	10	呜呜哇哇	1
哇哇	489	抽抽噎噎	89	哇啦哇啦	8	哇呀哇呀	1
哇	304	抽抽嗒嗒	72	滴滴答答	8	喃喃	1
泪汪汪	375	哗哗	56	哭咽咽	5	嗒嗒	1
哭哭啼啼	333	潸潸	33	哇啦	4	嗒嗒	1
嗷嗷	302	泪盈盈	27	唏唏嘘嘘	3	呼哧呼哧	1
嚶嚶	152	哭咧咧	13	哭兮兮	3	哭唧唧	0
啊啊	128	稀里哗啦	12	哭哭咧咧	3		

中国語の「泣き」に関するオノマトペを抽出するため、《现代汉语规范词典》（2012 版）、《现代汉语词典》（2012 版）を参照し、「泣く声」「泣く様子」「泣く表情」のような意味を持っている語、すなわち泣きを表現する語を抽出した。抽出された語を表現内容から分類すると、泣く声を表現する擬音語と、泣く様子を表す擬態語に分けられる。

表 4-5 中国語における「泣き」を表現する「擬音語」と「擬態語」の用例分布

分類	語	語数 /比率	コーパスでの用例数 /比率
擬音語	呜呜，哇哇，呱呱，嗷嗷，嚶嚶，啊啊，呜哇，哇啦哇啦	17/ 48.6%	2782/ 69.3%
擬態語	泪汪汪，哭哭啼啼，扑簌簌，呜呜咽咽，潸潸，泪盈盈，哭	18/ 51.4%	1235/ 30.7%

	咧咧，滴滴答答，哭咽咽，哭 兮兮，哭哭咧咧，哭唧唧		
--	------------------------------	--	--

中国語の「泣き」に関するオノマトペにおいて、擬音語と擬態語の使用状況を比較するために、表 4-5 のようにまとめた。表 4-5 から、中国語では、「泣き」を表現する擬音語の数は 17 語であり、比率は全体の 48.6%を占めているが、実際のコーパスでの用例数を見ると、その用例数は全体の用例の 69.3%に上ることが確認できた。それに対し、擬態語は 18 語で、語数上では 51.4%を占めているが、実際のコーパスでの用例数の比率は 30.7%に下がった。すなわち、語数から見ると、中国語における「泣き」に関するオノマトペでは、「擬態語」の数が多いが、実際の使用状況を確認したところ、数が少ない擬音語の方が使用率が比較的高いと言える。

2.2 オノマトペの用法

2.1 では、中国語における「泣き」に関するオノマトペ自体の用例数を調査し、「泣き」に関するオノマトペ全体の使用状況を把握したが、ここではそれらの用法について詳しく検討する。本節は、中国語における「笑い」に関するオノマトペの用法についての考察方法を参照し、中国語における「泣き」に関するオノマトペの使用上のバリエーションを明らかにする。考察する際の用法の分類についても、前と同様に、野口(1995)を参照し、中国語のオノマトペの用法を、“的(de)”が後接、“地(de)”が後接、引用用法、その他という4つの種類にわけることとする。その分類に従って各用法を調査した結果は以下の表 4-6 の通りである。

表 4-6 中国語における「泣き」に関するオノマトペの用法

語	全用例数	+ 的		+ 地		引用		その他	
		用例数	割合 %	用例数	割合 %	用例数	割合 %	用例数	割合 %
呜呜	832	107	12.5	270	32.5	186	22.4	269	32.3
呱呱	545	0	0	12	2.2	417	76.5	116	21.3
哇哇	489	32	6.5	125	25.6	116	23.7	216	44.2
哇	304	62	20.4	70	23.0	120	39.5	52	17.2
嗷嗷	302	11	3.6	28	9.3	161	53.3	102	33.8
嚶嚶	152	22	14.5	54	35.5	56	36.8	20	13.2
啊啊	128	18	14.1	16	12.5	67	52.3	27	21.1
呜呜哇哇	10	3	30.0	2	20.0	2	20.0	3	30.0
哇啦哇啦	8	2	25.0	2	25.0	4	50.0	0	0
哇啦	4	0	0	1	100	0	0	0	0
呜呜哇哇	1	0	0	0	0	1	100	0	0
哇呀哇呀	1	0	0	1	100	0	0	0	0
嗒嗒	1	0	0	1	100	0	0	0	0
嗒嗒	1	0	0	0	0	1	100	0	0
泪汪汪	375	93	24.8	118	31.5	0	0	55	4.5
哭哭啼啼	333	84	25.2	51	15.3	0	0	36	4.7
扑簌簌	102	14	13.7	50	49.0	0	0	29	28.4
呜呜咽咽	91	17	18.7	41	45.1	0	0.	8	3.4
抽抽噎噎	89	26	29.2	49	55.1	0	0	14	15.7
抽抽嗒嗒	72	6	8.3	56	77.8	0	0	10	13.9
哗哗	56	9	16.1	34	60.7	0	0	13	23.2
潜潜	33	2	6.1	5	15.2	0	0	26	78.8
泪盈盈	27	5	18.5	7	25.9	0	0	9	11.1
哭咧咧	13	0	0	12	92.3	0	0	5	17.2

稀里哗啦	12	3	25.0	0	0	0	0	9	75.0
泪涟涟	10	4	40.0	1	10.0	0	0	5	50.0
滴滴答答	8	4	50.0	4	50.0	0	0	0	0
哭咽咽	5	3	60.0	2	40.0	0	0	0	0
唏唏嘘嘘	3	0	0	3	100.0	0	0	0	0
喃喃	2	1	50.0	1	50.0	0	0	0	0
哭兮兮	3	1	33.3	0	0	0	0	2	66.7
哭哭咧咧	3	0	0	2	66.7	0	0	1	33.3
哼哼唧唧	2	1	50.0	1	50.0	0	0	0	0
呼哧呼哧	1	0	0	1	100.0	0	0	0	0

第3章で検討した中国語の「笑い」に関するオノマトペの用法は、主に2つの特徴が見られた。

①中国語の「笑い」に関するオノマトペの用法が、“+地”用法（「動詞後接用法」）に集中している。

②擬態語の用法には、引用用法がない。

これを踏まえて、「泣き」に関するオノマトペの用法は、以上の特徴に当てはめることができるのかについて検討する。

まず、中国語における「泣き」に関するオノマトペの用法は、“+地”用法（「動詞後接用法」）か「引用用法」に集中していることが表4-6から確認できる。表4-6に各語の使用率が一番高い用法を太字で表記している。太字で表記している用法のうち、“+地”用法（「動詞後接用法」）が一番多く存在しており、合計18語ある。二番目に多用される用法は「引用用法」で、合計8語がある。この2つの用法以外に、“+的”の用法も代表的な使い方であるが、“+地”用法と「引用用法」のように使用される比率が高いとは言えない。

次に、中国語における「泣き」に関するオノマトペのうち、擬態語には「引用用法」が適応されないことも見られる。表4-6の“泪汪汪”より下の語は全て

擬態語と考えられているものである。これらの擬態語における引用用法の用例数は、全てゼロとなっている。そのため、中国語における「泣き」に関するオノマトペにおいても、「笑い」に関するオノマトペと同様に、擬態語には「引用用法」が適応されないことが確認できた。

なお、「泣き」に関するオノマトペの中には、“哭哭啼啼”のような「泣く様子」を表す語以外、“泪汪汪”“扑簌簌”“滴滴答答”“哗哗”のような、涙の流れ方を表現する語も多く見られる。この点について、日本語側にも「ぽろぽろ」「ぽろり」のような涙と関連しているオノマトペが存在していると見られる。泣く様子を表す時に、直接に泣く様子を表す語以外、涙の流れ方などを表現するオノマトペを利用して間接的に泣く様子を表すオノマトペの用法は、日中両言語とも有すると言える。泣く様子を表す時に、付随して産出される産物である「涙」に注目するオノマトペを用いる場合が数多く存在し、涙の流れ方で泣く様子の間接的に表現していることが、日本語と中国語の共通点である。

3 「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの日中使用実態の相違点

第3章は、「笑い」に関するオノマトペを中心に、日中両言語における実際の使用状況や、擬音語擬態語の分布状況を調べた。第4章も、第3章と同じような手順で、「泣き」に関するオノマトペを中心にして、日中両言語において、実際の使用状況などについて調べた。ここでは、第3章と第4章で得た日中両言語における「笑い」に関するオノマトペと「泣き」に関するオノマトペの擬音語、擬態語の分布状況を表4-7にまとめ、日中オノマトペの相違点を考察する。

表 4-7 日中両言語における擬音語擬態語の分布

		語数	擬音語/ 擬態語	語数	使用率	語数の比 率と使用 率の増減 状況
日本語	笑い	85	擬音語	70.6%	55.4%	↓↓激減
			擬態語	29.4%	44.6%	↑↑激増
	泣き	59	擬音語	55.9%	57.4%	↑微増
			擬態語	44.1%	42.6%	↓微減
中国語	笑い	26	擬音語	59.3%	79.2%	↑↑激増
			擬態語	40.7%	20.8%	↓↓激減
	泣き	35	擬音語	48.6%	69.2%	↑↑激増
			擬態語	51.4%	30.8%	↓↓激減

表 4-7 から、日中両言語における「笑い」や「泣き」に関するオノマトペは、語数の観点からは、2つの特徴がまとめられる。

①日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの語数は、いずれも、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペより多い。すなわち、日本語オノマトペの数が中国語より遥かに多いと言える。

②日本語における「笑い」に関するオノマトペの語数は「泣き」に関するオノマトペの語数より多いのに対し、中国語における「笑い」に関するオノマトペの語数は「泣き」に関するオノマトペの語数より少ない。すなわち、日本語は「笑い」に関するオノマトペが豊富であるのに対し、中国語では「泣き」に関するオノマトペの方が豊富であると言えるだろう。

なお、日中両言語における「笑い」や「泣き」に関するオノマトペの使用上の相違点については、主に以下の2点にまとめられる。

①日中両言語において、いずれも「擬音語」の使用率が「擬態語」と比べてより高い比率を占めているという共通点がある。

②日本語オノマトペでは、擬態語の方が多用される傾向が見られるのに対し、中国語オノマトペにおいては、擬音語の方が多用される傾向が見られる。

まず、表 4-7 に、擬音語と擬態語の中では語数・使用率が高い方を太字で表している。使用率から見れば、日本語と中国語を問わずに、全て擬音語の方が比率が高くて 5 割以上となっている。無論語数の比率と比べると使用率が上昇している場合もあれば、下降している場合もあるが、全体的に見ると、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用は、擬音語の方が高い比率を占めていることが言える。

一方、語数の比率とその使用率の変化を比べることによって、擬音語と擬態語の使用傾向が見えてくると考えられる。語数の比率と使用率の増減状況という欄に各オノマトペの増減変化を記入している。日本語の「笑い」に関するオノマトペは、擬音語の語数が 70.6%を占めているが、その実際の使用率が 55.4%に下がり、激減していることがわかる。それに対し、語数は 29.4%しか占めない擬態語が、使用率が 44.6%に上がり、激増をしていることがわかる。また、「泣き」に関するオノマトペの語数の比率と使用率が、2%以内の変化しか見られないため、使用傾向の判断根拠となりにくいと考えられる。以上から、日本語における感情を表すオノマトペは、「擬態語」の方が多く使用されている傾向が見られる。

日本語側と逆に、中国語側には、擬音語においては語数の比率に対して使用率は大幅に増加するという変化が見られ、擬態語は語数の比率に比べて使用率は大幅に減少している。従って、中国語における感情を表すオノマトペは、「擬音語」の方が多用されている傾向が見られる。

第5章 日中オノマトペのシステムについて

第3章と第4章は日中両言語における「笑い」に関するオノマトペ、「泣き」に関するオノマトペの使用実態について調査を行なった。その結果、日本語と中国語において、擬音語の語数が擬態語より多いという共通点が見られた。一方、実際の使用状況を見ると、日本語においては擬態語の方が多く使用されている傾向が見られるのに対し、中国語においては擬音語の方が多く使用されている傾向がある、という相違点も明らかになった。第3章と第4章の調査結果を踏まえ、本章では、日中オノマトペの音韻、語形、文法的用法という側面から、両言語のオノマトペのシステム上の相違を検討する。また、日本語における擬音語と擬態語の定義、中国語における象声詞の分類、という点についても、再検討を試みる。

1 日中オノマトペの子音・母音の対立について

従来のオノマトペ論の多くは、主に音象徴の問題を取り上げている。中国語と日本語のオノマトペの音象徴について、野口（1977）は、中国語にも音象徴があるが、日本語のような清音と濁音の対立しているものではなく、有声音・無声音（b・p/d・t/g・k など）というものがあり、二音節からなる擬声語の子音の対応において、同じようなものが選ばれる傾向がある（例えば、「buleng」と「puleng」のように、bもpも共に1を選び、各々二音節語となり、意味的側面においても、日本語の清音「patapata」と濁音「batabata」のような対立は見出されない）、という指摘がある。そこから、日中両言語のオノマトペにおいては、子音の対立が意味的な相違に影響していることがわかる。特に日本語オノマトペには、子音の対立が意味的側面に大きく関与していると読み取れる。

しかし、野口は日本語の視点から中国語を考えるという観点を取っているが、中国語の音韻体系は日本語と異なり、清濁という概念ではなく、有声・無声（有気と無気）で子音を区別している。そのため、中国語には清濁または有声・無声となっているペアがそもそも少ないということも考えに入れなければならない。そのため、日本語と中国語における音韻的特徴は、それぞれの言語体系において考察する必要がある。

本節は、野口（1977）の観点を検証することとともに、子音や母音の対立は、日中両言語におけるオノマトペに対して、それぞれ如何なる意味的な変化を引き起こしたのかについて考察を行い、音韻的側面から日中両言語の相違を明らかにする。また、その相違が生じる原因についても分析を試みる。

1.1 日中オノマトペにおける子音の対立と意味的区別

本節は、子音の対立で、日中オノマトペにおける意味的变化が、どれほどの影響を受けたについて、「笑い」や「泣き」に関するオノマトペの例を挙げながら、検討を行っていく。

日本語の「笑い」や「泣き」に関するオノマトペを見ると、(1)で挙げられた「きゃあきゃあ」「ぎゃあぎゃあ」のような清音と濁音の対立でペアとなっているオノマトペが多く存在している。中国語の子音には清濁による対立はないが、有気音と無気音で対立となっている子音のペアが存在している。日本語オノマトペにおいては子音の清濁の対立によってペアとなっているものが多いのに対し、中国語の「笑い」や「泣き」に関するオノマトペでは、子音が有気音または無気音の対立でペアとなっているオノマトペは(2)で挙げられた“呵呵”(keke)と“咯咯”(gege)のようなペアしか見られない。

- (1) a. きゃあきゃあ (kya kya) ぎゃあぎゃあ (gya gya)
b. けたけた (keta keta) げたげた (geta geta)

c. けらけら (kera kera) げらげら (gera gera)

(2) a. 呵呵 (ke ke) 咯咯 (ge ge)

野口の指摘によれば、(1a) の日本語オノマトペは、子音が清音/k/と濁音/g/の対立で意味的な違いが見られるはずである。『日本語オノマトペ辞典』の語釈によると、(1) で挙げられたオノマトペは以下のような解釈となっている。

(3) a. きゃあきゃあ /kya kya/

驚き、恐れ、喜びのために、にぎやかにかん高く叫ぶ声

ぎゃあぎゃあ /gya gya/

赤ん坊などがやかましく泣き叫ぶ声、または不平や要求などを
やかましく騒ぎ立てる声。

b. けたけた /keta keta/

愉快そうに笑う際のかん高くひびく声。

げたげた /geta geta/

下品な高笑いをしたり、ばか笑いをする際の大きなにごった
声。

c. けらけら /kera kera/

愉快そうにかん高く笑う声。

げらげら /gera gera/

大声で笑う声。遠慮なしにばかにした笑い声。

辞書の意味解釈から、清音と濁音で構成された(3a)の「きゃあきゃあ」と「ぎゃあぎゃあ」はいずれも高い叫び声や、騒ぎ立てる声のような意味を持っている語であり、意味的な区別は明らかに見えない。それに、(3b)と(3c)の語釈も、「笑い声が高い」などの意味を中心としていると読み取れ、/k/と/g/の対立によつての意味的な区別は明確にしていなると考えられる。従つて、

辞書の語釈だけによると、日本語オノマトペの子音対立でオノマトペの意味的变化が浮き上がってこない。

一方、コーパスでの実際の用例を調べると、オノマトペの子音対立と意味的变化が明確に見える。以下の(4)～(6)のような用例が見られる。

- (4) a. 結婚した今、誰も退治してくれず（ダンナも苦手）自分できゃーきゃー泣きながら退治してます。
- b. ご飯を食べたら少しは機嫌が良くなったけど、寝る前にまたぎゃーぎゃー泣いて寝ました。
- (5) a. 女たちは、目を三角にして、キーキーおこっていたが、まもなく、あきらめたとみえて、気味のわるい声でけたけた笑いだした。
- b. ジョニーはビールくさい息でげたげた笑い、ベンチにまた腰をおろそうとした—そして、あやうく転がり落ちそうになった。
- (6) a. お人形のような顔立ちだけど、けらけら笑って元気いっぱい幸田さん。
- b. 「ならいいけどな。てめえと違って、俺は感受性が鋭敏だからよ」桐原はそう言って、腹の底から噴き出すような声でげらげら笑った。
- c. 看板の『ハダカ』の文字に引き寄せられて入ってきた三人の女子高生がげらげら笑い転げていた。

(4) の例文で挙げられている「きゃあきゃあ」と「ぎゃあぎゃあ」はいずれも大きな泣き声を表す語として使用されているが、「ぎゃあ」と「きゃあ」の対立で、泣き声の大きさに差が感じられる。(5) で使用された「けたけた」と「げたげた」は、大声で笑う声を表すオノマトペであるが、(5a) の「けらけら」は明るい笑い声や爽やかな笑い声を表す擬音語であり、(5b) の「げたげた」は濁音の使用で、「けたけた」よりさらに笑い声の大きさもレベルアップしている。また、濁音の使用で音量がアップしたことに伴い、下品な笑い方と

いう意味も付加され、よりマイナスなイメージも意味的に付加された。(5a)と(5b)の使用対象を見ると、(5a)の「けらけら」は女性の笑い声を表すのに使用するのに対し、(5b)の「げらげら」は男性の笑い声を表すのに使用していることがわかる。それは、「げらげら」に「下品な笑い方」というマイナスな意味が付加されたため、女性に対しての使用はできるだけ回避しているのであると考えられる。そこから、「けたけた」と「げたげた」は、同じく笑い声を表現するオノマトペであるが、子音/k/と/g/の対立で、笑い声の大きさや、プラスイメージかマイナスイメージという意味的变化がつけられたことが確認できた。

また、(6a)の例文で使用された「けらけら」は大きな声で明るい笑い声を表す語であるのに対し、(6b) (6c)の「げらげら」は「嘔き出すような声で」と「笑い転げていた」と組み合わせて使用していることで、「げらげら」はより大きな声やおおげさな笑い方を表現する語であることが読み取れる。すなわち、「けらけら」「げらげら」は大きな声での笑い声を表す語であるが、「げらげら」は「けらけら」より声が大きいの、または笑う動作が大げさになっていることが感じられる。

以上、日本語辞書の語釈だけによると、オノマトペの子音対立がその意味的变化に与えた影響は見られにくいだが、それは、日本人向けの辞書を作成する際に、子音の対立でオノマトペの意味的变化があるということが前提として認識されているため、辞書の語釈には明確に記述されていないことに起因していると考えられる。日本語学習者は辞書の語釈だけによってオノマトペの清濁で意味的な区別を明らかにすることが困難なところもあることもわかった。

しかし、実際の用例を検討すると、日本語オノマトペ意味は、清濁の変化で区別ができることは明らかに見られた。具体的な意味関係は、以下の表5-1のようにまとめられる。

表 5-1 日本語オノマトペにおける子音の対立と意味的变化との関係

子音対立ペア	共通点	相違点
きゃあきゃあ/ぎゃあぎゃあ	大きな泣き声	(声などによる) イメージの差異
けらけら/げらげら	大きな笑い声	(声・動きなどによる) イメージの差異

子音で対立となっている日本語オノマトペペアは、基本的な意味が共通しているが、付加された意味（大小、強弱、高低など）が異なっている。すなわち、それらのペアは、意味的に区別があるが、お互いに関連性があると言える。このような特徴は、「笑い」と「泣き」に関するオノマトペだけではなく、他のオノマトペにも多く現れており、日本語オノマトペの普遍的な特徴と考えられる。

- (7) a. ひゅーひゅー ぴゅーぴゅー びゅーびゅー
 b. かたかた がたがた
 c. とんとん どんどん

(7) で挙げられた子音が清音・濁音で対立となっているオノマトペのペアを見ると、(7a) は/h//b//p/の対立で、風の強さのレベルが異なっている。(7b) は/k/と/g/の対立で、「軽い音」と「重く騒々しい音」という音の大きさを表現することができる。オノマトペが表す音量のレベルは清音の/k/から/g/へ変化することによって高くなる。(7c) も同様に、/t//d/の対立で、叩く音の強さに違いが感じられる。

以上のように、日本語のオノマトペにおいて、子音の対立でペアになっている語が数多く存在している。さらに、それらのペアは、子音の清濁変化で、音の大きさや力の強さといった、語彙に付加される意味的要素のレベルが区別さ

れる。それらは子音の対立で意味区別ができるようになっているが、意味的にお互いに関連性も見られる。従って、子音の対立で意味を区別することは、日本語オノマトペのシステムティックな特徴の1つと考えられる。

一方、中国語にも(2)で挙げられた“呵呵”(keke)と“咯咯”(gege)のような子音対立となっているオノマトペが存在している。しかし、そのように、子音が対立になっているオノマトペのペアは多いとは言えない。辞書で“呵呵”(keke)と“咯咯”(gege)の意味を確認すると、“呵呵”(keke)は“(拟)形容笑声”(訳:(擬)笑い声を表す語)と、“咯咯”(gege)は“形容笑声”(訳:笑い声を表す語)と解釈されている。中国語辞書の意味解釈も、日本語辞書と同じような問題が起こっている。中国語辞書も母語話者に向けて作成することを前提としているため、“呵呵”(keke)と“咯咯”(gege)のニュアンス的な相違点には、細かく言及されていない。辞書だけを参考すると、両者の区別を明確にしていけないように見えるため、コーパスで実際の用例を参照し、それらの用法について詳しく検討していく。コーパスで(8)(9)のような用例が見られる。

(8) a. “... 云彩, 这个比喻真妙。”这时候一个面容瘦削, 戴着夹鼻眼镜的男人呵呵笑着站起来说。

(「……雲、この比喻は素晴らしい」その時、鼻眼鏡をかけた痩せた顔の男が立ち上がり、ほほほと笑いながら言った。- 筆者訳)

b. 我付了帐, 好不潇洒地鞠了一躬, 走出店堂, 这时好像觉得这女人眼里略带几分讥诮; 等到了街上, 回头一望, 只见她不知为什么只管呵呵大笑。

(お会計を済ませ、お辞儀をして店を出た時、この女性が少し皮肉を込めて私を見ている気がする。店を離れて後ろを振り返ると、彼女はなぜかほほほと笑っていた。- 筆者訳)

(9) a. 他没有再同宋美龄握手, 而是深深地鞠了一躬, 逗得宋美龄咯咯直笑。

(宋美齡と握手する代わりに、彼は深くお辞儀をし、宋美齡をクスクス笑わせた。 - 筆者訳)

b. 两个姑娘咯咯的笑了起来。

(二人の少女はくすりと笑った。 - 筆者訳)

c. 卓玛转身跑去，远远地留下一串“咯咯”的笑声。

(卓玛は振り返って走っていた、遠くに一連のくすくす笑いを残しました。 - 筆者訳)

中国語の“呵呵”は口を少し広げて軽い感じで笑う時の笑い声を表す語である。これは男性(8a)にも使用可能であり、女性(8b)にも可能である。しかし、中日辞書によると、“呵呵”は女性性が高い「ほほほ」と訳される場合が多いが、実際の文に当てはめると、(8a)の日本語翻訳では男性が女性性の高い笑い方をしているような人となり、原文とずれてきたことが確認できた。日中・中日翻訳における問題について、具体的な検討は第6章に譲る。

“咯咯”は明るい笑い声を表す語である。(9)のように、“咯咯”は女性に使用する場合の方が多く見られる。日本語オノマトペの意味的区別と関連性に関しては表5-1のようにまとめることができたが、これを中国語の“呵呵”(keke)と“咯咯”(gege)に当てはめて検討してみても、このペアの語はお互いに意味的な関連性が見られなかった。

“呵呵”と“咯咯”のペアの違いは、その語意が元々異なっているところにしか考えられない。すなわち、これらの相違点は“呵呵”と“咯咯”の語意に由来しており、子音の対立によるものとは言えない。日本語オノマトペのペアは、子音の対立で意味的区別がありながら、お互いに意味的関連性も見られる。それに対し、中国語オノマトペには子音で対立となっているペアが存在しているが、数は少ない。さらに、日本語のような子音の対立による意味的な相違も見られなかった。

「笑い」や「泣き」に関するオノマトペという範囲から、他のオノマトペへ拡大して考えてみると、ものを叩く音であれば、“通通”(tongtong)“咚咚”

(dongdong) というペアが見られ、子音の対立で叩く時の力の大きさのレベルが分けられるが、このようなペアは極めて数が少なく、一般化しにくいと考えられる。

以上のように、中国語オノマトペには子音で対立となっている語が少ない。その上に、中国語オノマトペのペアに、日本語オノマトペに現れている意味的関連性が見られない。従って、中国語オノマトペでは、子音の対立が意味的区別に影響を与えているとは言えない。日本語においては、子音の対立と意味的な変化との間にシステマティックな特徴が見られることと異なり、中国語には子音の対立で意味的な変化への影響は特にない。

この相違は、日本語と中国語との音韻上に大きな差があるということに起因していると考えられる。日本語の子音にはもともと /k-g//s-z//t-d//b-p/ の清濁のペアが存在している。それに影響されてオノマトペの意味的対立も多く観察され、子音の対立によって日本語オノマトペに意味的な区別が付けられることが普遍的である。それに対し、中国語の音韻には「清濁」という概念が存在していない。無論有気・無気という分類は存在しているが、その対立で語に意味づけることは考えにくい。

また、日本語のオノマトペは表音文字の仮名で音をそのまま反映し、直接表記できるのに対し、中国語のオノマトペは、漢字で音を表記しなければならない。そのため、中国語オノマトペは音を表記する時に、音を表記する漢字の意味の影響も受けられ、日本語より制限が多いと考えられる。すなわち、音象徴語として扱うオノマトペを言語化する過程の面から考えると、中国語の方が日本語より、漢字化するというステップが多くなる。中国語オノマトペを言語化する際に、音声と漢字の意味という2つの面で考慮しなければならない。従って、オノマトペの意味に影響を与える要素については、日本語の方が意味と音声の関連付けがしやすいと考えられる。子音の対立で意味的な対立を示すことは、日本語オノマトペにおけるシステマティックな特徴と見なすのに対し、中国語オノマトペにおいてはシステマティックな特徴と考えにくい。

1.2 日中オノマトペにおける母音の対立と意味的区別

本節は、母音の対立が、日中オノマトペの意味にどれ程の影響を与えているのかについて、検討していく。しかし、ここで母音について中国語と日本語の音韻体系には大きな相違点があることを先に述べておきたい。日本語には /a//i//u//e//o/ という 5 つの母音しかないのに対し、中国語の母音には、単母音の /a//i//u//e//o//ü/ 以外に、/ai//ei//ui//ao//ou//iu/ のような複合母音もあれば、渡り音の /i/ と韻尾の /n//ng/ もある。そのため、日中オノマトペにおける母音の対立と意味的区別との関係を検討する際に、日本語側は 5 つの母音を考察するのに対し、中国語側は単母音と複合母音などを含めて考察する必要がある。

まず、日本語における「笑い」に関するオノマトペを例として挙げながら検討を行う。

- (10) A. ははは 屈託なく笑う声。
- B. ひひひ 気味のわるい、または下品な笑い声。
- C. ふふふ 息をもらして笑う声。含み笑いの様。
- D. へへへ 人をばかにしてせせら笑う声。
- E. ほほほ 口を手で覆いながら控えめに軽く笑う声。

- a. はっはっ 屈託なく笑う声。
- b. ひっひっ おさえぎみに下品に笑う声。
- c. ふっふっ 意味ありげに笑う声。
- d. へっへっ 人にへつらって笑う声。
- e. ほっほっ 大きな声で区切るように笑う声。

(10)であげられた例は、母音が/a//i//u//e//o/で対立となっている笑い声を表す日本語のオノマトペである。それらの『日本語オノマトペ辞典』での解釈を参照すると、/ha/系(10A, 10a)は明るい笑い声を表す語であり、プラスイメージを持っているのに対し、/hi/系(10B, 10b)と/he/系(10D, 10d)はそれぞれ「下品な笑い声」や「人にへつらって笑う声」と解釈される語であり、明らかにマイナスイメージを持っている語である。また、/hu/系(10C, 10c)は含みのある笑い声を表す語であり、/ho/系(10E, 10e)は控えめな笑い声を表す語である。これらの語彙から、日本語の「笑い」に関するオノマトペは、母音の対立で、明らかな意味区別が見られる。

さらに、「泣き」に関するオノマトペを見ると、日本語の「笑い」に関するオノマトペが5つの母音が全て対立していることとは異なるが、「あんあん」「えんえん」「おんおん」というように3つの母音での対立が存在していることが確認できた。

なお、「笑い」「泣き」に関するオノマトペから範囲を広げ、他のオノマトペも考えてみると、「せかせか」「せこそこ」のペア、「かばかば」「かぶかぶ」と「かぼかぼ」のペアなど、母音の対立でペアとなっているオノマトペが見られる。以上のように、日本語のオノマトペは、「笑い」に関するオノマトペのように、5つの母音が全部対立となっているペアは少ないものの、/a/と/o/、/a/と/e/などのような母音の対立のペアが広く見られる。また、各母音により、発音するときの口の大きさが異なることとともに、語彙的には強弱や、心情の高低などの要素が、付加されている。母音の変化が日本語オノマトペに与える意味的影響は、主に2つにまとめられる。1つは、日本語オノマトペは母音の/a//i//u//e//o/の使用によって発音する時の開口度を調整する。それは母音の一般的な特徴と考えられ、日本語だけではなく、他の言語にも見られる特徴と考えられる。もう1つは、日本語オノマトペは母音の使用により、イメージ(上品と下品)や大小、強弱などの意味要素も付加されている。

一方、中国語におけるオノマトペの場合を見ていくと、“哈哈” (haha) と “嘻嘻” (hehe)、“嘎嘎” (gaga) と “咯咯” (gege) のようなペアが抽出できる。それらの意味を辞書で調べると、以下のような解釈がされている。

- (11) a. 哈哈 (haha) : (拟)笑声。 ((擬) 笑い声。 -筆者訳)
b. 嘻嘻 (hehe) : (拟)形容笑声。
((擬) 笑い声を表す。 -筆者訳)
c. 嘎嘎 (gaga) : 象声词, 笑声。 (象声詞、笑い声。 -筆者訳)
d. 咯咯 (gege) : 象声词, 形容象声词。
(象声詞、笑い声を表す。 -筆者訳)

(11) で挙げられた中国語辞書の語彙だけによると、母音の対立となっている “哈哈” (haha) と “嘻嘻” (hehe)、“嘎嘎” (gaga) と “咯咯” (gege) の区別はできない。そのため、実際の用例を利用して検討してみる。コーパスでの用例を検索したところ、以下の用例が見られる。

- (12) a. 李敖听了哈哈大笑：“是有点儿堵人嘴的意思。最有趣的是在台湾，一位台北市议员……”
(それを聞いて李敖ははははと笑った。「確かにちょっと言わせない感じですね。最も興味深いのは、台湾の台北市議会議員が……」 - 筆者訳)
b. 我心情压抑了就打开电脑，找人家骂我的帖子看一看，看完我就哈哈一乐。
(落ち込んでいる時にパソコンを開けて、人々が私を叱る投稿を読んでははははと笑う。 - 筆者訳)
c. 见我惊慌，其中一个青年嘻嘻地笑了起来，另一个则向我解释说：“哥们儿，买几张吧，过了这个村……”

(慌てている私を見て、一人の青年がほほほと笑い出した。もう一人が話してくれた。「お兄さん、何枚か買って下さいよ、今回買わないなら二度と買えない…」 - 筆者訳)

- d. 杨玉翠忽然嘻嘻笑着说：“你是不像我生的孩子，怎么有这么火爆的脾气？……”

(楊玉翠は突然ほほほと笑って言った、「あなたは私の子供ではないようですね、なぜあなたはそんなに怒っているのですか？」 - 筆者訳)

- (13) a. 侏儒女人们围着他逗乐，他一句话一个举动都逗得她们嘎嘎大笑。

(小人の女性たちは彼の周りでおどけている。彼の一言一句、一挙手一投足が彼女たちをけらけら笑わせた。 - 筆者訳)

- b. 你们等着看吧！找到了我的亲人，我一定不再忧郁，每天睁开眼就嘎嘎地笑。

(ごまあみろ！親戚を見つけたら、私はもう落ち込んだりなんかなくて毎日目を覚めてからけらけら笑っていく。 - 筆者訳)

- c. 她见到费格拉哈手里掂着棍子，不由得咯咯地笑了起来。

(フィグラハが棒を手に持っているのを見て、彼女はくすくす笑った。 - 筆者訳)

- d. 喂完饭，又给小强洗头洗脸，小家伙时而咯咯地笑几声。

(ご飯を食べさせた後、小強の髪と顔も洗ってあげる。小強は時々くすくす笑った - 筆者訳)

(12) で挙げられた“哈哈”(haha)と“嘻嘻”(hehe)の例文を見ると、“哈哈”(haha)は“大笑”と関連して使う用例が多く見られ、口を大きく開けて笑う声、高笑いの意味を持っている語として用いられている。それに対し、“嘻嘻”(hehe)は“哈哈”(haha)のような大笑いを表現する語ではなく、“哈哈”(haha)より口を抑えている笑い声を表現する語として使用されている。また、(13)の“嘎嘎”(gaga)と“咯咯”(gege)も同様に、“嘎嘎”(gaga)は“大笑”と関連して使う用例も多く見られ、口を大きく広げた明るい

笑い声を表す語として使われているのに対し、“咯咯”(gege)は明るい笑い声を表す語であり、笑う時の口の大きさは“嘎嘎”(gaga)より小さいと考えられる。

中国語の感情オノマトペにおける“哈哈”(haha)と“嘻嘻”(hehe)、“嘎嘎”(gaga)と“咯咯”(gege)の例から、母音の/a/と/e/の対立で、笑い声の大きさが異なっていることがわかった。しかし、それは母音の一般的な特徴と考えられ、中国語オノマトペだけに現れた特有の特徴とは考えられない。

単母音の場合以外に、複合母音、渡り音、または韻尾が入る場合を考えると、「笑い」に関するオノマトペには“哈哈”(haha)と“嘿嘿”(heihei)、「泣き」に関するオノマトペには“啾啾”(yiyi)と“啾啾”(yingying)が見られる。“哈哈”(haha)は/a/がついているため、「大笑い」を表しているのに対し、“嘿嘿”(heihei)は/ei/による「純粋な笑い声」または「含みある笑い声」という意味を表す語となっている。“啾啾”(yiyi)と“啾啾”(yingying)も、/i/が付いているため、同じく抑えた泣き声を表す語となっている。“哈哈”(haha)と“嘿嘿”(heihei)、“啾啾”(yiyi)と“啾啾”(yingying)のペアから、それらの意味は母音の一般的な特徴に影響されることがわかった。しかし、日本語オノマトペで観察された、母音の対立によって母音の一般的な特徴以外にイメージなどの意味的要素も付加されるといふ影響は、中国語においては観察されなかった。

従って、中国語におけるオノマトペには、母音の対立でペアとなっているものが存在しているが、そのペア数が少ない。さらに、中国語オノマトペは日本語のように、それがパターンとして多くのオノマトペに対応しているとは認められにくい。

以上で、子音の対立と母音の対立という2つの部分に分けて日中オノマトペの音韻的側面の特徴について比較対照を行った。日本語オノマトペは母音の対立と子音の対立でオノマトペの意味的対立を示しており、音韻変化がオノマトペのバリエーションを作る機能を果たしている。そのため、日本語オノマトペは音韻的側面においては生産的なシステムを持っていると言える。それに対し

て、中国語オノマトペの意味は、子音や母音などの音韻変化でバリエーションを作ることは見られにくい。中国語オノマトペの意味は、より固定的で、語彙レベルで止まっている状況になっている。そのため、中国語オノマトペは音韻的側面においては生産的なシステムを持っているとは言えない。

1.3 日中「笑い」「泣き」に関するオノマトペの母音分布特徴

日本語で母音の対立が/a//i//u//e//o/全てにおいて見られて意味的な変化もそれぞれ観察されたが、中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペはそれと異なり、全ての母音における対立が見られたわけではない。しかし、中国語側には/a//e/の母音の対立しか見られないことが、「笑い」「泣き」に関するオノマトペが/a//e/にしか分布していないと観察できる。本節は、日本語と中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペが、母音上にどのような分布をしているか、日中両言語には、「笑い」「泣き」を表す時に、母音の選択上にどのような偏りがあるかについて、検討を試みる。

研究対象である日中感情オノマトペの母音分布状況を見ると、日本における「笑い」「泣き」に関するオノマトペの母音は、/a//i//u//e//o/に全て分布していることが確認できた。一方、中国語のオノマトペは、「笑い」と「泣き」に明らかな違いがある。特に母音/u/の分布については、「笑い」に関するオノマトペでは観察できなかったが、「泣き」に関するオノマトペでは多く観察された。

日本語と中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペが母音体系上にどのような分布をしているのかを検討するため、以下のような例を挙げる。

・日本語

笑い	あはは	いひひ	うふふ	えへへ	おほほ
	a/ha/ha	i/hi/hi	u/hu/hu	e/he/he	o/ho/ho

泣き	あんあん	*いんいん	*うんうん	えんえん	おんおん
	a/N/a/N	i/N/i/N	u/N/u/N	e/N/e/N	o/N/o/N

・中国語

笑い	哈哈	嘻嘻	嘿嘿	吼吼
	ha/ha	xi/xi	hei/hei	hou/hou
泣き	哇	呜呜	呱呱	呜哇
	wa	wu/wu	gu/gu	wu/wa

以上の例から、日本語における「笑い」に関するオノマトペの母音は /a//i//u//e//o/ 全体に分布することが観察できたが、「泣き」の場合は、/a//i//u//e//o/ すべてに分布しているとは言いにくいことがわかった。さらに見てみると、/u/ を使用して「泣き」を表現するオノマトペが極めて少ないと言える。一方、中国語における「笑い」に関するオノマトペの母音分布は、「u」に見られなかったが、「泣き」の場合は「笑い」の状況と逆になっており、その母音の分布は「u」に偏っている。従って、日中感情オノマトペにおける「笑い」「泣き」に関するオノマトペの母音分布の特徴は、主に2つにまとめられる。

まず、日本語の「笑い」「泣き」に関するオノマトペにおいては母音の /a//i//u//e//o/ に分布が広く見られるのに対し、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの母音分布は、不完全である。特に /u/ の分布について、中国語は「笑い」と「泣き」の状況は明らかに異なっている。

次に、中国語では、/u/ の使用は、「泣き」を表現する際に偏っている。中国語における「笑い」に関するオノマトペは /a//i//e//o/ に分布が見られたが、/u/ にはない。それに対し、中国語における「泣き」に関するオノマトペは /u/ を使って表現している語が数多く見られる。/u/ で発音する泣き声を表すオノマトペの数を確認すると、研究対象である合計 14 語の泣き声の擬声語のうち、

“呜呜”“呱呱”“呜哇”などのような/u/で発音する語が6語であり、ほぼ半分を占めている。母音の分布は、中国語の「笑い」と「泣き」に関するオノマトペに、影響を与えていることが見られる。特に、/u/の分布は、「笑い」と「泣き」において偏りが観察できた。

2 語形上の特徴について

2.1 日中オノマトペにおける反復形

中国語オノマトペといえ、反復形が典型的な特徴と言われるが、本節はそれを検証するために、研究対象の「笑い」「泣き」に関するオノマトペの調査を行い、数値でその論について検証していく。日中オノマトペにおける語形上のバリエーションと、各語形の割合を調査することを通して、日中オノマトペの形態的な特徴をそれぞれ見ていく。ここでは、中国語のオノマトペの語形が反復形に偏るのに対し、日本語では反復形以外に、「～っ」型または「～り」型のような語形上のバリエーションも存在していることを示す。

日本語オノマトペの形態的特徴について、田守・スコウラップ(1999)は、オノマトペの形態的・音韻的特徴としては、「り語尾」、促音の挿入と語末の付加、撥音の語末の付加、語幹からの反復形などの点が挙げられると指摘している。これはオノマトペ全体の特徴とみられるが、擬音語と擬態語を分けて、それぞれどのような特徴があるかについては、説明が足りない。また、中国語オノマトペ(象声詞)の形態的特徴について、耿(1986)と野口(1995)は、それぞれ10種類と11種類に分けている。しかし、従来の中国語オノマトペの定義と範囲は研究者によって異なり、擬態語がその分類に含まれていない可能性も考えられる。本論文は「擬態語」も中国語オノマトペの範囲に入れて検討を行うため、擬音語と擬態語を分けてそれぞれの特徴について明らかにする。

まず、日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを擬音語と擬態語に分けて、語形上の特徴を検討していく。

・擬音語 (93 語)

完全反復形 (AAA, ABAB, ABCABC)	60 語/64.5%
半反復形 (ABB)	12 語/12.9%
～っ	12 語/12.9%
その他	9 語/9.7%

・擬態語 (51 語)

完全反復形 (ABAB, ABCABC)	25 語/49.0%
～っ	10 語/20.0%
～り	9 語/17.6%
その他	7 語/13.7%

日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペの語形で分類し、各語形の語数を計算した結果、擬音語における完全反復形を持つ語は 64.5%を占めており、反復形を持つ語は 12.9%を占めている。つまり、擬音語において、反復形(完全反復形+反復形)を持つ語の比率は合計 77.4%となり、極めて大きな割合を占めていると言える。

また、擬態語の場合には反復形が完全反復形類型しかみられず、全体の擬態語の 49.0%を占めている。擬態語において反復形を持つ語の割合は擬音語ほど極めて高いとは言えないが、「～っ」型または「～り」型と比べると、遙かな差が読み取れる。つまり、擬態語においては、「～っ」型と「～り」型以外に、反復形を持つ語も多く存在している。

このように、日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを、擬音語と擬態語に分けてそれぞれの語形上の割合について検討した結果、「～っ」型は擬音語と擬態語といずれにおいても現れたが、「～り」型は擬態語にしか見られなかった。また、反復形を持っている語は、擬音語、擬態語を問わずに、その中に極めて高い割合で現れている。すなわち、反復という語形構成法は、

日本語の感情を表すオノマトペにおいて最も使用されている語構成法と考えるもよいだろう。

次に、中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを擬音語と擬態語に分けて、語形上の特徴を検討していく。

・擬音語 (33 語)

完全反復形 (AA, ABAB, AABB)	26 語/78.8%
その他	7 語/21.2%

・擬態語 (29 語)

完全反復形 (AA, AABB)	9 語/31.0%
半反復形 (ABB)	19 語/65.5%
その他	1 語/3.5%

中国語の場合も、擬音語と擬態語において現れた語形を分けて各語形の語数とその割合を計算した。中国語の語形類型はより単純で、反復形とその他に分けられる。具体的な数値を見ると、擬音語における完全反復形を持つ語は 26 語で、極めて高い割合の 78.8%を占めている。つまり、中国語の擬音語において、反復形を持つ語は極めて多く存在している。

また、擬態語の場合、完全反復形を持つ語は 31.0%を占め、半反復形と扱う ABB 型は、最も高い割合の 65.5%となっている。それ以外に、その他の形を持つ語は 1 語しかない。そこから、中国語の擬態語においても、その擬音語と同様に、反復形を持つ語が圧倒的な数となっており、合計 96.5%を占めている。すなわち、中国語の場合、オノマトペの語形上のバリエーションは日本語と比べてより単純であることが言える。さらに、反復という語構成法は、擬音語、擬態語を問わずに、その語構成の代表的な語構成法と考えられる。

以上で、日中感情オノマトペの語形類型を擬音語と擬態語に分けて考察した。それを通して、日本語の語形のバリエーションが中国語より多いことを明らか

にした。特に日本語の擬態語には、反復形以外に、「～っ」型と「～り」型も見られ、バリエーションが多いと言える。一方、反復という語構成法は、擬音語においても、擬態語においても、最も代表的な語構成方法として使用されている点は、日中両言語とも見られた共通点である。

2.2 反復形の生産性について

反復形は日中オノマトペにおいて数多く見られ、オノマトペの語構成の代表的な特徴と言えるが、日本語オノマトペにおける反復形と中国語オノマトペにおける反復形は、それぞれの言語体系において、どのような機能を果たしているのかについて検討していく。ここでは、日本語と中国語のオノマトペにおいては反復形をとる語が多いが、日本語における反復形は「生産的な反復形」であるのに対し、中国語における反復形は「語彙的な反復形」であることを示す。

まず、日本語のオノマトペの反復形と非反復形の例を挙げて検討を行なっていきたい。

・日本語

完全反復形

AAA 型	ははは	ふふふ	へへへ
ABAB 型	あはあは	げらげら	にこにこ
	しくしく	はらはら	めそめそ
ABCABC 型	えへらえへら	くすりくすり	うえんうえん

半反復形

ABB 型	わはは	えへへ	ぎゃはは
-------	-----	-----	------

非反復形

～っ型 どっ にかっ わっ げたっ
～り型 にこり にんまり ぽろり

以上で挙げた各語形の語を見ると、日本語オノマトペの語構成について、3つのことがまとめられる。まず、完全反復形の各型は、語構成の面から見ると、語基から一回以上の繰り返しをして成り立っている。完全反復形は、擬音語における観察もできれば、擬態語における観察もできる。また、語基とその反復形は、意味的には関連性がある、ペアとなっていることが見られる。

次に、半反復形と扱う ABB 型は、基本的には擬音語にしか見られない。すなわち、半反復形という語構成方法は日本語の感情オノマトペにおいて、音を真似する擬音語を構成する時に多く使われている。さらに、反復形のほかに、非反復形もあって、その中には「～っ」型と「～り」型があるが、語構成の面から見れば、それらも1つの語基から「っ」や「り」をつけることで、生産的なオノマトペになる。以上から、日本語オノマトペには反復形以外に、他の語形のバリエーションもある。これらの語形の関連性を考えてみると、これらは基本的には1つの語基から反復し、または「り」や「っ」などを付けて構成されることが多い。すなわち、これらの各語形の語構成には関連性が考えられる。そのため、日本語のオノマトペの語構成は生産性が高いと言える。また、日本語オノマトペの反復形とその語基がペアとなっていることから、日本語オノマトペの反復形は生産性が高いと認められ、日本語オノマトペの反復形は「生産的な反復形」であると言えるだろう。

次は中国語のオノマトペにおける反復形と非反復形の例を挙げて検討を行なっていきたい。

・中国語

完全反復形

AA 哈哈 嘿嘿 呜呜

ABAB 哇啦哇啦 哇呀哇呀 呼哧呼哧

AABB 嘻嘻哈哈 哭哭啼啼 抽抽嗒嗒

半反復形

ABB 笑咪咪 扑簌簌 泪汪汪

非反復形

ABCD 稀里哗啦

以上で挙げた各語形を持つ中国語オノマトペを見ると、中国語オノマトペの語構成については、3つのことにまとめられる。まず、完全反復形には、日本語と同じような「ABAB 型」のほか、独自の繰り返し方をしている「AABB 型」のような類型もある。「ABAB 型」は日本語と同様に、語基の AB から一回繰り返してから成り立ったのに対し、AABB 型は、語基の AB を分けてそれぞれ一回繰り返してから成り立った。例えば、“哇啦哇啦”はその語基と考えられる“哇啦”の繰り返し、“呼哧呼哧”は“呼哧”の繰り返しをして成り立った語で、語基の“哇啦”や“呼哧”は、元々擬音語として使われることができ、意味を持つ語と認められる。それに対し、“嘻嘻哈哈”と“哭哭啼啼”も、語基の“嘻嘻”と“哭啼”から成った語であるが、その語基の繰り返し方は、語基の“嘻嘻”や“哭啼”を分け、それぞれを一回反復するという方法となっている。語基と考えられる“嘻嘻”や“哭啼”の用法を考えると、“嘻嘻”は擬音語であるが、“哭啼”は動詞として使用される場合もある。そのため、「ABAB 型」の状況と異なり、完全反復形の「AABB 型」の語基と扱われる「AB」の用法は、擬音語の他に、動詞として使われる語も見られる。

次に、半反復形の ABB 型は中国語においても存在しているが、日本語では擬音語の方がこの ABB 型で現れているのに対し、中国語では擬態語の方が ABB 型で現れている。具体的に見ると、中国語には“笑咪咪”や“泪汪汪”、または“扑

簾簾” となような語が ABB 型に現れている。その語構成は「A+BB」という形で分解されることが考えられ、BB は A を修飾する関係が取られる。

最後に、非反復形について考察する。研究対象である「笑い」と「泣き」に関するオノマトペには、“A 里 BC” という語形類型が見られ、他には“A” のような単独な 1 音節語と、“AB” のような 2 音節語という類型も考えられる。日中感情オノマトペで現れた「反復形」を対照すると、日本語において、非反復形と反復形とは同じ語基から生産されたものが広く見られ、お互いに関連性が深くて生産性が高い。それに対し、中国語の場合には非反復形と反復形との間に関連性見にくいため、生産性が低い。すなわち、日中両言語のオノマトペにおいて、反復形が多く存在しているが、日本語の反復形は非反復形とペアになっていることが広く見られ、「生産的な反復形」と考えられるのに対し、中国語の反復形は非反復形との関連性が薄くてペアになりにくいため、語彙内に限られている「語彙的な反復形」と言える。

3 文法的用法について

第 3 章と第 4 章で「笑い」と「泣き」に関する日中オノマトペの用法を考察した時に少し触れたが、本節は、日中オノマトペ自体が、文の中でどのような用法で使用されているかについて、例文をあげながら、検討していく。

日本語の「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用状況について考察した時、オノマトペが後接する語によって「名詞と後接」「動詞と後接」「形容詞・形容動詞と後接」という分類と、後接なしの「引用用法」と「その他」の類という 5 種類に分けて考察を行った。「引用用法」は擬音語の専用用法と思われる、「」内で独立に使われる用法である。それ以外のオノマトペの後接する語には、名詞、動詞、形容詞・形容動詞が見られるが、オノマトペ自体の働きが、副詞と同様に考えられる。

- (14) a. 区役所別館幼児室で「ニコニココーナー」を開設しています。
 b. にこにこ子育て相談予約不要です。
 c. 毎月25日はにこにこ料理の日
- (15) a. 妙子がにっこり微笑むと、いきなり抱きついてきた。
 b. 仕事をほったらかして話に熱中している様子を見て、何だろうと出て来た文子にも、男はにこにこ語りかけた。
 c. 砂沢はニヤニヤしながら、体を起こしてお茶を飲んだ。
- (16) a. 安定期に入り、悪阻もおさまると嘘のようにそれがおさまり、ニコニコ楽しく過ごせるようになりました。
 b. いつもにこにこ元気な子、が好ましい像であり、怒りっぽくて不機嫌な子は、その対局にある。
- (17) a. どことなく嬉しそうで、ニヤニヤは止まらない。
 b. とにかく琢哉は、この事態を深刻に心配しているのに、私と二人の五年生はニヤニヤです。

(14)で挙げた例文は、「笑い」に関するオノマトペが名詞を後接する例である。日本語には「オノマトペ+名詞」という形となって、複合語が構成されている場合が多く見られる。

(15)で挙げた例文は、「笑い」に関するオノマトペが動詞を後接する例である。ここで挙げられたオノマトペは後接の動詞を直接修飾しているため、副詞の基本的な用法と同様だと考えることができる。また、(16)では、オノマトペが形容詞・形容動詞と後接しているが見えるが、(16a)の「にこにこ」は「楽しく」を修飾することではなく、「楽しく」と同様な働きをして、動詞の「過ごせる」を修飾している語であると考えられる。

(17)はオノマトペ自体が名詞的用法、または形容詞的な用法をしていると見えるが、(17a)で止まらないのは「ニヤニヤすること」と考えられ、(17b)での「ニヤニヤ」は「ニヤニヤしている状態」を指している。そのため、日本

語オノマトペは名詞的用法や形容詞的用法（述語的用法）を持っていることも言える。

以上から、日本語オノマトペの用法は、名詞、動詞、形容詞などと後接してバリエーションが多く見られるが、詳しく見ると、その用法は、基本的に副詞的用法が最も代表的な使い方と考えられる。

一方、中国語オノマトペにおいても、日本語と同様に、「引用用法」が擬音語の専用用法と考えられる。それ以外に、野口(1995)が中国語オノマトペの用法を5つにまとめているが、その後接する語によって、主に“的 (de)”が後接、“地 (de)”が後接、何も後接しないという3種類にまとめられる。

(18) a. 被关闭了两周的拉法海关重新畅通了, 人们快乐的心情通过嘻嘻哈哈的喧闹声传递出来。

(2 週間閉鎖されていたラファ税関が再開され、人々の楽しい気分がヒヒハハの笑い声を通して伝えられました。- 筆者訳)

b. 早已听不见人家在说些什么, 一心去辨听从厕所里传来的, 压抑着的嚶嚶的哭声, 我痛感自己的罪过。

(人が何を話しているのかはもう聞こえず、トイレから聞こえてくる抑えた泣き声に集中して聞いて、罪悪感を強く感じました。- 筆者訳)

c. 说着山岗走到泪汪汪的儿子身旁, 用手摸他的脑袋, 对他说: “别哭。”
(山剛は涙ぐむ息子のところへ行って、息子の頭を手でさわり、「泣くな」と言った。- 筆者訳)

(19) a. 程英母亲怀抱着7个月的女儿看到陆裕朴, 口一开, 眼泪就扑簌簌地往下流。

(生後7か月の娘を抱いている程英の母親は、陸裕朴を見たら、口を開こうとした瞬間、涙がぽろぽろと落ちてきた。- 筆者訳)

b. “我先带大家参观一下这个房间, 然后我们再接着开会。”李志强笑嘻嘻地说着, 便起身招呼大家跟他走。

(李志強はひひひと笑いながら「まず皆さんにこの部屋を見せてから、引き続き会議をやりましょう。」と言って、立ち上がってみんなを連れて行った。－ 筆者訳)

- c. 两位保安员只是笑眯眯地听着，一开口，与旁人无异：“请给我们一份问卷。”

(二人の警備員はニコニコして聞いているだけで、話すときは他の人と同じように、「アンケートをお願いします」とのことでした。－ 筆者訳)

- (20) a. 老纳呵呵一笑：“我知道骂我的好多是记者。”

(ラオ・ナはニコッと笑って、「私を叱る多くの人がジャーナリストであることを知っています」と言いました。－ 筆者訳)

- b. 他没有再同宋美龄握手，而是深深地鞠了一躬，逗得宋美龄咯咯直笑。

(宋美齡と握手する代わりに、彼は深くお辞儀をし、宋美齡をクスクス笑わせた。－ 筆者訳)

- c. 小俊美看到老师累成这个样子，趴在老师背上呜呜哭着说：“老师，你比俺亲娘还疼我。”

(先生がとても疲れているのを見て、シャオ・ジュンメイは先生の背中に横になっておんおんと泣き、「先生は、お母さんよりも私をかわいがってくれました」と言いました。－ 筆者訳)

(18)で挙げたのは“的 (de)” が後接するオノマトペの用例である。中国語のオノマトペは、“的 (de)” をつけることで、“喧闹声” (18a) “哭声” (18b) “儿子” (18c) のような名詞を修飾することとなる。“的 (de)” が後接するオノマトペは、後接する名詞の修飾語となるため、形容詞と同じような用法となる。また、(19)で挙げたのは“地 (de)” が後接するオノマトペの用例である。中国語におけるオノマトペは、“地 (de)” をつけることによって、その後接する“流” (19a) “说” (19b) “听” (19c) のような動詞を修飾することとなる。すなわち、“地 (de)” が後接するオノマトペは、副詞と同じような用法となる。以上から、中国語におけるオノマトペの用法は、形容詞と

同様の用法もあれば、副詞と同様の用法もある。その判断基準は、“的 (de)” が後接するか、“地 (de)” が後接するかということに、強く影響されている。

さらに、(20) で挙げられた“的 (de)” と“地 (de)” のいずれも後接しない場合、オノマトペの後には“笑” (20a, 20b) や“哭” (20c) のような動詞が見られるが、ここは“地 (de)” を入れても意味的には変化がない。従って、中国語のオノマトペが“的 (de)” と“地 (de)” のいずれも後接しない場合でも、オノマトペが動詞の修飾語として使用される場合が多く、“地 (de)” が後接する用法と同じように、副詞と同様の働きをしている場合が多く考えられる。

以上のように、日本語におけるオノマトペの用法は基本的に副詞と同じような用法をしているのに対し、中国語におけるオノマトペは、“的 (de)” が後接するか、それとも“地 (de)” が後接するかということに強く影響され、形容詞と同じような用法もあれば、副詞と同じような用法もある。

4 日本語における擬音語と擬態語の再定義

第3章と第4章で日本語の「笑い」と「泣き」に関するオノマトペを検討した時に、擬音語と擬態語に分けてその分布を明らかにしたが、日本語オノマトペにおける擬音語と擬態語の分類については、曖昧なところが存在し、再検討する必要があると考えられる。本節は、日本語における擬音語と擬態語に関する定義と分類、特に擬音語についての再定義を中心にして検討を行う。

第3章と第4章で日本語の擬音語と擬態語の分類は、オノマトペの専門辞書『日本語オノマトペ辞典』の解釈を参照して分類したが、「笑い」に関するオノマトペは「声・さま」「さま」の2種類しかないのに対し、「泣き」に関するオノマトペは「声」「さま」「声・さま」の3種類に分けられている。すなわち、日本語の「笑い」に関するオノマトペは、声と様子両方が表現できる「擬音語・擬態語」と様子だけを表す「擬態語」という2種類の語が存在しているが、

日本語の「泣き」に関するオノマトペは、声だけを表す「擬音語」、様子だけを表す「擬態語」と声と様子両方を表す「擬音語・擬態語」という3種類の語が存在している。では、何故日本語の「笑い」に関するオノマトペには声だけを表す「擬音語」がないのか、「擬音語」と「擬音語・擬態語」、または「擬態語」と「擬音語・擬態語」の区別は何か、どのような基準でそれらを区別しているのか、については明確な判断基準が言及されていない。

- (21) 擬音語 a. おぎゃーおぎゃー
 b. ぐすぐす
- (22) 擬音語・擬態語 a. うふふ がはは きゃっきゃつ
 b. あんあん おんおん
 c. ころころ けたけた
 d. しくしく ぐちぐち
- (23) 擬態語 a. にこにこ にっこり
 b. めそめそ うるうる

(21) ～ (23) の例は、『日本語オノマトペ辞典』からそれぞれ「擬音語」「擬音語・擬態語」「擬態語」と分類される語の例である。まず、擬音語と擬音語・擬態語との判断基準を(21)と(22)の例を参照しながら見ていく。

(21)の「おぎゃーおぎゃー」は泣き声を真似して言語化した語と考えられ、擬音語と扱われる。その基準で判断すれば、(22a)と(22b)で挙げられた「うふふ」「あんあん」などのような笑い声や泣き声を真似して言語化した語も、(21)の「おぎゃーおぎゃー」と同様に擬音語に入れられるのではないかと思われる。辞書の解釈によると、「おぎゃーおぎゃー」は「赤ん坊の泣き声」と記述されており、「擬音語」と判断されるが、「あんあん」の場合は、「人が大きな声を上げてなく声。また、そのさま。」のように記述されて、「擬音語・擬態語」の類に入れられているわけである。しかし、何故同じく音を真似する語として使われるのに、「あんあん」はその泣く様子を表すことができる

と判断したのについては、説明不足なところがあると考えられる。(21a) (21b)と(22a) (22b)が異なっていることは、どのように判断したかについては未だ検討する必要があると考えられる。したがって、「擬音語」と「擬音語・擬態語」との判断基準は、具体的にはどのようなになっているかについて、未だ検討する余地がある。

また、(22c)と(22d)の「ころころ」「しくしく」のオノマトペも(22a)と(22b)の「うふふ」や「あんあん」と同様に、「擬音語・擬態語」のグループに入っているが、(22a)と(22b)は直接声を真似して言語化したオノマトペと取り扱える一方で、(22c)と(22d)の語はそうではなく、声を直接真似して言語化したオノマトペとは扱いにくい。例えば、「うふふ」「あんあん」は臨場感がある語であり、元の笑い声や泣き声を直接表現している語と考えられる。それに対し、「しくしく」は本当に「siku」という声で泣いていることとは考えにくい。「しくしく」は泣き声を直接に表現することよりも、抽象化された擬音語として取り扱った方が良いのではないか。擬音語・擬態語のグループの中にも、(22a) (22b)と(22c) (22d)のようなグループの語は異なっているところが見られ、2つのグループに分けて区別する必要があると思われる。

(23)の擬態語については、音声を立てず様子を表す語であると、他のグループの語と明らかに異なっているため、判断しやすい種類である。

以上から、日本語オノマトペにおける擬音語と擬態語の分類は、主に以下の問題があるとまとめられる。

①「擬音語」と音を真似する働きを中心に行っている「擬音語・擬態語」との判断基準は曖昧である。

②「擬音語・擬態語」グループ内には、音を真似する働きを中心に行っている「擬音語・擬態語」と、音をそのまま真似するわけではなく、抽象化された「擬音語・擬態語」、という2つの性質を持つオノマトペのグループが存在しているため、それらを再区分する必要がある。

③「擬態語」と抽象化された「擬音語・擬態語」との境界を明らかにする必要がある。

日本語における「擬音語」、「擬音語と擬態語」は一見すると容易に区別しやすいと見えるが、日本語オノマトペは生産性が高い、言語化しやすいなどの特徴があるため、擬音語と擬態語の境界は明らかになっていない。すなわち、「擬音語」と「擬態語」に区分することは容易ではない。本論文は、上で挙げた3つの問題に基づき、日本語オノマトペにおける「擬音語」と「擬態語」の再区分の必要性について試みる。

擬音語であるか、それとも擬態語であるか、との判断は、「音」を真似するか「様子」を表すかによって判断が付けられるはずであるが、日本語のオノマトペの場合、「音」か「様子」か、どちらか1つを表していることだけでなく、両方とも存在している場合もあれば、両方の中強弱が見られる場合もある。そのため、本論文は、「音」と「様子」を2つの要素として、それらを組み合わせていく。その組み合わせの結果は、以下のような4つの類型になる可能性がある。

(24)

	音	様子	
a.	○	×	擬音語
b.	○	○	擬音語・擬態語
	① ++	+	(擬音語中心の)擬音語・擬態語
	② +	++	(擬態語中心の)擬音語・擬態語
c.	×	○	擬態語
d.	×	×	存在なし

(24) では、「音」と「様子」を2つの要素にして、その要素が現れる場合は「○」をつけ、逆の場合は「×」をつけて、表記している。(24) で示したように、それぞれの要素が現れているかどうかによって、(24a) (24b) (24c) (24d) のように、合計4種類の場合に分けられる。(24a) は音という要素だけが現れ、音を真似し、様子を表す働きをしないタイプの語である。そのため、(24a) 類型の語は「擬音語」と見なす。(24b) は音を真似する働きと様子を表す働き両方持っている語であるため、「擬音語・擬態語」と見なす。同様に、(24c) は様子を表す働きだけをしている語で、音を真似することはないため、この種類は「擬態語」と見做す。(24d) の場合、音と様子2つの要素とも「×」となっており、理論的にはこの組み合わせの存在は可能であるが、オノマトペの特徴から考えてみると、少なくとも音と様子という要素のいずれが必要となるため、(24d) のような場合はオノマトペの特性としては不可能であると判断され、(24d) という状況をオノマトペから除外することになる。

また、(24b) の「擬音語・擬態語」グループを詳しく考えてみると、「げらげら」のような、音を感じながら、様子を表す働きをしている語もあれば、「しくしく」のような、実際には「しくしく」のような音をしないで泣く様子を表す働きをしている語もある。すなわち、同じく「擬音語・擬態語」であっても、「音」に偏る「擬音語・擬態語」もあれば、「様子」に偏る「擬音語・擬態語」もある。そのため、(24b) の「擬音語・擬態語」は、さらに2つの種類に分ける必要があると考えられる。ここでは、「音」と「様子」の強弱により、それらをそれぞれ「擬音語中心の擬音語・擬態語」と「擬態語中心の擬音語・擬態語」と呼びたい。

以上のように、日本語のオノマトペは、「音」と「様子」という要素の有無により、3種類に分けられて、「擬音語」(24a) と「擬音語・擬態語」(24b)、「擬態語」(24c) となっている。さらに、音と様子の偏り状況により、「擬音語・擬態語」グループはさらに「擬音語中心の擬音語・擬態語」と「擬態語中心の擬音語・擬態語」に分けられる。

では、(21a) で挙げられた「おぎゃーおぎゃー」と (22a) と (22b) で挙げられた「うふふ」「あんあん」を (24) の分類に当てはめてみると、これらは同じような素性を持っており、(24a) の「擬音語」に入れることも可能であり、(24b) の「擬音語・擬態語」に入れることも可能であると考えられる。しかし、小野の分類によると、(21a) の「おぎゃーおぎゃー」は「擬音語」と分類され、(22a) と (22b) 「うふふ」「あんあん」は「擬音語・擬態語」と分類され、区別が付けられている。そこで、小野の分類は如何なる基準に基づいて行ったのかについて、さらに検討する余地がある。そのため、小野の分類についてさらに検討する必要がある。

小野 (2015) は、擬音語と擬態語の交渉について、「当初は擬音語として用いられたオノマトペが、擬態語へ意味変化するパターンがある。擬音語は、具体的な音声が背後にあるものであるが、もとの音声が持っていた情感や感覚を受け継ぎながら、抽象化したかたちで、擬態語となる。」と指摘している。しかし、日本語オノマトペには、「擬音語」と「擬態語」との境界が、具体的にどのような基準で区別しているのかについて、さらに検討する余地がある。前述したように、日本語オノマトペは (24) で示したように「擬音語」と「擬音語中心の擬音語・擬態語」、「擬態語中心の擬音語・擬態語」、「擬態語」という4つのグループに分ける必要があると提案したが、それらの境界に曖昧なところがあるため、「音」と「様子」という要素の有無だけによる分類は困難である。従って、本論文は擬音語と擬態語の代表的用法の面から、日本語オノマトペの分類基準について検討を試みる。

第3章と第4章で日本語オノマトペの使用実態を調査した結果から、「引用用法」と「する用法」は相補分布となっていることが明らかになり、「引用用法」は「擬音語」の代表的な用法と考えられる。そのため、「引用用法」に適応するか否かということは、「擬音語」であるか否かの判断となると考えられる。

「引用用法」の有無で、(24a) の「擬音語」と (24b) 「擬音語・擬態語」または (24c) の「擬態語」の区別ができるようになる。具体的にいうと、「あはは」「あんあん」「うふふ」のような笑い声や泣き声をそのまま真似して言語

化した語は、会話の中で直接出ることが可能な語として、「引用用法」に適応できると考えられる。それに対し、「しくしく」「げらげら」のような「擬音語・擬態語」は、一見すると音を表現する語として扱えそうだが、それらは「あはは」のような擬音語より抽象化した語で、直接に発話に引用されにくく、すなわち、「引用用法」になりにくいと考えられる。さらに、「にこにこ」のような「擬態語」も、もっと抽象化されたオノマトペで、音を表す機能を全くないため、「引用用法」には適応できないと判断できる。以上のように、「引用用法」が適応するかどうかということが、「擬音語」「擬音語・擬態語」と「擬態語」の判断基準の1つと考えてもよいだろう。

表5-2は第3章の表3-3から整理したものである。ここでは各オノマトペの引用用法の用例数が高い順で表を作成した。引用用法がオノマトペの最も多用される用法となっている場合、表5-2において太字で表記している。

表5-2 日本語感情オノマトペの引用用法

語	全用例	動詞と後接			引用用法	引用用法の比率
		全用例	「笑う」	「する」		
ははは	860	23	23	0	837	97.3%
あはは	748	22	20	0	726	97.1%
ふふ	395	22	18	0	363	91.9%
うふふ	357	7	5	0	347	97.8%
ぷっ	285	15	24	0	169	59.3%
ほほほ	193	28	8	0	165	85.5%
えへへ	181	14	3	0	156	86.2%
くっ	272	112	12	0	148	54.4%
へへへ	165	8	4	0	148	89.7%
わーっ	109	26	0	0	78	71.6%
くすっ	107	82	75	0	22	20.6%

くすくす	289	250	223	0	6	2.1%
げらげら	127	104	92	0	5	3.9%
にこにこ	972	833	114	402	0	0
にっこり	914	892	350	264	0	0
にやり	639	613	272	191	0	0
にやにや	445	417	132	189	0	0
にやつ	210	203	127	61	0	0
にこっ	196	188	98	42	0	0
にんまり	145	136	41	63	0	0
にこり	161	69	26	25	0	0
にっ	148	80	42	13	0	0
ほくほく	28	4	0	3	0	0

表5-2では、「ははは」から「わーっ」までのオノマトペの引用用法は多用されていると見られる。その次の「くすっ」「くすくす」「げらげら」は、引用用法もあるが、数が多くないと見られる。さらに、「にこにこ」から以下のオノマトペは、引用用法がない語である。このように、「引用用法」の使用によってオノマトペを3つのグループに分けることができる。すなわち、【「引用用法」が多用されるグループ】と【「引用用法」があるが、多用ではないグループ】、【「引用用法」で使用できないグループ】という3つのグループに分ける。これらのグループは、それぞれ「擬音語」、「擬音語・擬態語」「擬態語」に対応する。

「擬音語・擬態語」をさらに分類する際に、「音声」と「様子」の強弱によって分類をする。音を真似する働きを中心としている「擬音語・擬態語」は「音声」要素が強く感じられるため、「擬音語中心の擬音語・擬態語」と分類できるのに対し、音をそのまま真似するわけではなく、抽象化された「擬音語・擬態語」は「音声」より「様子」を中心に表す語であり、「様子」要素の方が強く感じられるため、「擬態語中心の擬音語・擬態語」と分類できる。

以上のように、日本語感情オノマトペを4つに分類する必要があると主張し、それらを分類する際に、①「引用用法」と②「音声」・「様子」という2つの基準を併せて分類する方法を提案した。具体的な手順は以下の図5-1のようにまとめられる。

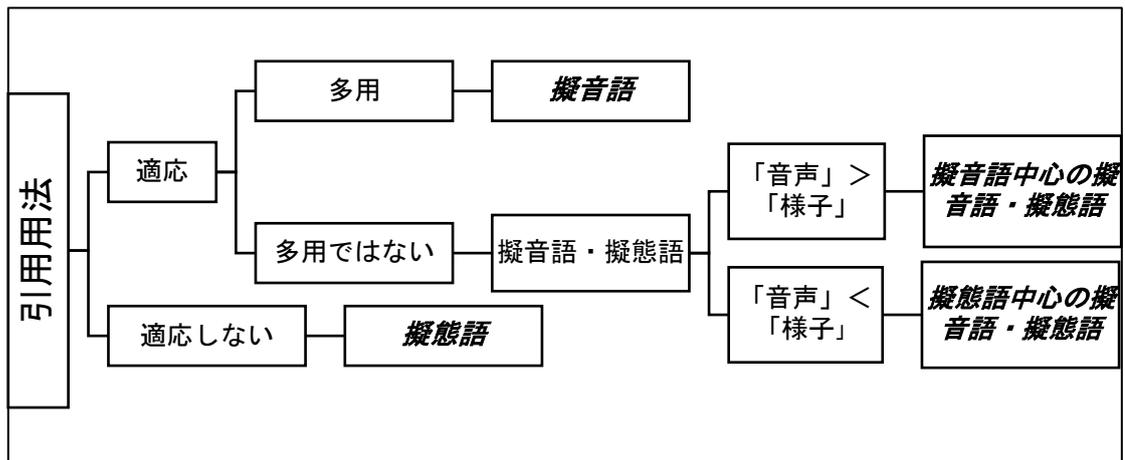


図 5-1 日本語感情オノマトペの分類

5 中国語の象声詞の再分類

従来の中国語オノマトペ（象声詞）の範囲は、研究者によって異なっている。中国語オノマトペには擬音語しかないと示唆している先行研究もあるが、本研究は、中国語オノマトペにも擬態語があるという考え方で研究を進めていきたい。劉（2001）は、“象声词也称拟声词，是指用语音来描摹事物或自然界的声音以及描写事物情态的词，如“砰”（枪声）、“轰隆”（炮声）、“叮咚”（滴水声）、“哗哗”（流水声）、“滴滴答答”（号声）、“哗啦哗啦”（雨声）等等。象声词可以增添声音的实感和语言的生动性，（省略）但是，象声词并不都是描摹事物或自然界的声音，有时是用声音对事物的情态进行描绘。”（「象声詞も擬声語と呼び、実際の音、声や様子を言語音で象徴的に描写する語である。例えば、“砰”（銃の音）、“轰隆”（大砲の音）、“叮咚”

(水滴音)、「哗哗”(流水音)、「滴滴答答”(トランペットの音)、「哗啦啦”(雨の音)など。象声詞の使用は音を実感させ、表現を生き生きとさせる働きをしている。しかし、「象声詞」は全て実際の音や声を模写しているわけではなく、具体的な音で物事の様子を表すときもある。」と指摘している。すなわち、中国語オノマトペには、「音」を利用して音声を表現する「擬音語」と、「音」で物事の様子を描写する「擬態語」があると指摘している。そこから、中国語オノマトペにおける「擬音語」と「擬態語」は、いずれも「音」という要素が必要となっていることが読み取れる。しかし、中国語オノマトペにも日本語と同様に、「音」をしないまま「様子」を表現する「擬態語」が存在するのではないだろうか。本節は、中国語オノマトペにおける「様子」だけを表す「擬態語」の存在について検証を行い、中国語感情オノマトペの分類を試みる。

本節は、オノマトペの最も重要な特徴と考えられる「音」と「様子」という要素が、中国語感情オノマトペに現れたか否かについて検討する。その結果、中国語オノマトペには擬音語だけではなく、擬態語にもあるということを説明し、さらに、中国語オノマトペにおける擬態語にも、日本語と同じように、「音」の要素が現れる擬態語と「音」の要素が現れない擬態語が存在していることを示す。

5.1 中国語における「擬音語」と「擬態語」

中国語オノマトペも、日本語の場合と同様に、「音」と「様子」という要素が出現しているか否かについて、4種類の可能な組み合わせを提示し、それに当てはまる類型を示したものが以下ようになる。

(25)

	音	様子	日本語 (従来の分類)	中国語 (従来の分類)
a.	○	×	擬音語	擬音語
b.	○	○	擬音語・擬態語	擬態語
c.	×	○	擬態語	存在なし
d.	×	×	存在なし	存在なし

(25) に示したように、「音」と「様子」の組み合わせの可能性は (25a) (25b) (25c) (25d) の4つのタイプになっている。(25d) はオノマトペの特徴に当てはまらないため、オノマトペから除外した。劉 (2001) の指摘によると、中国語オノマトペには、「実際の音や声を模写している」働きをしている「擬音語」(例: 哈哈, 呜呜, 咚咚, 哗啦) は (25a) に当てはまり、「具体的な音で物事の様子を表す」働きをしている「擬態語」(例: 笑哈哈, 哼哼唧唧) は (25b) に当てはまるはずである。つまり、中国語オノマトペは音から言語化した語と認識されて、擬音語であれ、擬態語相当の語であれ、いずれも「音」という要素が存在し、それに基づき、「様子」を表現しない語は「擬音語」として認識され、「様子」を表現する語は「擬態語」として認識されているとまとめられる。

(25) から明らかなように、従来の中国語オノマトペの分類は、「擬音語」と「擬態語」という2つの分類しかなく、日本語のような中間的な「擬音語・擬態語」という分類がない。それに、中国語の「擬態語」と認識された語は、素性的にいうと、日本語の「擬音語・擬態語」と同様になっている。(25c) の「音」を立てなくて「様子」だけを表現する語は、従来の中国語オノマトペの分類に存在しないと確認できた。

しかし、(25c) に当てはまる中国語オノマトペは本当にないかと考えてみると、簡単にそうとは言えない。笑う様子を表す“笑咪咪”を例として考えると、“咪咪”は一見すると音を表す語であると聞こえるが、その実際の意味を見る

と、「目を細めて」という意味を表している語であることが確認できる。“笑呵呵”“笑嘻嘻”は笑う様子を表す同時に、“呵呵”や“嘻嘻”という笑い声も感じられることと異なり、“笑眯眯”は音を立てずに笑う様子を表す語である。そのため、“笑眯眯”は(25c)に当てはまる語となり、中国語オノマトペにも「音」を表現せず、「様子」だけを表現する語が存在していると言える。さらに、「泣き」に関するオノマトペにおいても、泣く様子を表す“泪汪汪”が存在し、“wangwang”は泣き声でないため、“泪汪汪”は声を立てず、泣く様子だけを表現する語と考えられる。

以上のように、素性からみると、中国語も日本語も、a、b、c組のオノマトペが存在していることを明らかにした。すなわち、中国語にも「音」を表現せず「様子」だけを表現するオノマトペが存在している。従来の分類では、中国語オノマトペには「擬音語」と「擬態語」という2種類しか存在していないと認識されているが、実際の素性分析をした結果、中国語にも日本語と同様に、「擬音語」「擬音語・擬態語」「擬態語」という3つの種類が存在していると言える。

5.2 中国語オノマトペの判断基準

従来の中国語オノマトペの判定は、その音象徴の特徴に基づき、音を表現する語をオノマトペと判定しているが、その結果、中国語オノマトペには「擬音語」しかないという状況になってしまう。しかし、前節で論じたように、中国語オノマトペにも、「音」と「様子」を表現する「擬音語・擬態語」と、「様子」を表現する「擬態語」という2種類の「擬態語」が存在している。そのため、中国語のオノマトペは、従来の定義と異なり、「擬態語」を入れてその範囲を拡大する必要がある。本節は、中国語オノマトペは「擬音語」だけでなく、「擬態語」まで含まれるという考え方をもち、中国語オノマトペの判断基準、特に「擬態語」に対する判断基準を提示する。

オノマトペは一般語彙と異なり、音象徴語として認識されているため、その特徴で最も代表的なのは、音を真似して語彙化するというところだと考えられる。そのため、中国語オノマトペの判断基準の1つは、音を真似するというところである。

擬音語は音をそのまま言語化する語が多いため、判断しやすい。例えば、1音節の“啪”から、“哈哈”、“呜呼呼”、“哇啦哇啦”などのように、3音節、4音節の語まで、全ての語は、直接に音を真似して言語化した語と考えられ、擬音語と判断できる。

しかし、5.1 で指摘したように、中国語オノマトペには(25a)のような擬音語だけではなく、(25b)のような音を立てながら様子を表す擬態語もあれば、(25c)のような音を立てずに様子を表す擬態語もある。そのため、音を真似した語であるか否かという基準だけにより、「擬音語」「擬音語・擬態語」「擬態語」という3つのグループに区別がつけられないと考えられる。これを解決するため、語形の特徴も判断基準に入れて考えておきたい。本章の2節で検討した結果から、反復という語構成法は、中国語オノマトペの語構成の代表的な語構成法であることがわかった。そのため、語形上には反復形をしていることも、中国語オノマトペを判断する時に重要な基準の1つであると考えられる。

中国語オノマトペの反復形のバリエーションについて検討した時に、ABB と AABB、ABAB などのような反復類型が見られている。しかし、中国語の形容詞にも、ABB 型や AABB 型が数多く存在しているため、反復形をしているオノマトペと形容詞との区別は必要となる。それらを区別する際に、文法的用法から考えると区別しやすい。

- (26) ABB 型 a. 笑咪咪 哭唧唧 泪汪汪
 b. 黑乎乎 绿油油 慢吞吞
- (27) AABB 型 a. 滴滴答答 嘻嘻哈哈 叮叮当当
 b. 慌慌张张 热热闹闹 认认真真

(26) は ABB 型の語の例であるが、(26a) は ABB 型のオノマトペであるのに対し、(26b) は ABB 型の形容詞である。(26a) で挙げられた反復形のオノマトペを見ると、“眯眯”は目を細めている形を表す語であるが、“笑眯眯”になると、目を細めて笑う様子という意味になり、“眯眯”は“笑”を修飾している部分となっている。“唧唧”は泣き声を表す語であるが、“哭唧唧”になると、“唧唧”という声を出しながら泣く様子を表す語になり、“唧唧”は“哭”を修飾する働きをすることになっている。また、“泪汪汪”も同様に、“汪汪”だけであれば、「水がいっぱい溜まっている」という意味であるが、“泪汪汪”になると、“汪汪”が“泪”を修飾することとなってきて、涙がいっぱい溜まっている様子を表すようになってくる。すなわち、ABB 型のオノマトペは、A の部分と BB の部分が各自の意味を持つ語であり、基本的には A+BB という分解ができる。A の部分と BB の部分の関係をいえば、本来意味を持っている BB の部分が、A の部分の修飾成分となってくる傾向が見られる。そのため、“眯眯地笑” “唧唧地哭” “汪汪的泪”のような言い換えができる。

それに対し、(26b) で挙げられた ABB 型の形容詞の場合、A の部分と BB の部分を分けて見ると、独立した BB の部分の“乎乎” “油油”は意味がなくなってしまう。そのため、「ABB」形容詞の BB の部分は、前の A の部分によって意味が付加されることとなり、A に依存していると考えられる。例えば、“乎乎”は、“黑乎乎”とも言えるし、“热乎乎”とも言える。そして、“黑”と組み合わせるか“热”と組み合わせるかによって意味は全く異なる。つまり、ABB 型の形容詞は、ABB 型のオノマトペと違い、BB の部分の意味は A の意味に強く影響されおり、A の部分の付属部分と考えられる。そのため、ABB 型の形容詞は、ABB 型のオノマトペのように、“*乎乎的黒” “*油油的绿” “*吞吞地慢”のような言い換えはしにくいと考えられる。

さらに、(27) で挙げられた AABB 型の語を見ると、(27a) は AABB 型のオノマトペであるのに対し、(27b) は AABB 型の形容詞である。(27a) の“滴滴答答”は“滴答”から一回反復した語と考えられる。2つの語とも水滴が落ちる時の音や様子を表す語であるが、その反復によって、水滴が落ちるスピードが

早くなってくる。“嘻嘻哈哈”は“嘻嘻”と“哈哈”の組み合わせと考えられる。“嘻嘻”と“哈哈”は笑い声を表す語であるが、“嘻嘻哈哈”になると、笑い声を表すこともできれば、非常に不真面目な様子や態度を表すこともできる。“叮叮当当”も同様に、“叮当”より頻度が高くなってきて、意味変化が起こっていることが確認できる。すなわち、AABB 型のオノマトペは、その語基と考える AB や AA と BB のような語は、本来には各自の語意を持っており、それらを反復することによって意味変化が起こっている。

それに対し、(27b) で挙げられた反復形の形容詞を見ると、“慌慌张张”“热热闹闹”“认认真真”は、その語基と思われる“慌张”“热闹”“认真”の一回反復と考えられる。“慌张”“热闹”“认真”は元々形容詞であり、反復することは強調の意味を表すが、反復した AABB 型はその語基の AB 型と同様に、形容詞であることに変わりなく、意味上にも変化が見られない。

以上のように、中国語オノマトペを判断する時には、音を真似するという音の面と、反復形をしているという形の面から判断できる。さらに、オノマトペ反復形と一般語彙の反復形を区別する際には、意味の面から区別できる。ABB 型のオノマトペは、A と BB の部分は分けても各自の意味を持っている語であり、お互い独立性が高い語と考えられる。さらに、BB は A を修飾していると思われる。それに対し、ABB 型の形容詞は、BB の独立性は低くて A に依存している傾向が見られる。BB が A を修飾していると考えにくい。AABB 型の場合、AABB 型のオノマトペは、その語基から反復して構成された語と考えられ、反復することによって意味的变化が起こっている。それに対し、AABB 型の形容詞は、語基から反復しても、意味的变化が起こらない。

6 まとめ

本章は日中オノマトペにおけるシステム上の相違点を検討した。主に音韻、形態、文法的用法から、日中両言語のオノマトペが現れる特徴を検討した。それ

らの特徴に基づき、日本語における擬音語・擬態語の再分類と、中国語オノマトペの再分類を試みた。

音韻上から見ると、日本語のオノマトペは母音の対立と子音の対立で、オノマトペのペアが作りやすいのに対し、中国語においては母音も子音もバリエーションが数多くあるもののオノマトペにおける母音・子音の対立は見られにくいと言える。すなわち、子音・母音の対立でオノマトペのペアを作りやすいことは日本語オノマトペにおけるシステムティックな特徴の1つであると考えられるが、中国語では特に見られない。日中オノマトペにこの相違が生じるのは、日本語と中国語との音韻上には大きな差があるということに起因している。そのほかに、オノマトペの表記化のプロセスにおいて、中国語が日本語より、漢字化するということが多いため、オノマトペの意味へ影響を与える要素は、中国語が日本語より多いことももう1つの原因と考えられる。

語形上から見ると、日本語の語形のバリエーションが、中国語より多くみられる。特に日本語の擬態語には、反復形以外に、「～っ」型と「～り」型も見られ、バリエーションが多いと言える。一方、反復という語構成法は、擬音語においても、擬態語においても、最も代表的な語構成方法として使用されている点は、日中両言語とも見られた共通点である。また、日中両言語のオノマトペにおいて、反復形が多く存在しているが、日本語の反復形は非反復形とペアになっていることが広く見られ、「生産的な反復形」と考えられるのに対し、中国語の反復形は非反復形との関連性が薄くて、ペアになりにくいいため、語彙内に限られている「語彙的な反復形」と言える。

さらに、それらの特徴に基づき、日本語の擬音語と擬態語の再分類を行った。従来の分類と異なり、「擬音語・擬態語」グループは、さらに音を真似する働きを中心としている「擬音語・擬態語」と、音をそのまま真似するわけではなく、抽象化された「擬音語・擬態語」とに再分類する必要性があることを示した。すなわち、日本語オノマトペには、「擬音語」「擬音語中心の擬音語・擬態語」「擬態語中心の擬音語・擬態語」「擬態語」という4種類に分類する必要がある。その4種類の区別する際には、「音」「様子」の強弱と、「引用用法」

への適応性の高低との4つの要素を合わせて判断すれば、より明確になっていると考えられる。

最後に、中国語のオノマトペにも擬態語をその範囲に入れる必要があるという考えを持ち、中国語オノマトペの再分類を試みた。従来の中国語オノマトペ研究は、擬音語だけを中国語象声詞に含めていたが、本論文は中国語オノマトペにも擬態語を入れる必要があることを指摘した。さらに、中国語の擬態語には、音と様子両方を表す擬態語だけではなく、様子だけを表す擬態語も存在していることを明らかにした。中国語オノマトペを判断する時には、音を真似するという音の面と、反復形をしているという形の面という基準のほか、オノマトペの反復形の特徴も合わせて判断する必要があると述べた。

第6章 オノマトペに関する日中翻訳

第3章と第4章では日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペと中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペについてそれぞれの使用実態の考察を行った。日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペの語数は中国語と比べて多くなっており、用法においても異なっていることが確認できた。本章では、辞書を利用して対訳する時に日本語と中国語の間にどのような相違点があるかという点について、特に日本語よりもオノマトペの語数が少ない中国語では、どのようにオノマトペを訳しているのかという点に着眼して考察する。

1 日中・中日辞書の意味解釈から見た「笑い」に関するオノマトペの翻訳

本節では、日中・中日辞書を利用して、両言語がお互いにどのように翻訳されるのかという点と、翻訳された後に意味上の差異が生じたかという点について考察する。日本語のオノマトペの中国語翻訳を見るため、『日中辞典』（小学館）と『日漢大辞典』（上海訳文出版社・講談社）との二冊を選んで各語を調べた（表6-1）。

表 6-1 日本語における「笑い」に関するオノマトペの中国語翻訳

日本語の オノマト ペ	日中辞典（小学館）	日漢大辞典（講談社）
にこにこ	● <u>笑嘻嘻</u> ， <u>笑眯眯</u> ， <u>笑吟吟</u> ， <u>微微笑</u> 。	● <u>笑嘻嘻</u> 。高兴的微笑状。
にやにや	默默地笑。	暗笑，冷笑，嗤笑，不出声地在脸上浮现出笑容。或冷冷地、另有含意似的独自发笑。
にんまり	得意的微笑。	（如愿以偿之后）嘴角浮现出满意的微笑状。
にたにた	狰狞的呆笑貌，龇牙咧嘴地笑，傻笑，冷笑。	狞笑，不出声的、脸色令人恐惧的笑。
にやり	一笑。	微笑。冷笑。不出声地在脸上浮现出笑容貌。
くすくす	●窃笑，你小，小声（地笑）， <u>哧哧</u> （地笑）， <u>嘻嘻</u> （地笑）	（副）窃笑貌。偷笑貌。
けらけら	● <u>咯咯的</u>	●哈哈大笑
げらげら	● <u>哈哈大笑</u>	●大笑不止。笑得前仰后合。
からから	●（笑い声） <u>哈哈</u> 。	男性高声大笑貌。
ころころ	●（笑い声）格格	●（笑声） <u>朗朗</u>
へらへら	●（しまりなく笑うさま） <u>嘿嘿地傻笑</u>	傻笑，憨笑。
ははは	×	● <u>哈哈大笑</u> （声）。因愉快或感到奇怪而大笑的声音。
ひひひ	×	×
ふふふ	×	×
へへへ	● <u>嘿嘿</u>	×
ほほほ	● <u>吃吃</u> ， <u>呵呵</u>	×

第 3 章で調査した結果(表 3-1)を参考にし、日本語の「笑い」に関するオノマトペの意味を日中辞書で調べた。調べる際、「ぷっ」「にこっ」などのように 2 つの辞典で見出し語として立項されていない語は省略した。また、「擬音語」

の翻訳も見るため、代表的なハ行の擬音語を選んで、「ははは」「ひひひ」「ふふふ」「へへへ」「ほほほ」の形で意味を調べた。ここではハ行の5つの擬音語を1つの組として観察するため、「ひひひ」、「ふふふ」のように2つの辞典で立項されていない語も表の中に含めてある。また、観察の便宜を図るため、「擬態語」と「擬音語」とを分けて表6-1を作成した。

次に、中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味を調べるために、『中日辞典』（小学館）と『中日大辞典』（大修館）の二冊を選んで、研究対象である中国語オノマトペを調べた(表6-2)。

表6-2 中国語における「笑い」に関するオノマトペの日本語翻訳

中国語のオノマトペ	中日辞典（小学館）	中日大辞典（大修館）
哈哈	(口を大きく開けて笑う声) <u>ははは、わはは。</u>	● <u>ハツハツ</u> ：笑い声。
呵呵	●(口を半開きにして笑う声) <u>ほほほ。</u>	● <u>ハハ、ホホ</u> ：笑い声。
嘿嘿	●(いやみのある笑い声) <u>へへへ</u> <u>つへつ</u>	● <u>へへへ</u> 。
嘻嘻	●(笑い興じるさま) <u>ふっふ</u> <u>っ</u>	● <u>にこにこ</u> 、くすくす
咯咯	●(笑い声) <u>くすくす、けらけら</u>	● <u>ゲラゲラ</u> ：笑う声。
哧哧	●(吹き出すような笑い声) <u>ぷっ、くすっ</u>	● <u>ホホホ、フフフ</u> ：遠慮がちな、控え目な笑い
嘎嘎	●(大きな笑い声) <u>がらがら</u>	● <u>カラカラ</u> (と笑う)
噗嗤	●(吹き出すような笑い声) <u>ぷっ</u>	● <u>クスッと</u> (笑う)
嚅嚅	●(笑い声) <u>ハハハ</u>	(笑い声) ほほほ。
笑嘻嘻	● <u>にこにこ</u> しているさま。	● <u>にこにこ</u> 笑うさま。
笑眯眯	●(目を細めて) <u>にこにこ</u> するさま。目を細くして笑うさま。	● <u>にこにこ</u> するさま。微笑するさま。

笑吟吟	● <u>にこにこ</u> と笑うさま。	●笑うさま。 <u>にこにこ</u> する。
笑盈盈	●にこやかである。 <u>にこにこ</u> してうれしそうな（顔つき）	●こぼれるように笑いをたたえているさま。にこやかにしていること。
笑呵呵	● <u>にこにこ</u> 笑うさま。	●思いがこみあげてわらうさま。
笑哈哈	声を出して笑うさま。愉快そうに笑うさま。	● <u>ハハハ</u> と笑う。大笑いする。
笑微微	×	×
笑咧咧	● <u>にこっ</u> とほほ笑むさま。	×
笑悠悠	×	×
笑嘿嘿	×	×

表 6-1 と表 6-2 を見ると、「笑い」に関するオノマトペに関する日中対訳には、以下のような相違点が見られる。

- (1) a. 日本語の「笑い」に関するオノマトペの中国語訳について、擬態語は説明的な文で解釈されることが多く、ハ行で始まる代表的な「笑い声」と思われる擬音語は、訳されないことが多い。
- b. 日中オノマトペの意味は重視される要素が異なっている。日本語の「笑い」に関するオノマトペは笑う時に声の有無を重視しているのに対し、中国語の「笑い」に関するオノマトペは顔の様子を重視していると言える。
- c. 日本語はイメージ喚起を明確にしているのに対し、中国語はイメージ喚起が曖昧である。

(1a)について詳しく説明すると、表 6-1 からわかるように、「にこ」系「にた」系などの擬態語は、“暗笑，冷笑，嗤笑，不出声地在脸上浮现出笑容。或冷冷地、另有含意似的独自发笑” “狞笑，不出声的、脸色令人恐惧的笑”のような

詳細な説明文で日本語のオノマトペを解釈している。これは、中国語で当該の日本語の「笑い」に関するオノマトペの意味に当てはまる語がないためであると考えられる。

また、日本語で代表的な笑い声を表すオノマトペと思われる「ハ行」の擬音語は、音声を変えてイメージ喚起(例：マイナスイメージ・プラスイメージ；女性に使用される・男性に使用される)ができるが、それについての中国語訳は、殆ど見られなかった。そこから、日本語のオノマトペの意味は音韻と深く関連しており、音韻の変化で多様な意味の表し分けができるのに対し、中国語のオノマトペにはそのような機能はないと言える。

(1b)で挙げた重視される要素について、日本語では「にこ」系「にた」系のように声を出さないで笑う様子を表す語もあれば、「げらげら」「くすくす」のように声を出しながら笑う様子を表す語もある。つまり、日本語の「笑い」に関するオノマトペは、声の有無が明確に判断できる。一方で、中国語の場合は、音声の有無より、顔の様子の方が重視される要素と見られる。例えば、中国語に“笑咪咪”“笑吟吟”“笑嘻嘻”などの「笑い」に関するオノマトペがある。これらの語は目や口の形を強調した言い方である。つまり、顔の様子は中国語の「笑い」に関するオノマトペで重視される要素だと言える。

(1c)のイメージ喚起について、(1a)でも少し触れたように、日本語ではハ行音で始まる笑い声の表現は、それぞれのイメージ喚起ができる。また、「にこにこ」はプラスのイメージを持つが、「にたにた」「にやにや」はマイナスのイメージを持つ。このようなイメージ喚起は、日本語における「笑い」に関するオノマトペでは明確であるが、中国語では明確でない。“嘿嘿”を例としてみると、表6-2から、“嘿嘿”は「(嫌味のある笑い声)へっへっ」「へへへ」に訳され、マイナスなイメージを持つ語であるはずだが、実際の中国語の用例を見ると、(2)(3)のような用例が見られる。

(2) 他齜着一口结实的黄牙无耻地笑起来：“嘿嘿，嘿嘿”（“无耻地”——
恥知らずに（筆者訳））

(3) “嘿嘿……” 马克思又发出洋溢着睿智的笑声。（“洋溢着睿智的” —— 知恵が溢れそうな(筆者訳)）

(2)の“无耻地”と(3)の“洋溢着睿智的”の意味から、“嘿嘿”は、(2)のようなマイナスなイメージで用いられる場合もあるが、(3)のようなプラスなイメージで用いられる場合もあることが言える。中国語の「笑い」に関するオノマトペのイメージ喚起は、日本語と異なり明確でなく、語自体よりも文脈から判断することが多い。すなわち、中国語の「笑い」に関するオノマトペのイメージ喚起は、明確でない。

以上のように、日本語と中国語における「笑い」に関するオノマトペは音声の有無、イメージ喚起、重視される側面などの要素において相違があると言える。日本語の「笑い」に関するオノマトペは笑い声や笑う様子を表現するだけでなく、その意味には音声の有無、イメージ喚起などの要素を数多く含んでいるため、心情・感情など内面的な意味も含まれる。そのような語を使用することにより、共感を求める語と考えられる。それに対して、中国語の「笑い」に関するオノマトペは声の有無、イメージ喚起の要素について、明確でないところが多い。内面的な意味の提示という機能は日本語ほど強くないと言える。

2 オノマトペの日中対応関係

前節では日中の「笑い」に関するオノマトペの意味上の相違点を見た。本節では、それらの相違点があることを踏まえ、日中の「笑い」に関するオノマトペは対訳した場合に対応する意味で用いられているかを検討していく。

観察上の便宜のため、表 6-1 と表 6-2 で、語釈に対応するオノマトペが記載されている場合に「●」を付けた。表 6-1 と表 6-2 を比べると、以下の相違点が見られる。

- (4)a. 中国語の「笑い」に関するオノマトペの日本語翻訳では、日本語のオノマトペで直接対応できることが多いのに対し、日本語の「笑い」に関するオノマトペの中国語訳では、中国語のオノマトペで直接対応できることが少ない。さらに、表 6-1 からわかるように、日本語のオノマトペの中国語翻訳は説明文で述べられている場合が多い。
- b. 直接対応関係があるとされていても、日中オノマトペの間には、意味上のずれがあると見られる。

まず、(4a)について詳しく論じる。表 6-1 と表 6-2 で「●」を付けた部分を見ると、表 6-2 の日本語で中国語を訳す場合、日本語の「笑い」に関するオノマトペで直接対応できる語が多いのに対し、表 6-1 で中国語の「笑い」に関するオノマトペで日本語の「笑い」に関するオノマトペを訳すことは少ない。日本語の「笑い」に関するオノマトペの意味を解釈する時、中国語の「笑い」に関するオノマトペで直接対応させる代わりに、“暗笑，冷笑，嗤笑，不出声地在脸上浮现出笑容。或冷冷地、另有含意似的独自发笑”のように、笑う様子や笑いに含む内面的な意味・感情などを説明的な文で述べることが多く見られた。説明文で日本語の「笑い」に関するオノマトペの意味を解釈することから、日本語の「笑い」に関するオノマトペの表す意味内容が、中国語よりも広いと言える。すなわち、中国語の「笑い」に関するオノマトペに、日本語の「笑い」に関するオノマトペに当てはまる語がないことから、中国語のオノマトペは日本語のオノマトペのように、数が多く、意味分類も詳しくされている語群ではないと考えられる。

逆に、中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味解釈の多くは日本語の「笑い」に関するオノマトペに当てはまっており、対応関係が見られた。しかし、日本語のオノマトペが中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味を正確に表現できているわけではない。(4b)で述べたように、対応関係があるとしても、実際に対応する日中「笑い」に関するオノマトペの意味をそれぞれ考えると、両者の間にずれが認められる場合もある。

表 6-2 の日本語翻訳から明らかなように、「にこにこ」を用いて中国語の「笑い」に関するオノマトペを解釈する場合は、複数ある。“嘻嘻；笑嘻嘻；笑咪咪；笑吟吟；笑盈盈；笑呵呵”はすべて「にこにこ」と訳されていることから、日本語はそれらの意味区別ができない可能性が高い。また、5.2 で述べたように、日中オノマトペは重視される要素やイメージ喚起の明確性などの面で異なっている。そのため、単に1語1語を対応させるだけでは、意味上のずれが生じやすいと思われる。例を挙げると、以下のような意味上のずれが見られる。

(5) 【日本語→中国語】の場合(表 6-1 から)

- a. にこにこ：笑咪咪；笑嘻嘻
- b. にやにや：不出声地；另有含意的
にたにた：不出声的；令人恐惧的
- c. けらけら：哈哈；大笑
からから：哈哈；大笑貌
- d. へらへら：嘿嘿地傻笑；傻笑；憨笑

(6) 【中国語→日本語】の場合(表 6-2 から)

- a. 呵呵：ほほほ
- b. 嘻嘻：ふっふっ；にこにこ；くすくす
咯咯：けらけら；げらげら；くすくす
- c. 嚯嚯：ハハハ；ほほほ
- d. 笑嘻嘻：にこにこ
笑咪咪：にこにこ、微笑するさま

(5)は日本語から中国語へ訳される場合にずれが生じた例である。(5a)の「にこにこ」は“笑咪咪；笑嘻嘻”に対応しているが、“笑嘻嘻”は声を出しても構わない意味を持つ語であり、「にこにこ」が持つ「声を出さない」という意味は感じられなくなっている。(5b)の「にやにや」「にたにた」の中国語訳は両方とも「声を出さない」「マイナスなイメージ」という意味を持つ語で表さ

れており、その訳だけからは、「にやにや」と「にこにこ」の区別ができない。(5c)も(5b)と同様に、中国語訳は殆ど同じ語を使っており、意味の区別ができない。さらに、“哈哈”は「ははは」と対応する語だとすると、「けらけら」「からから」と「ははは」の区別は何かという点が問題になる。(5d)の「へらへら」は“嘿嘿”に訳されているが、(2)(3)でも指摘したように、中国語で“嘿嘿”は必ずしもマイナスのイメージで用いられる語ではない。また、中国語で“傻笑；憨笑”は「無邪気に笑う様子」のイメージが強い語と言える。ここで、“嘿嘿” “傻笑；憨笑”という語によって「へらへら」の意味を理解することは、困難であると言える。

次に、(6)は中国語から日本語へ訳される場合に意味のずれが生じた例である。(6a)の“呵呵”は「ほほほ」に対応する。日本語で「ほほほ」は女性的な笑い声を表す語であるが、中国語の“呵呵”は女性だけに用いられる語ではない。(6b)の日本語訳を見ると、性質が全く逆の日本語の「笑い」に関するオノマトペによって中国語の「笑い」に関するオノマトペが訳されていると言える。例えば、“嘻嘻”の日本語訳には、声を出さずに笑う様子を表す「にこにこ」もあれば、声を出している「くすくす」もある。“咯咯”の日本語訳も同様に、高い声で笑うさまを表す「けらけら」「げらげら」もあれば、しのび笑いの意味を持つ「くすくす」もある。それらの日本語訳を見るだけで中国語の“嘻嘻” “咯咯”の意味を把握することは難しい。(6c)の“嚯嚯”も「ハハハ」「ほほほ」に訳されており、それを高く笑う声と理解すれば良いか、控えめな笑う声で理解すれば良いかが混乱しやすい。(6d)の“笑嘻嘻”は声を出しても良いイメージであるが、「にこにこ」に訳される。その一方、“笑眯眯”は「目を細める」ということを強調している語であるが、その意味を含まない「にこにこ」と対応して訳されるのは、意味の上でのずれが生じていると推察できる。

以上の(5)と(6)に挙げたように、日中オノマトペの対訳にはそれぞれの語に対応関係があるとしても、声の有無、イメージ喚起などの面から、意味の上でのずれが生じやすい。「笑い」について、日本語のオノマトペと中国語のオノ

マトペが含む意味内容や、重視される側面などが異なっているため、訳文や対応するオノマトペだけでお互いに意味を理解するのは、困難である。

ここまで見てきたように辞書の記述から、日中オノマトペの対訳は、オノマトペで対応できることもあれば、対応できない場合もある。さらに、オノマトペ同士が対応する場合にも、必ずしも他の語と明確に意味内容を区別できるような訳になっていないことがあると言える。

また、「笑い」に関するオノマトペについて、日本語では共感を求める語として使用され、内面的な側面に注目しているが、中国語では「笑う」という動作に注目し、内面的な要素が含まれる場合もある。しかし、その感情的な意味は文脈から判断することが多く、日本語のように明確でない。そのため、日中オノマトペの「笑い」に関するオノマトペの対照研究は、それぞれのオノマトペの意味素性を分析して、それらの特徴を把握した上で行わなければならない。従来のような、単に語と語を意味的に近いもので結びつけるという対照研究は、「笑い」に関するオノマトペのような感情を表現する語には適切ではないと言える。

3 日中・中日辞書の意味解釈から見た「泣き」に関するオノマトペの翻訳

1節では、日中・中日辞書を利用して、「笑い」を中心に、日中両言語がお互いにどのように翻訳されるのかという点と、翻訳された後に意味上に差異が生じたかという点について考察した。本節は、「泣き」を中心に、日中オノマトペの辞書での翻訳においては如何なる相違があるかについて、検討を試みる。

日本語のオノマトペの中国語翻訳を見るため、『日中辞典』（小学館）と『日漢大辞典』（上海訳文出版社・講談社）との二冊を選んで各語を調べた（表 6-3）。

表 6-3 日本語における「泣き」に関するオノマトペの中国語翻訳

日本語のオノマトペ	日中辞典（小学館）	日漢大辞典（講談社）
しくしく	●抽抽嗒嗒	抽搭。抽噎。抽泣。
めそめそ	（妇孺的）低声哭泣哭泣。啜泣。抽泣。	低声抽泣状。 动不动就哭。爱哭。
ぽろぽろ	●扑簌	●扑簌簌。纷纷。眼泪等粒状物散落貌。
ほろほろ	●簌簌，扑簌簌	×
ぼろぼろ	●扑簌扑簌，哩哩啦啦	●滴滴答答。扑簌簌。眼泪等粒状物散落貌。
ぼろり	●吧嗒一下	×
ほろり		×
さめざめ	●潜潜，潜然，凄然	●潜潜。潜然。不断流泪。悄悄落泪状。
はらはら	●扑簌簌	静静地连续落下状。
うるうる	×	×
おろおろ	坐立不安。惶恐不安。惊慌失措。	●呜咽哭泣貌。抽抽嗒嗒地（哭）
おいおい	●呜呜，哇哇	●呜呜。哇哇。放声哭泣状。
おぎゃー おぎゃー	●呱呱	●哇。哇哇。婴儿的啼哭声。
わっ	●哇	●哇
わんわん	●哇哇	×
ぎゃー	×	●呱呱。哇啦哇啦。吵闹时喊出的声音，或哭喊、吵闹的样子。
わーわー	●哇哇（地）哭	●哇哇。大声哭。
あーん	×	×
ひーひー	●（哭声）嗯嗯，啊啊	（婴儿等的）急哭声。
おうおう	×	×

第4章で調査した結果(表4-1)を参考にし、日本語の「泣き」に関するオノマトペのうち、使用率が上位となっている20語を選び、日中辞書で調べた。また、観察上の便宜のため、「擬態語」と「擬音語」に分けて表6-3を作成した。

次に、中国語の「泣き」に関するオノマトペの意味を調べる際に、第4章の表4-2の調査結果を参照し、使用率が上位となっている18語を『中日辞典』(小学館)と『中日大辞典』(大修館)での語釈を調べた。その結果は、表6-4のようにまとめられる。

表6-4 中国語における「泣き」に関するオノマトペの日本語翻訳

中国語のオノマトペ	中日辞典(小学館)	中日大辞典(大修館)
呜呜	●(人の泣き声) おんおん、うう	●(泣き声) うー、おいおい。
呱呱	●(赤ん坊の泣き声) おぎゃあおぎゃあ。	●(嬰兒の泣き声) おぎゃあ
哇哇	●(子どもの泣き声) わあわあ。	●(赤ん坊の泣き声) わーわー、かーかー
哇	●(泣き声) わあ。	●(泣き声) わっ、わあ。
嚶嚶	低くかすかな人の声。 (嚶嚶啜泣: しくしくとすすり泣く。)	●さめざめ泣く声。
嗷嗷	●(痛みや苦しみなどのためにあげる悲鳴や泣き声) ううんううん、ひいひい、わあわあ。	やかましく騒ぐ声。
哭哭啼啼	ひっきりなしに泣く。	いつまでも泣くさま。
啊啊	×	×
呜呜咽咽	×	●むせび泣く、すすり泣く、しくしく泣く。
抽抽噎噎	× (抽噎: すすり泣く)	しゃくりあげるさま。

抽抽嗒嗒	× (抽嗒: すずり泣く)	× (抽嗒: すずり泣く、しゃくり泣く、泣きじゃくる)
扑簌簌	●涙がぼろぼろ落ちるさま。	●涙がぼろぼろ落ちるさま。
潜潜	<書>涙を流すさま。	●さめざめ
泪汪汪	目に涙をいっぱいためているさま。	目に涙をたたえているさま。
泪盈盈	×	×
稀里哗啦	● (雨の音; 建物が崩れる音) ざあざあ、ざらざら、がらがら	● (雨や風、また物が崩れたり、壊れたりする時の音) ざあざあ、がらがら、がたがた
哗哗	雨や水の大きな音。	水が勢いよく溢れ出たり、硬い物がぶつかったりする音。
哭咧咧	×	×

表 6-3 と表 6-4 を見ると、「泣き」に関するオノマトペに関する日中翻訳には、以下のような問題点が見られる。

まず、オノマトペの日中翻訳は、お互いにオノマトペで対応した適切な語釈となっていないことが明らかになった。「泣き」に関する日本語の中国語翻訳を見ると、擬態語は“扑簌簌”に訳される場合が多く、擬音語は“哇哇”という訳に集中していることがわかる。これに対し、「泣き」に関する中国語の日本語翻訳を見ると、擬態語は「ぼろぼろ」に訳される場合以外に、オノマトペで対応できない(説明文で解釈する)場合または語釈がない場合も多く存在している。

・【日本語→中国語】の場合 (表 6-3 から)

ぼろぼろ、ほろほろ、ぼろぼろ、はらはら→扑簌簌

おいおい、おぎゃあおぎゃあ、わっ、わんわん、わあわあ→哇 哇哇

・【中国語→日本語】の場合 (表 6-4 から)

表 6-3 では、日本語オノマトペの「ぽろぽろ」「ほろほろ」「ぼろぼろ」「はらはら」は、全て中国語オノマトペの“扑簌簌”で訳されている。第 5 章で論述したように、日本語オノマトペは子音の清濁変化を通して意味の変化が実現できる。そのため、「ほろほろ」「ぼろぼろ」「ぽろぽろ」は、同じく「ほろ」系の「泣き」に関するオノマトペであるが、涙の落ちる頻度やその粒の大きさなどの意味的内容に区別が付けられていると考えられる。しかし、涙の落ちる様子を表す語である「ぽろぽろ」「ほろほろ」「ぼろぼろ」「はらはら」の中国語訳は、全て“扑簌簌”になっていることが表 6-3 で確認できた。その中国語訳だけによると、これらの日本語オノマトペの意味上の区別は容易ではない。日中辞書におけるオノマトペの翻訳は、確実に訳されているとは言えないことが、その問題の 1 つと考えられる。

次に、「号泣」を表現する際に、日中両言語には同様に/a/（「わあわあ」、「哇哇」（wawa）など）で発音する擬音語が使用されていることが確認できた。一方、(7) の用例を見ると、日本語には/a/で発音する擬音語以外に、「おいおい」や「おうおう」などのように/o/で発音するオノマトペも大きい泣き声を表現する擬音語として用いられていることも観察できる。しかし、表 6-3 を参照してこれらの中国語翻訳を確認すると、「おうおう」は翻訳なしとなっており、「おいおい」は中国語で大きな泣き声を表す“哇哇”と、控えめな泣き声を表す“呜呜”という泣き声のレベルが違う 2 つの擬音語に訳されている。これらの翻訳により、日本語オノマトペの意味を正確に理解することは容易ではないと推測できる。

- (7) a. 怒りを叩きつけるように云った時、看守に衿がみをひっ掴まれ、小柄で貧相な男が、おいおい泣きながらぶち込まれて来た。
- b. 「仕事先からひっぱられ、妻や子供たちはどんなに心配を…、明日か

らの生活も困るし…」男はまたおいおいと、泣いた。

山崎豊子『二つの祖国』

c. そのあと、母さんはオレを抱きしめておいおい泣いた。

久和まり『Stay gold』

d. ワライダケで笑いながら死んだのだから、幸せだったかもしれないと
いいながら、おじいさんはおうおうと泣いて、それからていねいにお
ばあさんをほうむった。

橋爪和子『ぼくはひとりぼっちじゃない』

さらに、(8)で挙げられている“哇哇”“嗷嗷”“稀里哗啦”は、全て中国語で号泣を表現する際によく使われるオノマトペである。中国語は日本語と異なり、大きな泣き声は/a/ (哇哇 wawa) や/ao/ (嗷嗷 aoao) などのような開口度が高い母音で表現することに偏っている。しかし、これらの日本語翻訳を表6-4で確認すると、完全に翻訳されていない部分がある。“哇哇”は赤ん坊の泣き声として訳されているが、(8a, b)を見ると、中国語における“哇哇”は赤ん坊にだけでなく、大人に使用されているケースも広く見られる。また、“嗷嗷”は、痛みを感じる時の叫ぶ声として用いる場合もあるが、(8c, d)で示すように、ただ大きな泣き声として使用される場合も数多く存在している。表6-4で示したように、“嗷嗷”の日本語訳「うんうん」「ひいひい」「わあわあ」からその意味を理解しようとしても、全く違うレベルの泣き声を表現している日本語オノマトペで解釈されているため、その意味の理解と使い分けがより困難になる。

(8) a. 个别地方在发生破坏性地震后，当地干部看到周围一片废墟，有的不知所措，竟坐在地上哇哇大哭，直待前往视察慰问的上级领导提醒指点，才开始救灾行动。

(破壊的な地震がいくつかの場所で発生した後、地元の幹部は周囲の廃墟を見て、地面に座ってわあわあと泣いて途方に暮れ、視察に行った上

層部の指導者が彼らに思い出させるまで災害救援活動を開始しませんでした。-筆者訳)

- b. 当单云田由于恐慌，心痛地哇哇大哭上气不接下气的时候，她感到特别痛快：“现在你害怕了吧？都是你闯的祸，看你还敢再骂我吗？”

(单雲田がパニックになってわあわあと泣いて息が切れていたとき、彼女は非常にスッキリと感じて、「今更怖いですか？ それはすべてあなたのせいですよ、もう二度と私を叱ることができないでしょう。」と言った。-筆者訳)

- c. 蓬头垢面的韦小纳扑到大汗淋漓的杨再勇怀里，嗷嗷地哭了。她与黄丽英又回到了福利院。

(髪がボサボサな韋小納は、汗を滴らせている楊再勇の腕の中に身を投げ出しておうおうと泣いた。彼女と黄麗英は孤児院に戻りました。-筆者訳)

- d. “你他娘的别装了。”孙有元干脆嗷嗷大哭，声音响亮地叫道：“这碗打破了，我儿子以后吃什么呀？”

(「あなたはふりをしないでください。」孫有元はおうおうと泣いて、大声で叫びました：「このボウルがもし壊れたら、息子は将来何で食べていくんですか？」-筆者訳)

- e. 海萍正哭得稀里哗啦，一边哭还一边跟没头苍蝇一样在翻电话号码本，脑子完全不听使唤，根本不知道自己到底想干什么。

(海萍は泣きながら、どうしたら良いか分からなくなって電話帳をめくっていましたが、実際には頭が混乱して、何がしたいのかもわからない状態でした。-筆者訳)

- f. 当父亲把通知书送到我手里的时候，我说不清是什么感觉，只记得我当时哭得稀里哗啦。

(父に通知書を届けられたとき、私はどのような気持ちだったのかわかりませんでした。一生懸命泣いていたことを思い出しました。-筆者訳)

なお、(8e, f) で挙げられた“稀里哗啦”は、元々大雨や水の量が多く流れる場合に使う擬音語であるが、涙が大量にこぼれることと共通しているところがあるため、ここでは激しい泣き方を表現するオノマトペとしても多く使用され、オノマトペの拡張的な用法と考えられるが、表 6-4 の日本語訳では、泣き方としての拡張的な用法までは言及していない。表 6-4 では“稀里哗啦”は「ざあざあ」などのような雨の音を表現する語に訳されているが、実際の中国語における“稀里哗啦”の使用は雨だけではなく、涙が大量に落ちてくる状態に転用されることも認められる。(8e, f) はその転用となっているが、辞書に載せた「ざあざあ」などのままに翻訳してみると、明らかな誤訳となるため、この日本語訳はオノマトペを省略して翻訳したほうが適切と考えられる。

以上、日中辞書で「泣き」に関するオノマトペの翻訳内容に現れた問題について述べた。「泣き」に関するオノマトペも、「笑い」に関するオノマトペと同様に、日中翻訳にはオノマトペで対応関係がある場合ない場合もある。対応関係があるとしても、各言語体系において/a//u//o/などの発音とオノマトペのイメージ喚起との関係に相違があるため、日中・中日辞書の翻訳においても、オノマトペの意味内容を十分に訳しきれていない部分があると考えられる。

4 日中オノマトペの意味的拡張な用法

本章の 1 節から 3 節までは日中オノマトペの対訳における問題点について論じた。日中・中日辞書の解釈から、日中オノマトペの対訳は辞書レベルにおいてもズレが存在していることがわかった。その原因として、各言語体系における発音とイメージ喚起との関係や、オノマトペの拡張的な用法などが考えられる。本節は、日中オノマトペの意味的拡張用法について、「笑い」に関するオノマトペを例として挙げながら検討を試みる。

4.1 日本語側

言葉の意味は時代の流れと共に変化、拡張していくものであると言われている。認知言語学には「意味拡張(semantic extension)」という概念があり、その定義は「ある語において、従来とは異なる新たな意味が派生すること」と述べられている(松本 2003)。松本(2003)であげられた例として、「ニワトリがタマゴを産む」の「タマゴ」は基本的な意味、いわゆるプロトタイプの意味であり、「医者¹のタマゴ」の「タマゴ」は拡張した意味である、というものがある。本節でも、「笑い」に関するオノマトペの使用上の変化を明らかにすることで、「意味拡張」という概念を使って、「笑い」に関するオノマトペにおいては、意味拡張した用法があるかどうかについて考察を行っていく。

第3章でも触れたように、「笑い」を表現する「擬態語」の用法の中には、「笑い」を表現することから離れ、感情などを修飾する働きをしていることも見られた。本節では、笑う様子を表す「擬態語」の意味拡張用法について、詳細に考察を行っていく。ここでは、用例数が最も多く、用法の上でもバリエーションが多い「にこにこ」を代表的な語として検討していく。

まず、用例数が最も多い「にこにこ」の語積を見ると、それは「【さま】嬉しそうに笑みを浮かべ続けるさま」である。例文(9)～(11)から、「にこにこ」は笑う様子を表す意味を持つ語であることがわかる。

(9)一気にそう言って、コムカタを見ると、にこにこ笑っている。

(10)仕事をほったらかして話に熱中している様子を見て、何だろうと出て来た文子にも、男はにこにこ語りかけた。

(11)挨拶をしっかりと、にこにこして礼儀正しくしていればまず大丈夫だと思います。

しかし、例文(9)～(11)と少し異なっている(12)～(14)のような例文も見られる。

(12) 学校内では、いつもにこにこしていたが、突然友人に殴りかかるなどの行動がみられるようになった

(13) そしてシスター達は、いつもにこにこして何も言わなかった。

(14) ナカタさんはまじめで礼儀正しく、いつもにこにこしているので、近所の奥さんたちのあいだではとても評判がよかった。

例文(12)～(14)は、「にこにこ」と「する」が共起する例であるが、ここで現れた「にこにこ」は、笑う動作の持続ではなく、「いつも笑っている、優しい、性格がいい」という人の性格を描写する語になったという解釈をした方が適切だと考えられる。「にこにこ」の意味は笑う様子を表すことから、「優しい」「性格がいい」「人に喜ばれる」という「性格」「心情」を表すことという新しい意味を持つようになったと言える。すなわち、「にこにこ」の修飾内容は、「笑う様子」「笑う動作」という具体的な動作から、「心情」「感情」「性格」などのような内面的な感情に拡張したと見られる。

さらに、以下のような用例も見られる。

(15) にこにこ子育て相談（7月）予約不要です。

(16) にこにこ相談室【西保健センター】

(17) にこにこバラ園新鮮なバラの生花を使った花束、アレンジメントを農場から直送でお届けします。

(18) にこにこ広場は今後も11月にかけて村内各保育園で行われます。

日本語の「笑い」に関するオノマトペのそのほかの用法を考察する時も触れたが、「笑い」に関するオノマトペが名詞を後接させる用法もある。その中で、名詞を後接させる用例が最も多い「にこにこ」は、「笑顔」「顔」のような笑う動作と関連する名詞を後接させる用例が多いが、「子育て」「相談室」「広場」のような、笑う動作と全く関連のない名詞を後接させる用例も現れた。

(15)～(18)で使われた「にこにこ」の意味を考えると、(12)～(14)の「にこにこ」と同様に、「心情」「感情」を表すこととなっているが、修飾対象が人である(12)～(14)の例と異なり、(15)～(18)の「にこにこ」は場所などを修飾している。「にこにこ」と修飾対象の関係は、直接「にこにこ笑う」動作ができる「人」から、人と直接関係のない「場所」へと拡張した。すなわち、「にこにこ」がより抽象的なものを修飾するようになったと言える。

例文(12)～(14)と(15)～(18)の分析から、修飾内容から見れば、「にこにこ」の修飾内容が「笑う様子」「笑う動作」という具体的な動作から、「心情」「感情」「性格」などのような内面的な感情に拡張したことが見られる。また、修飾対象から見れば、「にこにこ」の修飾対象は、直接「にこにこ笑う」動作ができる「人」から、人と直接関係のない「場所」のような抽象的な語に至っていると言える。

また、吉村(2004)はメタファーとメトニミーの視点から、オノマトペの意味拡張のルーツを考察している。吉村(2004)は、「具体から抽象へという一方的に進む」と指摘している。すなわち、「実際の音に似ているオノマトペから次第にメタファー化して、抽象的な表現性をもつようになる」ということである。

さらに、伊東(2009)は認知言語学におけるイメージ拡張のプロセスを「物理的イメージから社会的、心理的イメージへの拡張」と捉え、オノマトペの意味拡張について、「日本語のオノマトペは聴覚から視覚、触覚、味覚などの認知機構を経て心理的イメージへと拡張している」と述べており、その拡張のプロセスが「物の様態・状態」という具体的な表現などから、「人の容姿・性格」などのような心理的・抽象的・主観的な表現へ変化していくと指摘している。

「にこにこ」の意味拡張のプロセスは吉村(2004)と伊東(2009)のような理論的な説明とも合致するものである。また、「笑い」に関するオノマトペにおいては、「にこにこ」のような反復形の語だけではなく、「にやり」「にっこり」などの語にも意味拡張用法が見られる。

以上のように、「笑い」に関するオノマトペの意味拡張用法を分析した。

「にこにこ」を代表として、「笑い」に関するオノマトペの意味拡張は、修飾

対象と修飾内容の面から用法の拡張が見られ、拡張のプロセスは具体的な表現から、心理的・抽象的な表現へ変化していくとまとめられる。

4.2 中国語側

4.1 では、日本語における「笑う様子」を表す擬態語についての意味拡張用法を検討した。ここでは前述の検討を踏まえ、中国語の意味拡張用法の有無について、考察を行う。考察に当たっては、擬態語の中で用例数の上位 2 語である“笑嘻嘻”“笑咪咪”を代表的な語としてその用法を検討していく。

中国語の「笑い」に関するオノマトペのその他の用法についての考察では、「擬態語」の用法は“的”と“地”とが後接する用法に集中していることを明らかにした。“笑嘻嘻”“笑咪咪”に“的”“地”が後接する用法としては、以下のような用例がある。

- (19)a. 学生来了，邱学华笑咪咪地说：“今天不让你做题，你能帮我办件事吗？”
- b. 一块冬泳的老少爷们喜欢大声地和他开些玩笑，老梁总是笑咪咪地看着他们。
- c. 葡萄拿着一顶新草帽给自己扇扇风，又给春喜扇扇。她笑咪咪地等着他开口。
- d. 怪不得昨天李洪文在厅里见了景雪荫，还笑嘻嘻地上去搭讪。
- e. 柳遇春笑嘻嘻地上前一步，张开臂膊，作出拥抱的姿势来
- (20)a. 小穗，就是那种即使被冤枉，脸上还是笑嘻嘻的人。
- b. 两人虽是不必开口唱，可是她向台下看着，老是那一种笑嘻嘻的样子。
- c. 他五十六岁，兴致挺好，可是喜欢生气，浓眉底下藏着一对笑咪咪的眼睛，光秃的脑袋好比一个蠢在头发窠上的鸡子。

- (21)a. 大家都喜欢她，可说是人见人爱。她聪明伶俐，整天笑嘻嘻的。
- b. 这位长着一双浅褐色眼睛、总是笑眯眯的可爱的小姑娘在电视上露面时，
颇得观众好感。
- c. 平时看上去，刑富国笑眯眯的，但在训练中他却严而近酷。

(19)であげたのは“地”が後接する用例で、これらの「笑い」に関するオノマトペは笑う様子を表現する意味だけを持つ用法だと考えられる。また、(20)と(21)は“的”が後接する用例である。(20)の用例では、オノマトペの後に来る名詞に“眼睛(目)”“样子(様子)”“人(人)”が見られる。そこから、中国語の「笑い」に関するオノマトペの修飾対象の意味範囲が拡大していると言える。しかし、修飾対象の範囲はまだ笑う主体と考えられる「人」と関連している語(例えば、人、目、表情、性格など)に留まっており、日本語のように、範囲が「人」から「場所」に至ることは見られなかった。すなわち、中国語の「笑い」に関するオノマトペの修飾対象は、日本語の「笑い」に関するオノマトペの場合と比べて、それほど拡大していないと言える。

(21)の用例では、「笑い」に関するオノマトペの修飾内容は「笑う様子」「笑う動作」という具体的な動きより、「性格」「感情」という内面的な事柄に拡張したと考えた方が適切である。(21)の用例では、“整天(一日中)”“总是(いつも)”“平时(通常)”のように時間の持続性を表す語が現れている。そのため、「笑い」に関するオノマトペは一時的、あるいはある時間帯の動作を表すわけではなく、状態や性質を表現する語であると解釈した方が理解しやすい。また、文全体の意味からも、(21)で用いられる“笑嘻嘻的”“笑眯眯的”は人の「性格が良い」「優しい」などの意味を表している。したがって、(21)の用例に示したように、中国語の「笑い」に関するオノマトペは「人の性格」を表すこともできることから、その修飾内容は具体的な動作から、「心情」「感情」「性格」などのような内面的な感情に拡張する用法があると言える。

日本語の「笑い」に関するオノマトペの意味拡張を検討する際には、その拡張のプロセスは具体的な表現から、心理的・抽象的な表現へ変化していくとまとめた。中国語の用例を分析した結果、中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味拡張のプロセスも日本語の場合と同様であると言える。しかし、修飾対象の範囲について、日本語は「人」に関連する語から「人」と関連しない語にまで至っている現象が見られたが、中国語は「人」に関連する語への拡張までしか認められなかった。日本語には「オノマトペ+名詞」というような複合名詞の構成が多く見られるのに対し、中国語には理論的にはそのような構成は成立であると考えられるが、実際の使用には好まれていない傾向がある。したがって、オノマトペに対しての捉え方に日中両言語の違いを表している。

5 まとめ

本章では辞書から日中における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの相違点を見た。日中感情オノマトペをお互いに翻訳する際に、オノマトペで対応して翻訳されている場合もあれば、対応していない場合もある。しかし、対応があるとしても、日中両言語における音韻のイメージ関係、拡張的な用法などについては、それぞれ異なっているところがあるため、翻訳は辞書レベルでもずれが多く見られた。そのため、学習者が一番使用していると思われる辞書についても、もう一度見直す必要がある。翻訳する際にも、従来のような、直感的な語釈や安直な置き換えではなく、ニュアンス的な内容までも正確に含まれている翻訳の方が、必要となることが見えてくる。

無論辞書だけでそれぞれの用法について詳しく検討することはできないが、辞書は学習者によく使用されるものであり、そこに現れた日中対訳の相違点を把握することは実際の用例の検討を進めていく上でも重要であると言える。今後は、日中対訳小説などを利用して、日中両言語における感情オノマトペが実際に使用された時に見られる、両言語の相違点を明らかにしていく必要がある。

終章

ここでは、各章の内容をまとめ、本論文の結論を示す。最後には今後の課題について述べることとする。

1 各章の内容

序章では、日中オノマトペを取り上げ、それぞれの使用実態、用法、対訳する際に見られる問題を明らかにして日中対照研究を行うことと、日中オノマトペの再分類や再定義を試みるのが本研究の目的であることを述べ、研究の意義と研究の構成について述べた。

第1章では、これまでのオノマトペに関する研究を概観し、特に日中両言語における感情オノマトペに関する先行研究を取り上げ、日中オノマトペは定義によって範囲が異なっていることや、日中対照研究も十分になされていないこと、などの問題の所在について述べた。また、先行研究の問題点を踏まえ、本研究で、「笑い」や「泣き」に関するオノマトペおよび類似表現を中心に扱うことの妥当性を示した。

第2章では、研究対象と研究方法について述べた。日本語オノマトペの研究対象は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を利用して抽出し、中国語オノマトペの研究対象は、『現代汉语语料库』(CCL)を利用して抽出した。中国語については、比較のために、日本語の擬態語相当の語を広めに取り、調整した。研究方法としては、日中コーパスを利用し、両言語における「笑い」「泣き」を軸として感情を表すオノマトペの使用実態を調査した。また、日中辞書を利用し、日中対訳に生じた問題点を明らかにした。

第3章では、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの使用実態について考察を行った。「BCCWJ」と「CCL」の用例調査を行い、日中オノマトペの使用実態について明らかにした。日本語の「笑い」に関するオノマトペにおいて、擬音語の語数が多いが、擬態語の使用率の方が高いのに対し、中国語の「笑い」に関するオノマトペにおいては、擬音語と擬態語の語数は差異がないが、擬音語の使用率の方が高いことを示した。

第4章では、「笑い」に関するオノマトペの考察結果に基づき、「泣き」に関するオノマトペの使用実態についても検討した。「BCCWJ」と「CCL」の用例調査を行い、「泣き」に関する日中オノマトペの使用実態について明らかにした。コーパスの用例調査によると、「泣き」に関するオノマトペの使用実態も「笑い」と同様に、日本語側は擬態語が多用されるが、中国語側は擬音語が多用されることを示した。第3章と第4章の調査結果から、以下のような日中オノマトペの相違点を明らかにした。

- ①日本語においても、中国語においても、「擬音語」の方が語数が多くて、使用率が高い。
- ②日本語オノマトペの使用は、擬態語の方が多用される傾向が見られる。
- ③一方、中国語オノマトペの使用は、擬音語の方が多用される傾向が見られる。

第5章では、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペを取り上げ、オノマトペの定義と音韻、形態、文法的側面から分析を行い、日中オノマトペのシステムの相違を示した。音韻的側面では、日本語オノマトペは音韻変化によって意味的対立が見られることに対し、中国語オノマトペは不明確であることを指摘する。形態的側面では、「反復形」が日中両言語に見られるが、日本語はそれ以外の語形変化があるため、バリエーションが多いことを指摘した。また、反復形は日中オノマトペにも多く見られる語形であるが、日本語オノマトペの反復形はその非反復形とペアになりやすくて、生産的な反復形と言えるのに対し、中国語オノマトペの反復形はその非反復形とペアになりにくくて、生産性が低い語彙的な反復形と言える。

第6章では、日中辞書を利用し、日中対訳に生じている問題点を明らかにした。辞書の記述から、日中オノマトペの対訳は、オノマトペで対応できることもあれば、対応できない場合もあると指摘した。さらに、オノマトペ同士が対応する場合にも、必ずしも他の語と明確に意味内容を区別できるような訳になっていないことがあると指摘した。日中対訳をする時、安易に置き換えることが多いが、イメージ喚起などの要素を考えると、ずれがある場合が数多く見られることを明らかにした。そのため、従来のような、単に語と語を意味的に近いもので結びつけるという対照研究は、感情を表すオノマトペのような感情を表現する語には適切ではないと主張した。

終章では、第3章から第6章までの議論を総括し、本研究の結論やその意義と今後の課題を述べる。

2 本論文の結論

日本語オノマトペと中国語オノマトペの定義と範囲には、相違があるため、対照研究がより一層困難になってくる。本論文では、その相違を認定しながら、より広い範囲で日中オノマトペを検討した。その結論は、主に3つの部分にまとめられる。

(1) 日中オノマトペの使用実態について

本論文では、第3章と第4章において、日中コーパスを利用し、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペと、「泣き」に関するオノマトペの使用実態をそれぞれ調査した。調査結果から、日本語においても、中国語においても、「擬音語」の方が語数が多くて、使用率が高い、という共通点を明らかにした。一方、日本語オノマトペの使用は、擬態語の方が多く使用される傾向が見られるのに対し、中国語オノマトペの使用は、擬音語の方が多く使用される傾向が見られる、という日中感情オノマトペの相違点も明らかにした。

(2) 日中オノマトペのシステム上の相違点とその再検討について

第5章において日中オノマトペを音韻・語形・文法的側面から対照した。音韻上から見ると、日本語のオノマトペは母音の対立と子音の対立で、オノマトペのペアが作りやすいのに対し、中国語においては母音も子音もバリエーションが数多くあるのに、オノマトペにおける母音・子音の対立は見られにくいと言える。すなわち、子音・母音の対立でオノマトペのペアを作りやすいことは日本語オノマトペにおけるシステムティックな特徴の1つと考えられるが、中国語では特に見られない。

語形上から見ると、反復という語構成法は、擬音語においても、擬態語においても、最も代表的な語構成方法として使用されている点は、日中両言語とも見られた共通点である。しかし、日本語は反復形以外に、「～り」型や「～っ」型の語形上のバリエーションが見られ、さらに日本語の反復形は非反復形とペアになっていることが広く見られ、「生産性的な反復形」と考えられるのに対し、中国語オノマトペの語形には主に反復形に集中しており、他のバリエーションは日本語より少ない。また、中国語オノマトペの反復形は非反復形との関連性が薄くて、ペアになりにくいいため、語彙内に限られている「語彙的な反復形」と考えられ、日本語より生産性の低い反復形と言える。

さらに、それらの特徴に基づき、日本語の擬音語と擬態語の再分類を行った。従来の分類と違い、「擬音語・擬態語」グループ内では、さらに音を真似する働きを中心としている「擬音語・擬態語」と、音をそのまま真似するわけではなく、抽象化された「擬音語・擬態語」とに再分類する必要性を提示した。すなわち、日本語オノマトペは、「擬音語」「擬音語中心の擬音語・擬態語」「擬態語中心の擬音語・擬態語」「擬態語」という4種類に分類する必要がある。その4種類を区別する際には、「音」「様子」の強弱と、「引用用法」への適応性の高低との4つの要素を合わせて判断すれば、より明確になっていると考えられる。

最後に、中国語のオノマトペにも擬態語をその範囲に入れる必要があるという考えを持ち、中国語オノマトペの再分類を試みた。従来の中国語オノマトペ研究は、擬音語だけが中国語の象声詞に入れられたが、本論文は中国語オノマトペにも擬態語を入れる必要があることを指摘した。さらに、中国語の擬態語には、音と様子両方を表す擬態語だけではなく、様子だけを表す擬態語も存在していることを明らかにした。中国語オノマトペを判断する時には、音を真似するという音の面と、反復形をしているという形の面という基準のほかに、オノマトペの反復形の特徴も合わせて判断する必要があると論じた。

(3) 日中オノマトペの翻訳における問題点について

日中オノマトペの対照研究は主に翻訳視点からの研究が多いが、日中オノマトペには認識されていない相違点がある。本論文では、辞書を利用し、日中オノマトペの翻訳における問題点について検討を行った。日中オノマトペには、辞書レベルで示されないズレがあることを示した。辞書のオノマトペに関する日中翻訳から、日本語感情オノマトペは共感を求める語として使用され、内面的な側面に注目しているが、中国語感情オノマトペはそこまで内面的な要素が含まれていない場合もある。日本語オノマトペは音の変化や、語形の変化で、意味だけではなく、イメージ喚起などの要素も含まれていることに対し、中国語はオノマトペだけでは全ての要素を含めて表現できない場合がある。すなわち、日中オノマトペの語自体における情報量が異なることが、使用する際に相違が生じる原因であると結論づけられる。そこから、日中オノマトペを対訳する時、安易に置き換えることが多いが、イメージ喚起などの要素を考えると、ズレがある場合が数多く見られることを指摘した。そのため、従来のような、単に語と語を意味的に近いもので結びつけるという対照研究は、「笑い」に関するオノマトペのような感情を表現する語には適切ではないと示した。

3 本論文の課題

先行研究を概観した際にも述べたように、今までの日中オノマトペ対照研究は、翻訳方法に関する研究が多い。それらの研究は、両言語に対応するオノマトペがあるか、なければどのように言い換えるか、あるいは省略して訳すか、というような翻訳の具体的な方法について考察している。つまり、これまでの研究の中心的な関心は、翻訳先の言語に対応するオノマトペがない場合の解決法を提示することにあつたため、対応するオノマトペがある場合にも意味の上ではずれがあるという点は十分に意識されてこなかったと言える。本論文で実施した日中辞典のオノマトペについての検討を踏まえれば、両言語に対応するオノマトペがある場合にも、意味の上で適切に翻訳できているかという点については、更に考察していく必要があると言える。

今後は、日中対訳コーパスや、日中対訳小説などを利用して、日中オノマトペの実際の対訳状況を把握して対訳の実態を記述する必要がある。また、使用場面などを加えて、日中オノマトペが含んでいる意味的素性を分析することで、日中両言語におけるオノマトペの相違点をより詳細に明らかにすることを、今後の課題としたい。

参考文献

【日本語の文献】（五十音順）

- 秋田喜美(2017)「外国語にもオノマトペはあるの？」窪菌晴夫編「オノマトペの謎」,岩波書店.
- 秋元美晴(2007)「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26(6): pp. 24-35, 明治書院.
- 浅野鶴子編・金田一春彦解説(1978)『擬音語・擬態語辞典』,角川書店.
- 阿刀田稔子・星野和子(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』第2版,くろしお出版
- 天沼寧(1974)『擬音語・擬態語辞典』,東京堂出版.
- 飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟(2012)「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究と日本語教育』5: pp. 46-54,『日中言語研究と日本語教育』編集委員会.
- 池上嘉彦(1975)『意味論:意味構造の分析と記述』,大修館書店.
- 石黒圭(2008)「オノマトペとは」『国文学』10: pp. 24-32.
- 伊東真美(2009)「日本語のオノマトペの意味拡張におけるイメージの拡張プロセスについて」『日韓比較言語文化研究』(2): pp. 59-79, 国際日韓比較言語学会.
- 王冠華(2004)「日本語の擬音語・擬態語の中国語訳の表現について」『経営研究』第17巻: pp. 257-279.
- 大坪併治(1989)『擬声語の研究』,明治書院.
- 大野晋(1978)『日本語の文法を考える』,岩波書店.
- 大堀寿夫(2002)『認知言語学』,東京大学出版会.
- 荻阪直行(1999)『感性の言葉を研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』,新曜社.
- 小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

- 小野正弘(2015)「オノマトペの意味変化」『日本語学』34-11(9): pp.12-21, 明治書院.
- 小野正弘(2017)「オノマトペの対照研究のために——中国語にオノマトペはありますか?——」『日中言語対照研究論集』19.
- 夏逸慧(2019a)「日本語における「笑い」に関するオノマトペの音韻形態的考察」,『日本語教育方法研究会誌』25(2):pp. 124-125.
- 夏逸慧(2019b)「音象徴に基づく「笑い」に関する擬音語の日中対照研究」,『日本語教育方法研究会誌』26(1): pp.70-71.
- 影山太郎(2006)「擬態語動詞の統語構造」『人文論究』56(1): pp.83-101, 関西学院大学人文学会.
- 笈寿雄(1993)「一般語彙となったオノマトペ」『言語』22(6): pp.38-45.
- 笈寿雄・田守育啓(1993)『オノマトピア—擬音・擬態語の楽園』, 勁草書房.
- 角岡賢一(1993)「日本語の擬似オノマトペ—日本語と中国語の接点—」『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房, 所収.
- 角岡賢一(2006)「日本語オノマトペ語彙の形態論的考察」『龍谷大学国際センター研究年報』15: pp.29-43.
- 角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』, くろしお出版.
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』, 東京堂出版.
- 金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房.
- 金田一春彦(1978)『擬音語・擬態語辞典』浅野鶴子編, 角川書店.
- 金田一春彦(2004)『金田一春彦作集 第三巻』, 講談社.
- 窪園晴夫(2005)「日本語音韻論に見られる非対称性」『音声研究』9(1):pp.5-19.
- 窪園晴夫編(2017)『オノマトペの謎』, 岩波書店.
- 侯仁鋒・松尾美穂(2019)「マンガにおけるオノマトペの中国語訳についての考察」『県立広島大学人間文化学部紀要』14: pp.75-91, 県立広島大学.
- 呉川(2005)『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』, 白帝社.

- 小林英夫 (1933) 『国語音象徴研究』, 岩波書店.
- 蔡嘉昱 (2022) 『副詞的用法を持つ漢語の中日対照研究—疊語形漢語を中心に—』筑波大学博士論文.
- 篠原和子・宇野良子編 (2013) 『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味』ひつじ書房.
- 砂岡和子 (1990) 「現代中国語のオノマトペ」 『学習院大学言語共同研究所紀要』 13:83-96, 学習院大学人文科学研究所.
- 瀬戸口律子 (1984) 「擬音語・擬態語表現(日本語-中国語)について」 『大東文化大学紀要』 (22): pp. 1-17, 大東文化大学.
- 高橋悦子 (2007) 「日本語学習者のための擬音語・擬態語サイト——「日本語を楽しもう! 擬音語って? 擬態語って?」の作成——」 『日本語学』 26(7): pp. 57-59.
- 武田みゆき (2001) 「中国語にみる共感覚比喩についての一考察: 擬音語の擬態語化をめぐる」 『ことばの科学』 14: p. 107.
- 玉岡賀津雄, 木山幸子, 宮岡弥生 (2011) 「新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン」 『言語研究』 139: pp. 63-64.
- 玉村文郎 (1979) 「日本語と中国語における音象徴語」 『大谷女子大学国文』 9号 (大河内康憲編 1992 『日本語と中国語の対照研究論文集』, pp. 377-389, くろしお出版所収).
- 玉村文郎 (1984) 「音象徴語の語形 (その1)」 『同志社国文学』 24: pp. 74-79.
- 田守育啓 (1993) 「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」 『月刊言語』 (オノマトペ特集号), pp. 70-78, 大修館.
- 田守育啓 (1998) 「日本語オノマトペ —多様な音と様態の表現—」 『日本音響学会誌』 54 卷 3 号: pp. 215-222, 日本音響学会.
- 田守育啓・ローレンス スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味』 (日英語対照研究シリーズ 6), くろしお出版.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音語・擬態語を楽しむ』, 岩波書店.

- 田守育啓 (2004) 「宮沢賢治のオノマトペ」 影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型－柴谷方良教授還暦記念論文集』 pp. 199-213, くろしお出版.
- 田守育啓 (2010) 『賢治オノマトペの謎を解く』 大修館.
- 丹野真智俊 (2005) 『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える ー日本語音韻の心理学的研究ー』, あいり出版社.
- 丹野真智俊 (2007) 『オノマトペ《擬音語・擬態語》をいかす ークオリアの言語心理学ー』, あいり出版社.
- 趙寅秋 (2014) 「擬音語の擬態語化についての日中対照研究－日本語「ABAB」型オノマトペ両用語と中国語「ABB」型形容詞を例として」 『比較社会文化研究』 35, pp. 41-51.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版.
- 陶振孝 (1992) 「中国語と日本語の「擬声語」についての対照」 『講座日本語教育』 27, 早稲田大学語学教育研究所.
- 中里理子 (2007) 「笑いを描写するオノマトペの変遷：中古から近代にかけて」 『上越教育大学研究紀要』 26: pp. 1-14, 上越教育大学.
- 中里理子 (2017) 『オノマトペの語義変化研究』, 勉誠出版.
- 那須昭夫 (2002) 『日本語オノマトペの語形成と韻律構造』 筑波大学博士論文.
- 仁田義雄 (1997) 『副詞的表現の諸相』, ひつじ書房.
- 野口宗親 (1995) 『中国語擬音語辞典』, 東方書店.
- 野口宗親 (1977) 「中国語の擬声語の特質について」 『熊本大学教育学部紀要』 26号: p. 15-24.
- 橋本喜代太, 竹内和広 (2010) 「外国人日本語学習者のオノマトペ習得支援システムのプロトタイプ開発」 『日本教育工学会論文誌』 34, pp. 69-71.
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語・擬態語用法辞典』 東京堂書店.
- 日向茂男・日比谷潤子 (1989) 『擬音語・擬態語』 (外国人のための日本語例文・問題シリーズ 14), 荒竹出版.
- 日向茂男・笹目実 (1999) 「語形からみた擬音語・擬態語 2」 『東京学芸大学紀要 第2部門人文科学 50』.

- 庞焱 (2016) 「翻訳から見る日中両言語の擬音語・擬態語文法機能の異同について」 『神戸女学院大学論集』.
- 彭飛 (2007) 「ノンネイティブから見た日本語のオノマトペの特徴: 日本語学, Vol. 26: p. 48. 明治書院.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』 (シリーズ認知言語学入門 (第3巻), 大修館書店.
- 糸山洋介 (1995) 「多義語のプロトタイプの意味またはそれに近い意味の認定の方法と実際——意味転用の——方向性: 空間から時間へ——」 『東京大学言語学論集』 14: pp. 621-639, 東京大学.
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』 光文社.
- 山口仲美 (2003) 『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』, 講談社.
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社.
- 李大年 (2012) 『日本語と韓国語における擬態語の対照研究—日本及び韓国の少女マンガにおける感情を表す擬態語を中心に—』 花書院.
- 劉玲 (2004) 「漢語オノマトペの受容に関する研究—AA (ト) 型の語の意味変化を中心に—」 筑波大学博士論文.
- 呂佳蓉 (2004) 「比喩としてのオノマトペ—『ころころ』と『圓滾滾』」 『日本認知言語学会論文集』 4: pp. 480-483.
- Waida Toshiko (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures. 『女子大文学 (外国文学篇)』 36 : pp. 55-79. (大阪女子大学英文学科).

【中国語の文献】（アルファベット順）

- 鲍海涛(1985)《谈 ABB 式形容词及其后缀》，《齐齐哈尔 师范学院学报(哲学社会科学版)》3:pp. 72-77.
- 戴丽(1999)《ABB 类形容词的构成要素及其性质》，《社科纵横》1:pp. 67-69.
- 耿二岭(1986)《汉语拟声词》，湖北教育出版社.
- 耿二岭(2009)《汉语象声词的民族特点》，《汉语学习》5 月刊:pp. 69-74.
- 郭锐(2002)《现代汉语词类研究》，商务印书馆.
- 郝文华(2006)《关于 ABB 式形容词构词方式的思考》，《现代语文(语言研究版)》7:pp. 41-42.
- 郝文华(2006)《ABB 式形容词的构词方式》，《科教文汇》9:pp. 60-61.
- 郝文华(2007)《ABB 式形容词 A 与 BB 的关系》，《湖北 民族学院学报(哲学社会科学版)》4:pp. 113-116.
- 李镜儿(2007)《现在汉语拟声词研究》，学林出版社.
- 李劲荣(2006)《ABB 式状态形容词的量级表现及其成因》，《宁夏大学学报(人文社会科学版)》4:pp. 87-91.
- 李劲荣(2008)《ABB 式形容词的构成方式》，《赣南师范学院学报》1:pp. 16-23.
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》，商务印书馆.
- 吕叔湘·朱德熙(1979)《语法修辞讲话》，中国青年出版社
- 刘月华(2001)《实用现代汉语语法》，商务印书馆.
- 邵敬敏(1981)《拟声词初探》，《语言教学与研究》第四期(总第十期): pp. 57-66, 语言教学与研究出版社.
- 邵敬敏(1990)《ABB 式形容词的动态研究》，《世界汉语教学》1:pp. 19-26.
- 申跃(2006)《浅谈 ABB 式形容词的结构及特点》，《语文学刊》22:pp. 123-124.
- 王力(1943)《中国现代语法》(上卷)，商务印书馆.
- 辛尚奎·周成(1989)《试论 ABB 式形容词》，《内蒙古大学学报(哲学社会科学版)》4:pp. 101-107.
- 徐一平·譙燕·吴川·施建军(2010)《日语拟声拟态词研究》，学苑出版社.
- 许罗莎(2005)《现代日语感情词研究》，北京大学出版社.

- 薛玉萍(2005)《通过义素分析看 ABB 型形容词》，《语言与翻译》4:pp. 37-41
- 杨国学(1999)《形容词“ABB”结构的修辞特点》，《当代修辞学》1:pp. 18-19.
- 杨月枝(2015)《也谈拟声词拟态词及其翻译》，《日语学习与研究》(4):120-127.
- 张国宪(1995)《现代汉语的动态形容词》，《中国语文》第三期.
- 张国宪(2006)《现代汉语形容词功能与认知研究》，商务印书馆.
- 张谊生(2000)《现代汉语副词研究》，学林出版社.
- 朱德熙(1956)《现代汉语形容词研究》，《语言研究》第一期.
- 朱德熙(1982)《语法讲义》，商务印书馆.
- 祝东平·刘兰玲(2001)《ABB 型形容词的结构》，《东疆学刊》18(1):pp. 88-89.

【用例出典】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)日本国立国語研究所

『现代汉语语料库』(CCL)北京大学中国语言学研究中心

各章と既発表論文との関係

序章

新規執筆

第1章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

孫逸 (2019) 《日语感情拟声拟态词的语法特征辨析—以与时体的共现关系为中心—》『汉日语言对比研究论丛』汉日对比语言学会, 第10辑: pp. 226-237

第2章 研究対象と研究方法

新規執筆

第3章 「笑い」に関するオノマトペ

孫逸 (2021) 「日中オノマトペにおける「笑い」表現の使用とその日中対訳」『日本語と日本文学』第67号.

孫逸 (2021) 「日中対照から見る「笑い」に関するオノマトペの特徴」『筑波日本語研究』, 筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室, 第25号

第4章 「泣き」に関するオノマトペ

孫逸 (2022) 「日中両言語における「泣き」に関するオノマトペの使用について」『筑波日本語研究』第26号.

第5章 日中オノマトペのシステムについて

孫逸 (2023) 「日中感情オノマトペの使用実態から見る反復形の相違について」『筑波日本語研究』第27号.

第6章 オノマトペに関する日中翻訳

孫逸 (2021) 「日中オノマトペにおける「笑い」表現の使用とその日中対訳」『日本語と日本文学』第67号

終章

新規執筆

※全ての既発表論文に大幅な修正・加筆を施した